

平成 29 年度

千葉県

## 袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書

百々目木 C 遺跡第 4 次調査

鼻欠遺跡・鼻欠古墳群第 3・4 次調査

中六遺跡第 23 次調査

兔谷台遺跡

宮ノ越貝塚

平成 30 年 3 月

袖ヶ浦市教育委員会



平成 29 年度

千葉県

# 袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書

ど ど め  
百々目木C遺跡第4次調査

はなかけ はなかけ  
鼻欠遺跡・鼻欠古墳群第3・4次調査

ちゅうろ  
中六遺跡第23次調査

うさぎやつだい  
兔谷台遺跡

みやのこし  
宮ノ越貝塚

平成 30 年 3 月

袖ヶ浦市教育委員会



## 序 文

袖ヶ浦市は、東京湾東岸のほぼ中央部に位置し、南部には小櫃川によって形成された肥沃な田園地帯、北部には下総台地の南端にあたる台地が広がっています。市内には数多くの遺跡が所在しており、古より人類が生活をしてきた痕跡は、この土地が人々の居住に適した恵まれた立地・自然環境であったことを物語っています。

近年、東京湾アクアラインや東関東自動車道などの広域幹線道路の整備による利便性の向上から、北部・沿岸部は首都圏のベッドタウンとして開発が進んでいます。理由は異なりますが、現在においても居住に適した土地であることに変わりはないようです。本市は、恵まれた立地を生かし、袖ヶ浦駅海側地区をはじめとするまちづくりにより、人・物の集まる場所として、更なる発展を見込んでいます。

しかし、発展に伴う開発事業によって、保存が難しく、破壊せざるをえない遺跡が多いことも事実であり、開発と遺跡の共存は容易ではありません。そこで本市では、国及び県の補助を受け、開発等に先立つ発掘調査を実施し、地中に維持することができなくなった埋蔵文化財を記録として後世に残しています。また、市内の重要な遺跡に対しては、保存目的の発掘調査を実施し、遺跡の重要性を一層明らかにし、今後の保存・活用について検討してまいります。

これらの発掘調査の記録を取りまとめた本書が、学術資料として活用されるだけでなく、多くの市民の皆様を目にとまり、身近に存在する埋蔵文化財を認識し、郷土に対する理解と関心を深める契機になれば幸いです。

最後になりましたが、千葉県教育庁教育振興部文化財課の方々には、発掘調査の実施から本書の刊行に至るまでご指導を頂き、厚くお礼申し上げます。また、土地所有者及び関係者の皆様には、多大な御協力と御理解を頂きましたことに対しまして心から感謝申し上げます。

平成30年3月

袖ヶ浦市教育委員会  
教育長 御園 朋夫



## 例 言

1. 本書は、平成 29 年度に発掘作業を実施した百々目木 C 遺跡第 4 次調査、鼻欠遺跡・鼻欠古墳群第 3・4 次調査、中六遺跡第 23 次調査、兎谷台遺跡及び平成 27 年度に発掘作業を実施した宮ノ越貝塚を収録した平成 29 年度袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は、国庫・県費補助事業として千葉県教育委員会の指導を受け、発掘及び整理事業、報告書刊行までの業務を袖ヶ浦市教育委員会が実施した。
3. 発掘及び整理事業期間は下記のとおりである。

### 百々目木 C 遺跡第 4 次調査

発掘：平成 29 年 4 月 14 日～同年 4 月 21 日 整理：平成 29 年 11 月 15 日～平成 30 年 1 月 30 日

### 鼻欠遺跡・鼻欠古墳群第 3・4 次調査

発掘：平成 29 年 6 月 12 日～同年 7 月 4 日 整理：平成 29 年 12 月 4 日～平成 30 年 2 月 28 日

### 中六遺跡第 23 次調査

発掘：平成 29 年 7 月 21 日～同年 7 月 31 日 整理：平成 29 年 11 月 30 日～平成 30 年 2 月 26 日

### 兎谷台遺跡

発掘：平成 29 年 8 月 7 日～同年 8 月 18 日 整理：平成 29 年 12 月 4 日～平成 30 年 2 月 28 日

### 宮ノ越貝塚

発掘：平成 28 年 2 月 2 日～同年 2 月 17 日 整理：平成 28 年 2 月 18 日～平成 30 年 2 月 15 日

4. 各遺跡の所在地は、下記のとおりである。

### 百々目木 C 遺跡第 4 次調査

袖ヶ浦市蔵波字百々目木 2, 905 番地 6

### 鼻欠遺跡・鼻欠古墳群第 3・4 次調査

袖ヶ浦市神納字下り 3, 181 番地 7

### 中六遺跡第 23 次調査

袖ヶ浦市蔵波字中六 1, 259 番地 16、1, 261 番地 3

### 兎谷台遺跡

袖ヶ浦市久保田字二ノ山 1, 534 番地 2 の一部

### 宮ノ越貝塚

袖ヶ浦市下新田字末園崎 1, 923 番地

5. 各遺跡の発掘及び整理事業の担当者は、下記のとおりである。

### 百々目木 C 遺跡第 4 次調査

発掘：大河原務・鎌田望里・簗島正広

整理：大河原務

### 鼻欠遺跡・鼻欠古墳群第 3・4 次調査

発掘：鎌田望里・簗島正広 整理：鎌田望里

### 中六遺跡第 23 次調査

発掘：鎌田望里・簗島正広 整理：鎌田望里

### 兎谷台遺跡

発掘：鎌田望里・簗島正広 整理：鎌田望里

### 宮ノ越貝塚

発掘：田中大介・西原崇浩・前田雅之・大河原務

整理：田中大介・大河原務

6. 遺跡のコードは、百々目木 C 遺跡（SG 037）、鼻欠遺跡・鼻欠古墳群（SG 122）、中六遺跡（SG 013）、兎谷台遺跡（SG 124）、宮ノ越貝塚（SG 121）である。各遺跡の調査は、数次にわたり実施されているため、括弧付けの数字で調査次数を示している。（第 4 次調査 → （4））

7. 本書の執筆者は、下記のとおりである。なお、第6章宮ノ越貝塚における自然遺物の分析及び各原稿執筆については外部の方々に依頼し、玉稿を賜った。
- 序章・第2・6章1～4(2)、5：大河原務
- 第3～5章：鎌田望里
- 第6章4(3)微小貝類遺体：黒住耐二(千葉県立中央博物館)
- 第6章4(4)脊椎動物遺体：樋泉岳二(早稲田大学)
8. 本書の第6章宮ノ越貝塚における縄文時代中期の土器分類については、西野雅人氏(千葉市埋蔵文化財センター)に依頼した。
9. 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
- |      |         |              |                              |
|------|---------|--------------|------------------------------|
| 第1図  | 国土地理院発行 | 1/25,000 地形図 | 「奈良輪」「姉崎」「木更津」「上総横田」         |
| 第2図  | 袖ヶ浦市発行  | 1/2,500 地形図  | 「No.13」「No.18」               |
| 第6図  | 袖ヶ浦市発行  | 1/2,500 地形図  | 「No.17」                      |
| 第9図  | 袖ヶ浦市発行  | 1/2,500 地形図  | 「No.13」「No.14」「No.18」「No.19」 |
| 第11図 | 国土地理院発行 | 1/25,000 地形図 | 「姉崎」                         |
| 第12図 | 袖ヶ浦市発行  | 1/2,500 地形図  | 「No.15」「No.20」               |
| 第14図 | 袖ヶ浦市発行  | 1/2,500 地形図  | 「No.18」「No.25」               |
10. 本書で使用したトレンチ名や遺構名は、基本的に発掘時のものを使用した。
11. 今回の調査に伴う遺物・記録類等は、袖ヶ浦市教育委員会で保管する予定である。
12. 発掘作業から報告書刊行に至るまで、千葉県教育委員会をはじめ、黒住耐二、樋泉岳二、西野雅人の各氏には多大なるご指導、ご協力を頂いた。また、現地での作業においては調査区の土地所有者各位のご協力をいただいた。記して謝意を表したい。(個人五十音順、敬称略)



# 目次

序文	
例言	
序章 調査概要	1
1. 調査に至る経緯	
2. 調査経過	
3. 調査組織	
第2章 百々目木C遺跡(4)	3
1. 周辺の遺跡と環境	
2. 調査と遺跡の概要	
3. まとめ	
第3章 鼻欠遺跡・鼻欠古墳群(3)(4)	8
1. 周辺の遺跡と環境	
2. 調査と遺跡の概要	
3. まとめ	
第4章 中六遺跡(23)	12
1. 周辺の遺跡と環境	
2. 調査と遺跡の概要	
3. まとめ	
第5章 兎谷台遺跡	15
1. 周辺の遺跡と環境	
2. 調査と遺跡の概要	
3. まとめ	
第6章 宮ノ越貝塚	18
1. 周辺の遺跡と環境	
2. 調査概要	
3. 検出された遺構と遺物	
4. 自然遺物の分析	
5. まとめ	

# 挿 図 目 次

第1図	調査遺跡位置図
第2図	百々目木C遺跡調査区位置図
第3図	百々目木C遺跡(4)遺構確認状況図、断面図
第4図	百々目木C遺跡(4)出土土器実測図
第5図	百々目木C遺跡(4)出土土器・石器実測図
第6図	鼻欠遺跡・鼻欠古墳群調査区位置図
第7図	鼻欠遺跡・鼻欠古墳群(3)(4)遺構確認状況図、断面図
第8図	鼻欠1号墳周溝確認状況図、断面図
第9図	中六遺跡調査区位置図
第10図	中六遺跡(23)遺構確認状況図、断面図、出土土器実測図
第11図	兎谷台遺跡周辺遺跡位置図
第12図	兎谷台遺跡調査区位置図
第13図	兎谷台遺跡遺構確認状況図、断面図、出土土器実測図
第14図	宮ノ越貝塚調査区位置図
第15図	宮ノ越貝塚遺構確認状況図
第16図	宮ノ越貝塚2トレンチ遺構確認状況図、断面図、出土土器実測図
第17図	宮ノ越貝塚6・9・13トレンチ遺構確認状況図、シカ頭骨出土状況図、断面図
第18図	宮ノ越貝塚17・18トレンチ遺構確認状況図、断面図、出土土器実測図
第19図	宮ノ越貝塚出土土器実測図①
第20図	宮ノ越貝塚出土土器実測図②
第21図	宮ノ越貝塚出土土器実測図③
第22図	宮ノ越貝塚出土土器実測図④
第23図	宮ノ越貝塚出土土器実測図⑤
第24図	宮ノ越貝塚出土土製品実測図

第 25 図	宮ノ越貝塚出土石器実測図
第 26 図	宮ノ越貝塚出土貝製品・骨角歯牙製品実測図
第 27 図	宮ノ越貝塚貝類組成（時期別）
第 28 図	宮ノ越貝塚貝類計測値ヒストグラム
第 29 図	宮ノ越貝塚の陸産貝類組成
第 30 図	宮ノ越貝塚の貝層サンプルから水洗選別によって検出された脊椎動物遺体のメッシュ別の比率（N I S P 比）
第 31 図	宮ノ越貝塚の貝層サンプルから水洗選別によって検出された魚類遺体組成の層位的変化（N I S P 比）

## 表 目 次

第 1 表	百々目木C遺跡（4）出土土器計測表
第 2 表	宮ノ越貝塚遺構出土土器観察表
第 3 表	宮ノ越貝塚トレンチ別出土遺物計測表
第 4 表	宮ノ越貝塚出土土器観察表①
第 5 表	宮ノ越貝塚出土土器観察表②
第 6 表	宮ノ越貝塚出土土器観察表③
第 7 表	宮ノ越貝塚出土土製品観察表
第 8 表	宮ノ越貝塚出土石器観察表
第 9 表	宮ノ越貝塚貝層サンプル一覧
第 10 表	宮ノ越貝塚貝層サンプル内容物計測表
第 11 表	宮ノ越貝塚検出貝類種名表
第 12 表	宮ノ越貝塚貝類組成表（時期別）
第 13 表	宮ノ越貝塚貝類組成表（貝層サンプル別）
第 14 表	宮ノ越貝塚貝類計測表①
第 15 表	宮ノ越貝塚貝類計測表②
第 16 表	宮ノ越貝塚の貝層サンプルから得られた微小貝類遺体の分類学的位置と生息場所
第 17 表	宮ノ越貝塚の貝層サンプルから抽出された貝類遺体等
第 18 表	宮ノ越貝塚から採集された脊椎動物遺体の種名一覧
第 19 表	宮ノ越貝塚から現地採集された脊椎動物遺体の同定結果①
第 20 表	宮ノ越貝塚から現地採集された脊椎動物遺体の同定結果②
第 21 表	宮ノ越貝塚から現地採集された脊椎動物遺体の組成（N I S P）
第 22 表	宮ノ越貝塚の貝層サンプルから水洗選別によって検出された脊椎動物遺体の同定結果①
第 23 表	宮ノ越貝塚の貝層サンプルから水洗選別によって検出された脊椎動物遺体の同定結果②
第 24 表	宮ノ越貝塚の貝層サンプルから水洗選別によって検出された脊椎動物遺体の組成（N I S P）

## 図 版 目 次

図版 1	百々目木C遺跡（4）①	図版 2	百々目木C遺跡（4）②
図版 3	鼻欠遺跡・鼻欠古墳群（3）（4）	図版 4	中六遺跡（23）
図版 5	兎谷台遺跡	図版 6	宮ノ越貝塚①
図版 7	宮ノ越貝塚②	図版 8	宮ノ越貝塚③
図版 9	宮ノ越貝塚④	図版 10	宮ノ越貝塚⑤
図版 11	宮ノ越貝塚⑥	図版 12	宮ノ越貝塚⑦
図版 13	宮ノ越貝塚⑧	図版 14	宮ノ越貝塚⑨

# 序章 調査概要

## 1. 調査に至る経緯

袖ヶ浦市教育委員会では、市内に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地内において計画される中小企業等の開発行為に際して、遺跡の実態を把握するための確認調査や、個人宅地造成に際して、本調査を実施するため、国及び県の補助を受けている。また、重要な遺跡の保存目的の範囲確認調査についても補助を受けて実施している。

平成 29 年度は、次の 5 件についての発掘調査を実施した。

- 1 百々目木 C 遺跡（4）（確認調査）…………… 宅地造成に伴う調査
- 2 鼻欠遺跡・鼻欠古墳群（3）（4）（確認調査・本調査）…………… 個人住宅建設に伴う調査
- 3 中六遺跡（23）（確認調査）…………… 宅地造成に伴う調査
- 4 兎谷台遺跡（確認調査）…………… 埋立造成に伴う調査
- 5 宮ノ越貝塚（確認調査）…………… 保存目的の範囲確認に伴う調査

## 2. 調査経過

### 百々目木 C 遺跡（4）

4月14日：基準点測量、機材搬入、重機搬入、重機によるトレンチ掘削、遺構確認、平面実測、写真撮影、重機による埋戻し、17日：重機によるトレンチ掘削、遺構確認、平面実測、写真撮影、重機による埋戻し、18日：雨天のため作業中止、19～20日：重機によるトレンチ掘削、遺構確認、平面実測、写真撮影、重機による埋戻し、21日：遺構確認、平面・断面実測、写真撮影、重機による埋戻し、重機搬出、機材搬出

### 鼻欠遺跡・鼻欠古墳群（3）（4）

6月12日：基準点測量、仮設トイレ設置、環境整備、13日：機材搬入、重機搬入、重機によるトレンチ掘削、午後は雨天のため作業中止、14日：遺構確認、平面実測、写真撮影、15日：重機による調査区東側表土掘削、遺構確認、周溝部掘削、重機搬出、16日：周溝部掘削、19日：遺構確認、周溝部掘削、20日：断面実測、写真撮影、21日：雨天のため作業中止、22日：写真撮影、周溝部掘削、23日：写真撮影、測量、26日：断面実測、27日：写真撮影、28日：雨天のため作業中止、29日：重機搬入、重機による調査区東側埋戻し、重機による調査区西側表土掘削、遺構確認、30日：遺構掘削、断面実測、写真撮影、7月4日：重機による調査区西側埋戻し、重機搬出、機材搬出、環境整備、仮設トイレ撤去、写真撮影

### 中六遺跡（23）

7月21日：仮設トイレ設置、基準点測量、環境整備、写真撮影、24日：機材搬入、重機搬入、重機によるトレンチ掘削、遺構確認、写真撮影、25日：遺構確認、平面実測、26日：雨天のため作業中止、27日：遺構確認、断面・平面実測、写真撮影、重機による埋戻し、重機搬出、機材搬出、31日：環境整備、仮設トイレ撤去、写真撮影

### 兎谷台遺跡

8月7日：環境整備、写真撮影、8日：雨天のため作業中止、9日：機材搬入、重機搬入、重機によるトレ

ンチ掘削、遺構確認、写真撮影、平面実測、10日：重機によるトレンチ掘削、遺構掘削、写真撮影、平面・断面実測、17日：重機による埋戻し、重機搬出、機材搬出、写真撮影、18日：環境整備、仮設トイレ撤去

### 宮ノ越貝塚

平成 27 年度袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書を参照

## 3. 調査組織

調査主体 袖ヶ浦市教育委員会

教 育 長	御園 朋夫	教 育 部 長	石井 俊一
教育部次長	高橋 広幸	教育部参事兼生涯学習課長	小阪 潤一郎
生涯学習課文化振興班			
副課長兼文化振興班長	稲葉 理恵	主 査	田中 大介
副主査	簗島 正広	副主査	大河原 務
学芸員	鎌田 望里		



第 1 図 調査遺跡位置図 (1 : 50,000)

## 第2章 百々目木C遺跡（4）

### 1. 周辺の遺跡と環境（第2図）

百々目木C遺跡は、袖ヶ浦台地の中央部に位置し、境川上流域左岸の標高約26～28mの台地上に展開する。本遺跡は、平成元年から平成26年までに3回の確認調査・本調査が実施されている。遺跡西部の緩斜面を調査した第1・2次調査では、縄文時代早期条痕文期の炉穴や陥穴、縄文時代早期捺糸文土器、条痕文土器が出土した。遺跡北東部の平坦面を調査した第3次調査では、近世の焼土跡が2基検出されたが、縄文時代の遺構・遺物は検出されなかった。今回の第4次調査は、第1次調査区北西部の緩斜面にあたる。本遺跡周辺は、北側に隣接する清水頭遺跡をはじめ、堂庭山B遺跡・正源戸B遺跡など縄文時代早期の炉穴が検出される遺跡が密集している。これらの遺跡は、本遺跡の北東側約0.7kmに位置する縄文時代早期茅山式期の大規模炉穴群が検出された寒沢遺跡、本遺跡の西側約1.2kmに位置する縄文時代早期子母口式期の多数の炉穴が検出された中六遺跡の2遺跡とその他の小規模な遺跡とに分けられる。縄文時代早期における本遺跡周辺は、寒沢遺跡・中六遺跡を中心に、その周辺に小規模な各遺跡が点在していたものと推測される。

### 2. 調査と遺跡の概要（第3～5図、第1表、図版1・2）

**調査方法** 確認調査は、宅地造成事業に伴い7,154.41㎡を調査対象として実施した。トレンチは、2m×10mを基本に設定し、全部で31箇所設置した。ただし、宅地造成事業の工事計画や抜根の影響を考慮し、調査対象地南東部・北東部はトレンチを一部設定しなかった。また、遺構が検出されたトレンチは必要に応じて拡幅した。トレンチの掘削は重機により行い、遺構確認作業は人力により行った。

**遺構・遺物** 本調査範囲の基本層序は、Ⅰ層：現表土である黒色土層（30～40cm）、Ⅱa層：褐色土層（10～20cm）、Ⅱb層：焼土等を含む褐色土層（10～15cm）、Ⅱc層：ソフトローム漸移層（5～10cm）、Ⅲ層：ソフトローム層である。Ⅱc層より明確な遺構の有無が確認できたが、遺物はⅡb層以下より出土している。14・15トレンチからはⅠ層下に、新規テフラ・厚い黒色土層が確認でき、Ⅱa～Ⅲ層は検出されなかった。堆積状況から谷部の存在を推測する。

遺構は、5トレンチで土坑1基、23・25トレンチからそれぞれ炉穴1基が検出された。5トレンチから検出された土坑は、長軸1.8m、短軸1.1mの長楕円形を呈する。同トレンチからは遺物が出土していないが、隣接する第1次調査区からは同規模の縄文時代の土坑が検出されていることから、縄文時代のもものと推測する。23トレンチから検出された炉穴は長軸1.9m、短軸0.9mの長楕円形を呈し、25トレンチから検出された炉穴は長軸1.1m、短軸0.6mの長楕円形を呈する。両トレンチとも縄文時代早期の土器が多数出土していることから、同時期の遺構と推測する。

出土遺物は、土器2,945.00g、石器6点144.16g、礫3,428.31gである。1～13は捺糸文系の土器である。1・2は口縁部片、3～13は胴部片である。1の口唇部は若干外反し、施文はされない。胴部は縦位に捺糸文が施文される。2の口唇部はやや肥大し、ほぼ真横まで外反する。口縁～頸部には横位に縄文が施文され、不鮮明ではあるが、口唇部にも縄文の施文が確認できる。3は斜位、4～13は縦位の捺糸文が施文され、6・7・10は条間が疎らである。14は胴部片で殻表圧痕文が施文される。15～31は胎土に繊維を含む。15～17は口縁部片、18～31は胴部片である。15は口縁部につまみ出した隆起線文をもち、内外面に横位の捺痕が残る。16・17は内外面に条痕文が施文される。16は口唇部に連続する刺突文が施文される。17は波状口縁である。18は外面に縦位・横位の沈線が施文され、内面には縦位の捺痕が残る。19～21は内外面に捺痕が残る。21は胎土に小礫を多く含む。22～31は内外面に条痕文を施文する。31は条痕文を施文後

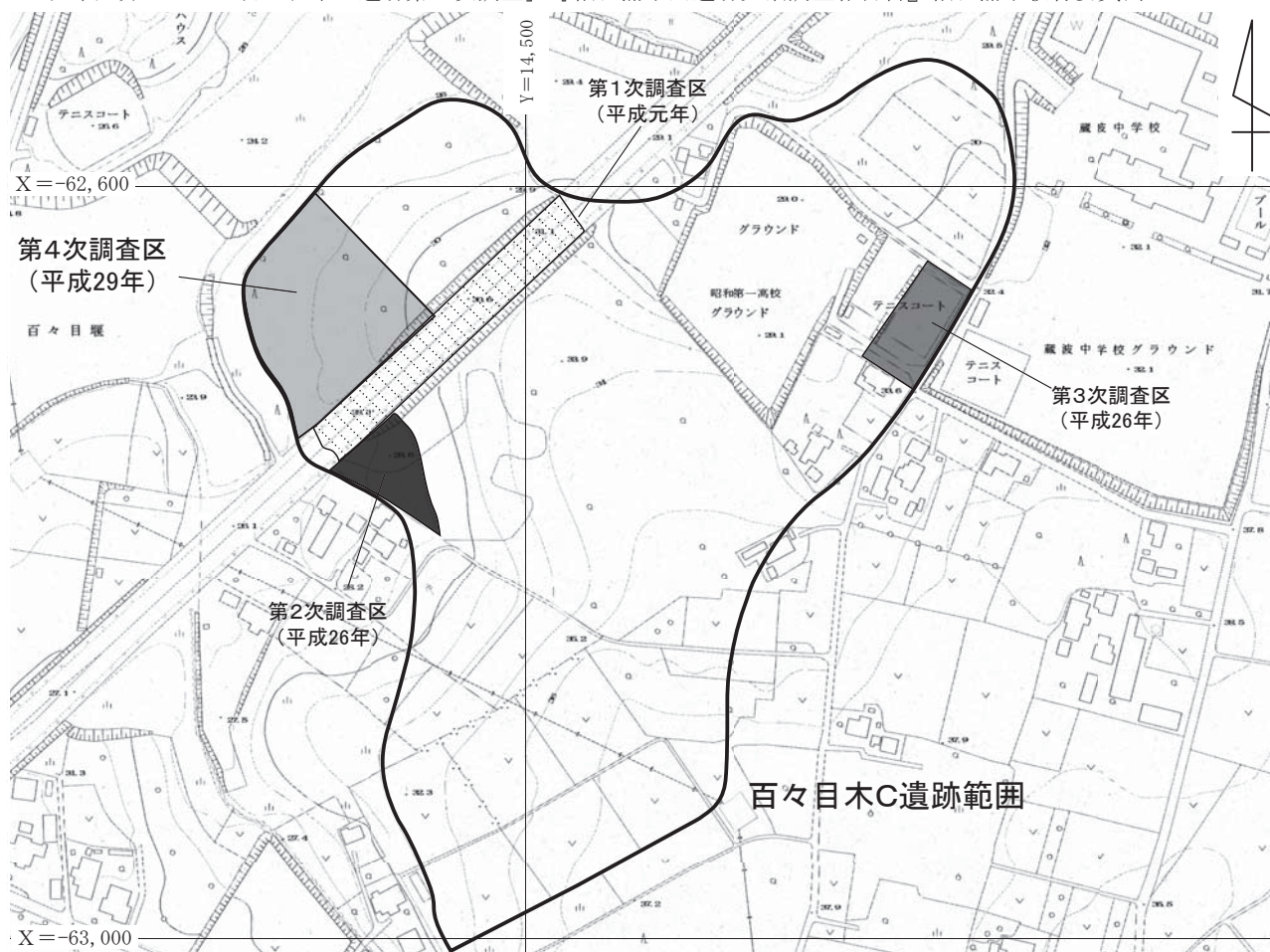
に竹管による連続刺突文が羽状に施文される。32・33は胴部片で、胎土に繊維を含み、外面は縄文、内面は条痕文が施文される。33は隆起線文を境に、上部は擦痕、下部は縄文が施文される。34は波状口縁である。口唇部に刻目文、口縁部と沈線文間には半裁竹管による刺突文が施文される。35は外面に変形爪形文が施文され、内面には横位の擦痕を残す。36は瓢形を呈する深鉢の口縁部片である。焼成前に穿孔が施される。横位の沈線区画内に縄文が施文され、沈線文施文後に口縁部に刻目文が施文される。縄文土器は、早期のものが大半を占め（1～31）、前期のもの（32～35）、後期のもの（36）が若干伴う。37は礫器で、ホルンフェルスの扁平礫を素材とする。刃部欠損後に研磨痕が見られる。38は二次加工のある剥片で、頁岩の剥片を素材とする。両面からの細かい調整によって先端部が作出される。

### 3. まとめ

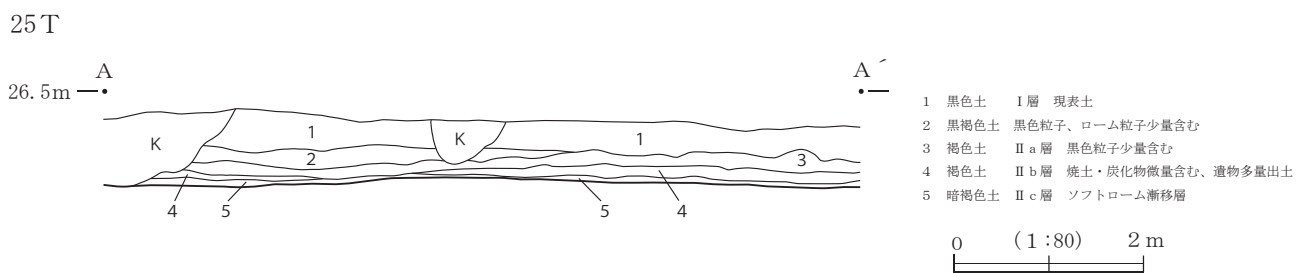
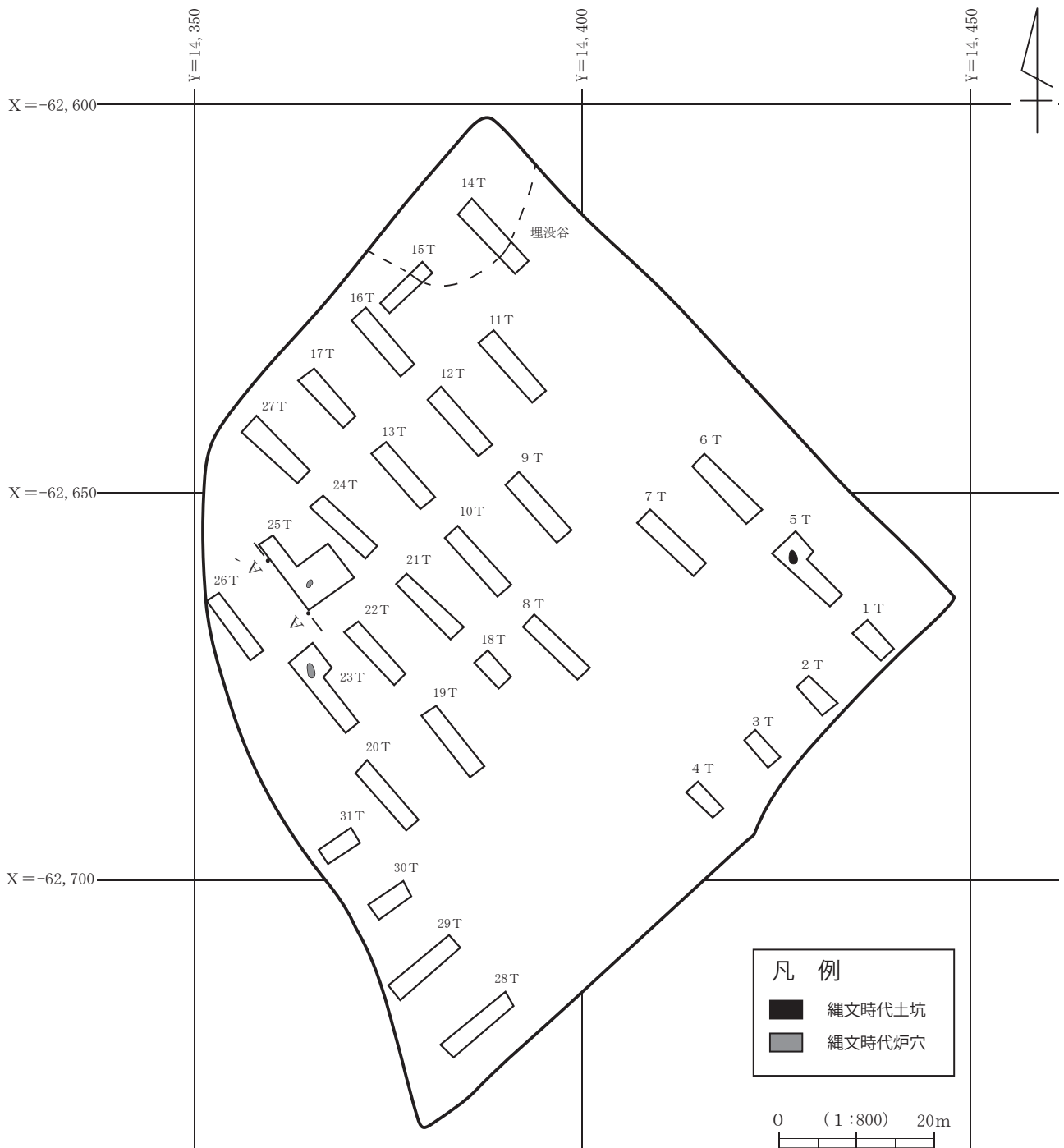
本調査区では土坑1基、炉穴2基が検出された。炉穴2基や遺物は調査区西部の標高約26～27mの台地縁辺部の緩斜面を中心に検出されており、調査区東部の台地肩部からは土坑が1基検出されたのみで、遺物はほとんど出土しなかった。出土遺物は縄文時代早期撚糸文期～条痕文期のものが主であり、遺構も同時期のものと推測する。縄文時代早期の遺構の分布傾向は過去の調査からも同傾向が見られることから、本遺跡は遺構密度が希薄な台地平坦部と縄文時代早期の遺構分布及び遺物の出土が密な遺跡西部の緩斜面部から成ることが推測される。また、調査区北西部の埋没谷の堆積土からは、加曽利B式の土器片が出土していることから、縄文時代後期中葉には遺跡西部にあった谷部が埋没したことが推測される。

#### 参考文献

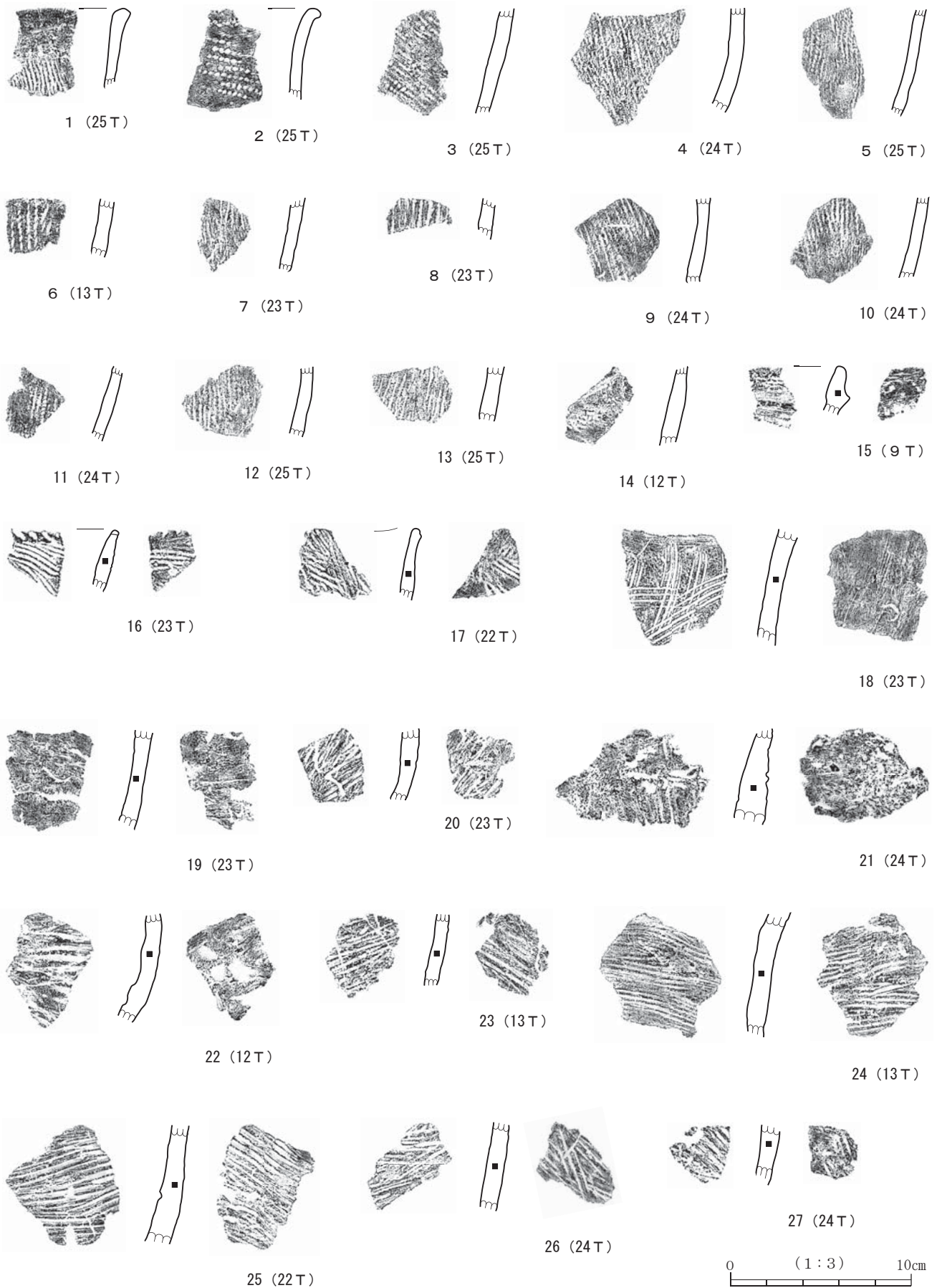
- 稲葉理恵 1998『百々目木B・C・清水頭・清水沢遺跡』（財）君津郡市文化財センター
- 前田雅之 2014「百々目木C遺跡第2次調査」『袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書』袖ヶ浦市教育委員会
- 田中大介 2015「百々目木C遺跡第3次調査」『袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書』袖ヶ浦市教育委員会



第2図 百々目木C遺跡調査区位置図（1：4,000）

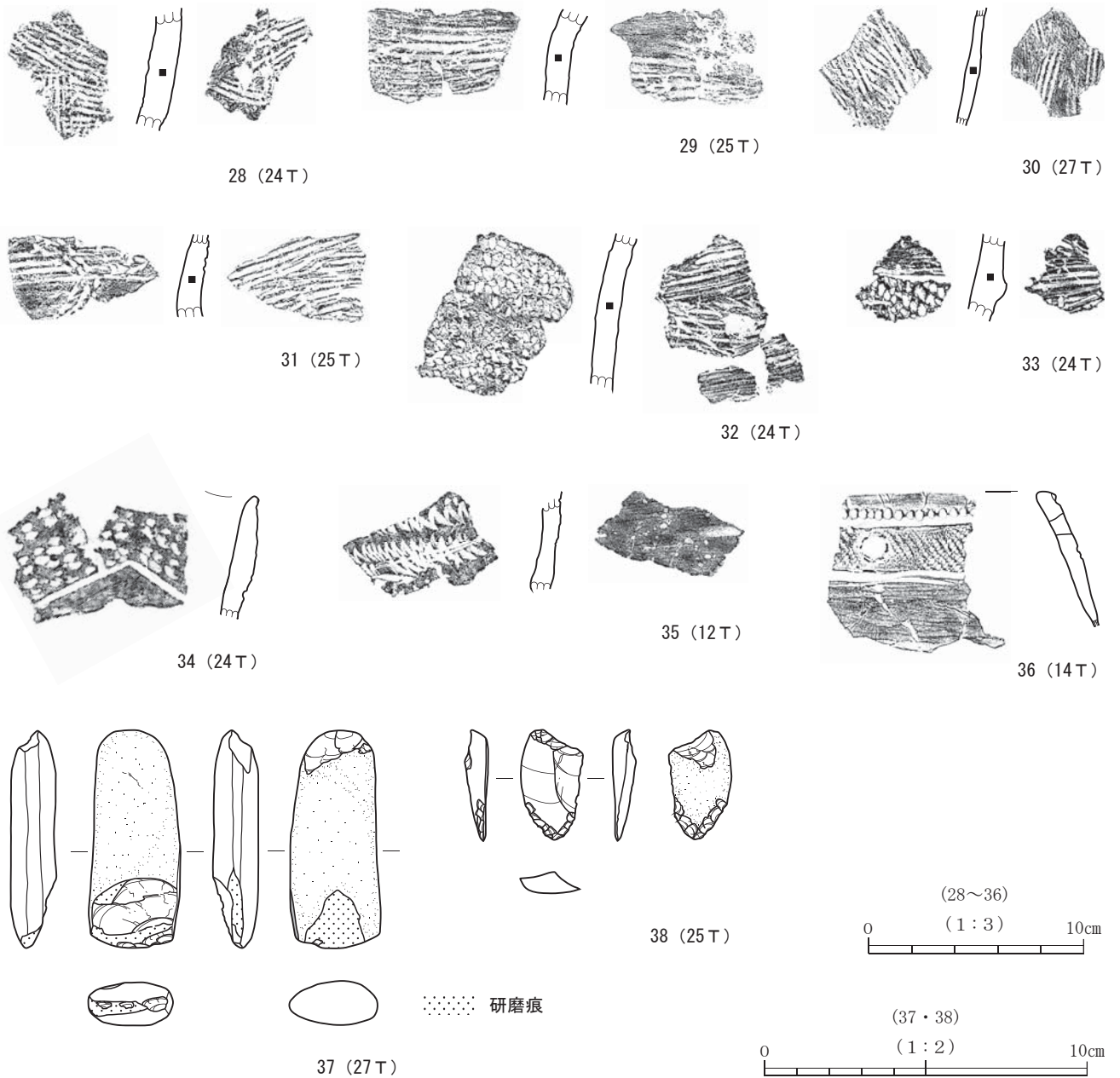


第3図 百々目木C遺跡(4)遺構確認状況図、断面図



第4図 百々目木C遺跡(4)出土土器実測図





第5図 百々目木C遺跡(4)出土土器・石器実測図

第1表 百々目木C遺跡(4)出土土器計測表

(単位:g)

トレンチ名	早期				前期	後期	無文	不明	合計
	撚糸文系	沈線文系	織維入無文	条痕文系					
8			52.47						52.47
9			7.54					3.22	10.76
10	18.13		66.07	7.21			12.39		113.80
12	23.76		24.33	51.57	29.85		26.69	11.26	167.46
13	14.10		191.00	90.37			35.29	9.89	340.65
14			33.34			48.93			82.27
15			17.53						17.53
20			16.88						16.88
21			7.15						7.15
22	2.93		33.43	65.54				6.09	107.99
23	26.08	90.91	403.47	17.58			23.39	29.54	590.97
24	78.46	15.25	177.02	99.60	154.65		154.25		679.23
25	152.87		187.41	220.96	15.45		86.45	21.87	685.01
27			6.33	16.40				17.70	40.43
28			8.12						8.12
29								9.29	9.29
表採			24.99						24.99
合計	316.33	106.16	1,257.08	569.23	199.95	48.93	338.46	108.86	2,945.00

## 第3章 鼻欠遺跡・鼻欠古墳群（3）（4）

### 1. 周辺の遺跡と環境（第6図）

鼻欠遺跡・鼻欠古墳群が所在する袖ヶ浦台地は、南部を流れる小櫃川、北部を流れる蔵波川・久保田川等により開析された小支谷が複雑に形成されている。その中でも本遺跡は、境川により開析された舌状台地の縁辺部標高24m～29mに位置する。

昭和55・56年度に行われた昭和中学校建設に伴う第1・2次調査では、縄文時代の陥穴1基、弥生時代後期の堅穴住居4軒、古墳時代中～後期の古墳3基、古代の方形区画墓1基、近世以降の溝状遺構11条、道路状遺構2条、時期不明の土坑2基が検出されている。

鼻欠古墳群には、現存する1号墳と第1次調査で検出された3～5号墳に加えて、第1次調査区北側に古墳1基（2号墳）が所在していたとされる。また、1号墳の南約50mと南東約30mにも古墳が所在したと伝わるが詳細は不明である。周辺には少なくとも5基の古墳が存在したと考えられている。過去の調査で検出された3基の古墳は円墳であり、出土した遺物から5世紀後半～6世紀初頭の古墳時代中～後期にかけて築造されたとみられる。

今回の調査区は古墳群の最も東側に位置し、現存する鼻欠1号墳に隣接した区域である。鼻欠1号墳は舌状台地の縁辺部の斜面地上に位置する。袖ヶ浦市内でも数少ない横穴式石室を持つ古墳として周知されているが、石室の規模・形状については不明である。

鼻欠遺跡・鼻欠古墳群の周辺に所在する古墳としては率土神社南古墳、お袖塚古墳があげられる。本遺跡の南西約500mに位置する率土神社南古墳は、帆立貝式前方後円墳であり、出土遺物から6世紀初頭の古墳時代後期に築造されたとされ、鼻欠3～5号墳とほぼ同時期にあたる。本遺跡の南東約500mに位置するお袖塚古墳では、周溝内から多量の円筒埴輪等が出土している。出土遺物から6世紀前半の古墳時代後期に築造されたものとみられる。

### 2. 調査と遺跡の概要（第7・8図、図版3）

**調査方法** 個人住宅建築に伴い、建築範囲260.7㎡を対象として確認調査・本調査を実施した。確認調査では、調査区に2m×5mを基本としたトレンチを6本設定し、重機による表土掘削、人力による遺構確認作業を行った。5Tを除く5箇所の特レンチから遺構（6Tは本調査で風倒木と判明）を検出したことから、建築範囲全体を調査対象地として本調査を実施した。掘削は、表土及び周溝部内堆積土の一部を重機により行い、それ以外の箇所は人力により行った。廃土置場の確保のためスイッチバック方式をとり、調査区を東西に二分し、東側を調査したのちに西側の調査を実施した。

**調査の概要** 本調査区からは、陥穴1基、鼻欠1号墳の周溝、土坑1基が検出された。後世の削平の影響により、古墳周溝部以外のところでは表土直下からソフトローム層が検出された。今回の調査では、過去の調査で検出された弥生時代後期の遺構・遺物は確認できなかった。

**縄文時代** 縄文時代の陥穴（TP002）が1基検出された。陥穴は主軸N-22°-W、長軸上端2.25m、下端2.35m、短軸0.48m、最深部1.03mである。平面形は長楕円形で底面の長軸両端部は開口部より幅が広がる。底面短軸は狭小である。長軸断面形はフラスコ状を呈し、短軸断面形は深いV字状を呈する。底面にピットの痕跡は確認できなかった。縄文時代の陥穴は過去の調査で1基検出されている。双方とも形状・規模は類似しているが、遺物が出土していないため時期は不明である。

**古墳時代** 鼻欠1号墳の周溝が検出された。確認できた部分の周溝の規模は、幅4.95m、深さ0.65mであり、

平面形は弧状を描くため、円墳であると推定される。周溝は北側へスロープ状に上がっていき、浅くなっていく。周溝堆積土は1～8層までが自然堆積層で9～12層までが古墳構築による土層と推測される。9・10層は墳丘部の盛土とみられ、11・12層は周溝底部を整地した土層とみられる。周溝は、旧表土を削って形成されており、一部ハードローム層まで掘り込まれている。3層付近からは土師器片が12点、122.33g出土した。

**その他遺構** 土坑（SK 003）は古墳周溝掘削時に検出された。土坑は主軸N-16°-W、長軸1.95m、短軸0.98m、深さ0.48mである。周溝内に位置し、明瞭な掘り込みを持つことから土壇墓の可能性はある。覆土を篩にかけたが、遺物は確認できなかった。

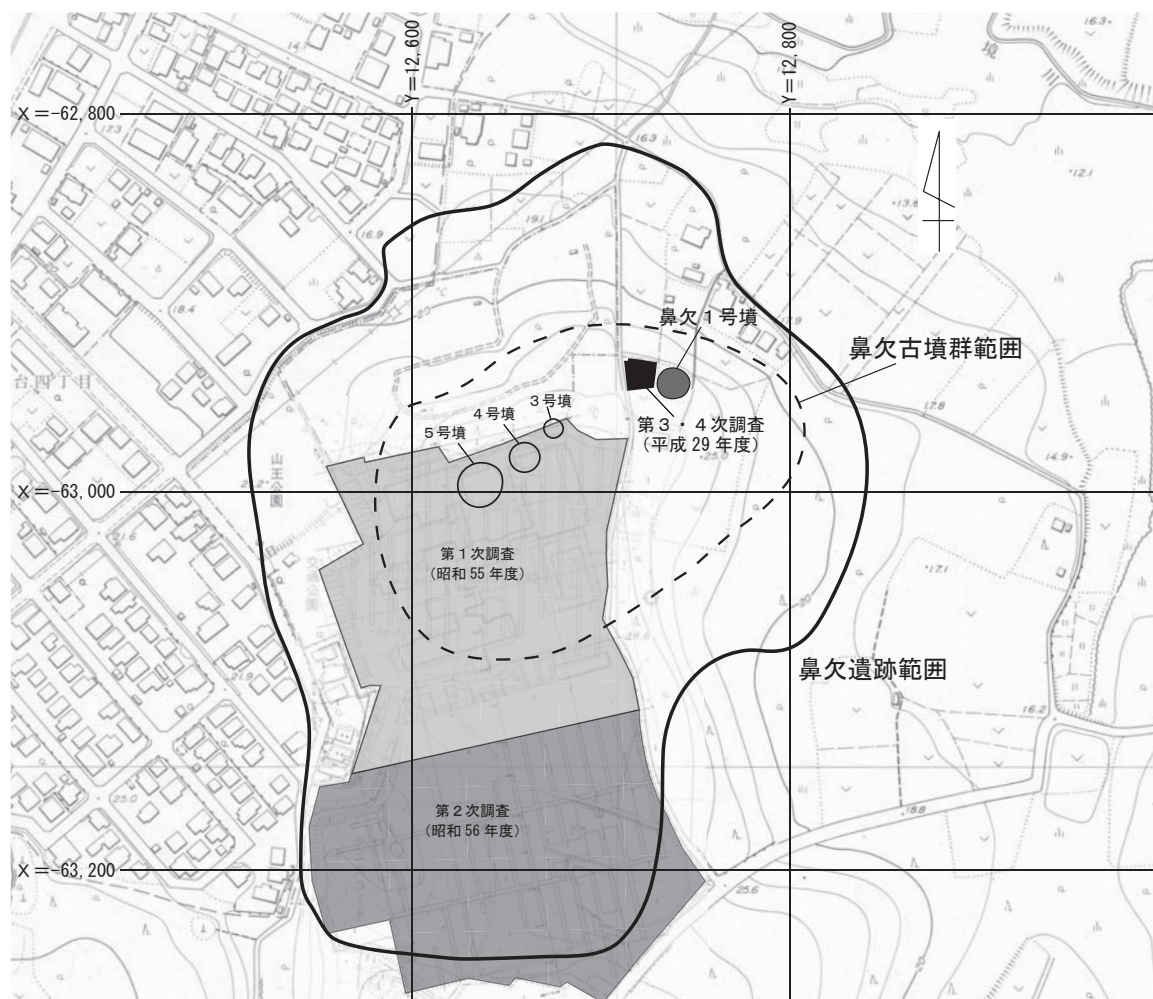
### 3. まとめ

今回の調査では、鼻欠1号墳は円墳であることが判明した。古墳の北側と東側は農道により削平されており、古墳としての形状はあまり良好ではない。周溝内から土師器片が12点出土したが細片のため時期の特定に至らなかったが、横穴式石室を持つことから古墳時代後期のものとみられる。過去に周辺の採集遺物として須恵器、手づくね土器、直刀、水晶製切子玉等が伝わっているが、鼻欠1号墳に関係するものかどうか詳細は不明である。

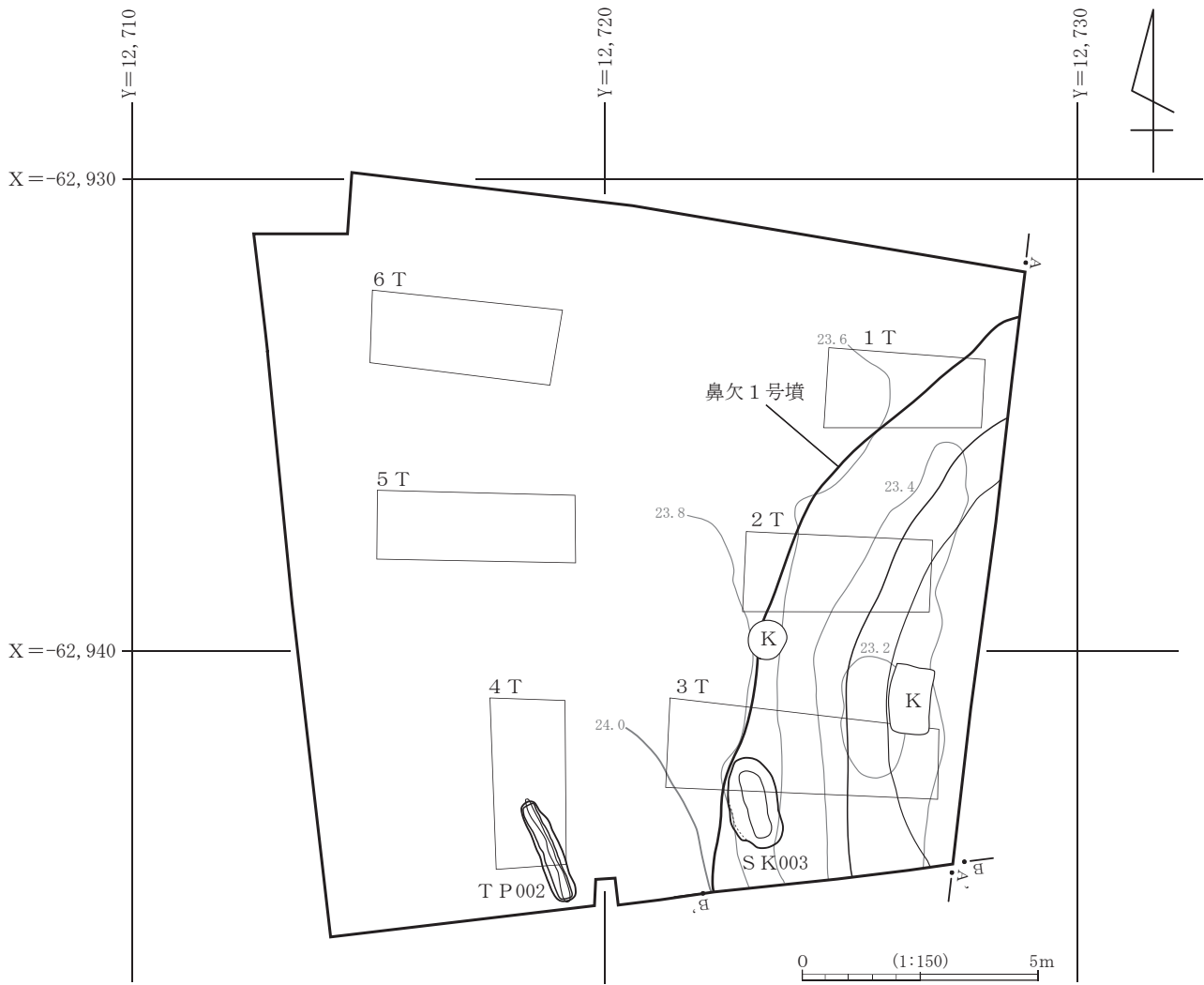
#### 参考文献

鼻欠遺跡調査会 1984『鼻欠遺跡』

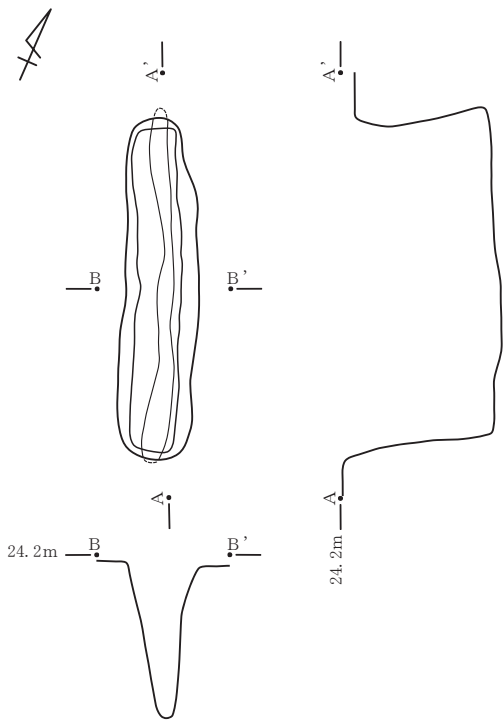
袖ヶ浦市史編さん委員会 1999『袖ヶ浦市史 資料編 原始・古代・中世』袖ヶ浦市



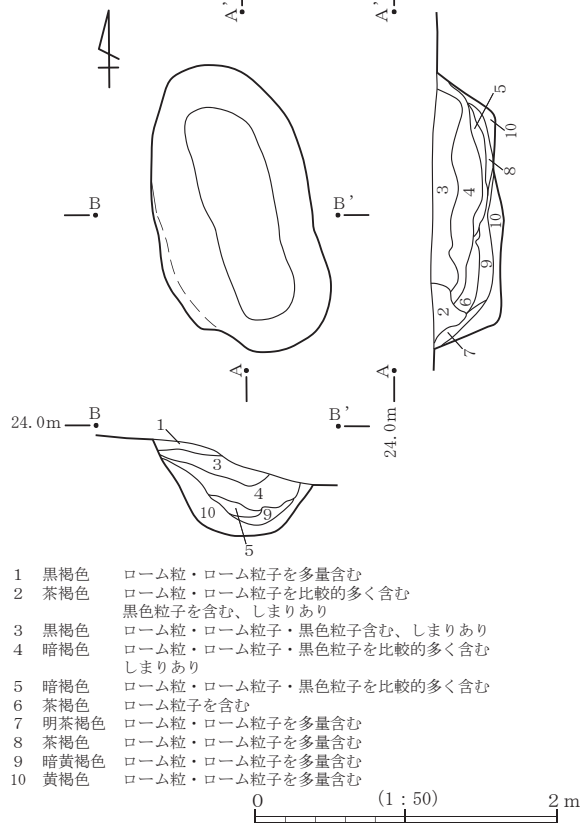
第6図 鼻欠遺跡・鼻欠古墳群調査区位置図（1：4,000）



T P 002

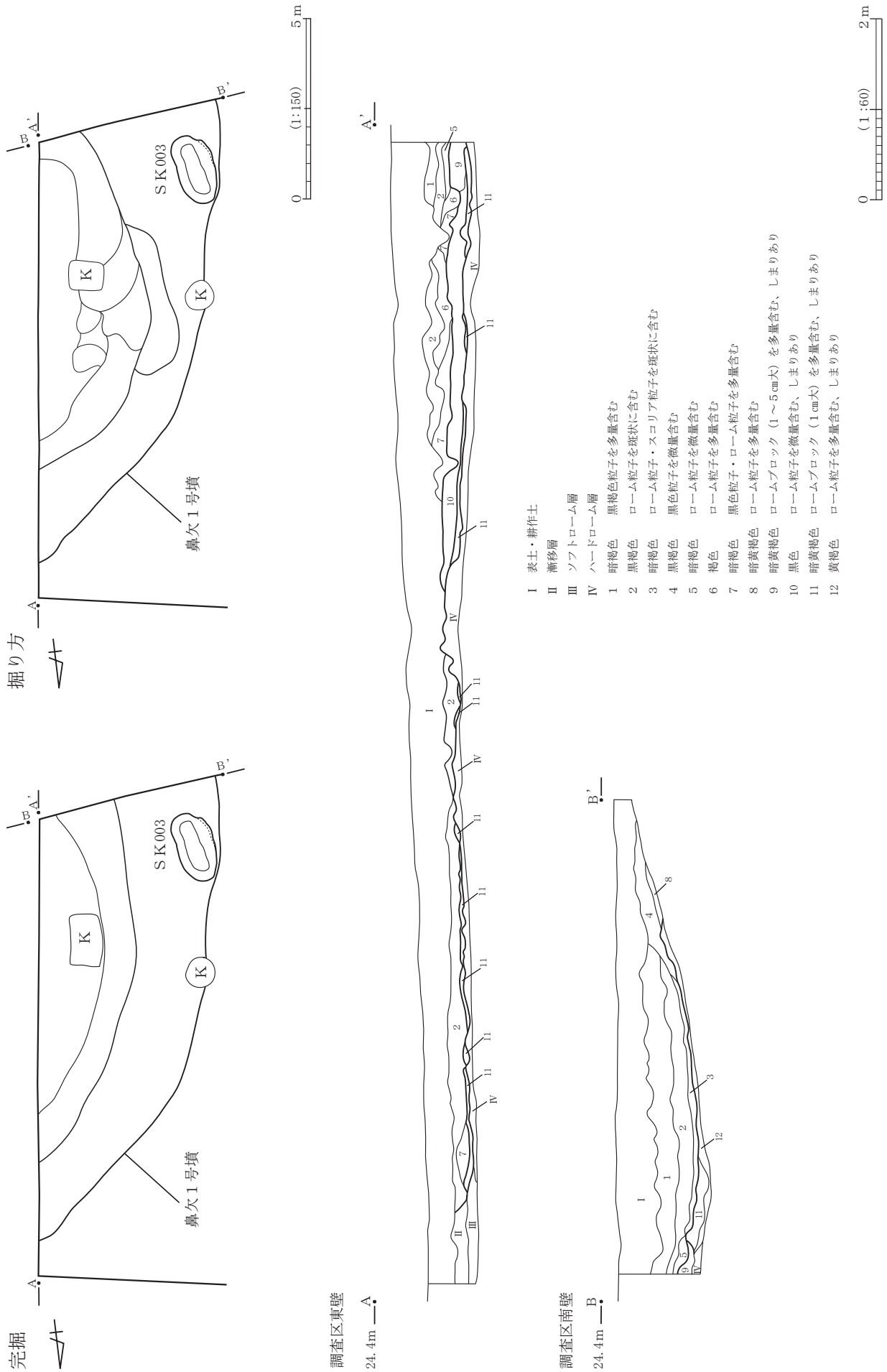


S K 003



- |    |      |                                     |
|----|------|-------------------------------------|
| 1  | 黒褐色  | ローム粒・ローム粒子を多量含む                     |
| 2  | 茶褐色  | ローム粒・ローム粒子を比較的多く含む<br>黒色粒子を含む、しまりあり |
| 3  | 黒褐色  | ローム粒・ローム粒子・黒色粒子含む、しまりあり             |
| 4  | 暗褐色  | ローム粒・ローム粒子・黒色粒子を比較的多く含む<br>しまりあり    |
| 5  | 暗褐色  | ローム粒・ローム粒子・黒色粒子を比較的多く含む             |
| 6  | 茶褐色  | ローム粒子を含む                            |
| 7  | 明茶褐色 | ローム粒・ローム粒子を多量含む                     |
| 8  | 茶褐色  | ローム粒・ローム粒子を多量含む                     |
| 9  | 暗黄褐色 | ローム粒・ローム粒子を多量含む                     |
| 10 | 黄褐色  | ローム粒・ローム粒子を多量含む                     |

第7図 鼻欠遺跡・鼻欠古墳群(3)(4)遺構確認状況図、断面図



第8図 鼻欠1号墳周溝確認状況図、断面図

## 第4章 中六遺跡 (23)

### 1. 周辺の遺跡と環境 (第9図)

中六遺跡は袖ヶ浦台地中央部に位置し、蔵波川左岸の標高 40 m～45 mの平坦地に展開する。宅地造成や道路建設に伴い継続的に調査が実施されており、今回は第23次調査にあたる。

本遺跡では、旧石器～近世に至る遺構・遺物が検出されている。特に縄文時代早期と古墳時代前期の遺構・遺物が主体となる。遺跡北側の台地縁辺部を中心に縄文時代早期の炉穴や土坑、古墳時代前期の竪穴住居が検出されている。近世の遺構としては、遺跡東側を南北に縦断、遺跡中央部を東西に横断する道路状遺構が検出されている。

本調査区は、中六遺跡の北西部に位置し、昭和61年度に(財)君津郡市文化財センターが調査を行った第1次調査区の隣接地である。第1次調査では、道路状遺構や溝状遺構等が検出されている。本調査区では第1次調査で検出された道路状遺構(第2号道路状遺構)に繋がる遺構があると予想された。

今回検出した縄文時代後期、近世の遺構・遺物と同時期の周辺遺跡について概観する。本遺跡から南西約1kmに所在する山野貝塚では、縄文時代後期を主体とした遺構・遺物が検出されている。本遺跡においても僅かではあるが、同時期の遺物が検出されているため、関連性がうかがえる。また、本遺跡から南西約500mに所在する角山遺跡・伊丹山遺跡においても縄文時代後期の遺物が出土している。中・近世の遺跡としては、本遺跡から北東2.8kmに位置する久保田城や北2kmに位置する蔵波砦といった城・砦跡があげられ、周辺域では塚が築造されている。本遺跡から南東1.3kmに所在する七人堀込遺跡からは、道路・溝状遺構が検出されている。

### 2. 調査と遺跡の概要 (第10図、図版4)

**調査方法** 宅地造成に伴い、1,498.51㎡を調査対象として確認調査を実施した。調査区に2m×5m、3m×5mを基本としたトレンチを6本設定し、重機による表土掘削、人力による遺構確認作業を行った。

**遺跡の概要** 本調査区は北東側が道路建設により傾斜地になっている。客土・攪乱を受けている場所が多く、土層は固くしまっていた。本調査区では、南東―北西方向に走行する道路状遺構2条と調査区北西側で時期不明の土坑4基が検出された。

**道路状遺構 (SA 001・SA 002)** 3T～6Tから道路状遺構が検出された。

SA 001は3T、4TからSA 002に並行するかたちで検出された。南東―北西方向に走行する。遺構の切りあい関係から、SA 002よりも古い遺構とみられる。

SA 002は3T～6Tで検出された。南東―北西方向に走行する遺構で第1次調査で検出された道路状遺構(第2号道路状遺構)の延長上にあり、第2号道路状遺構と同様に覆土中に宝永の火山灰が堆積していることから同一の遺構と推定される。

**土坑 (SK 001～004)** 1Tから1基、2Tから2基、3Tから1基の計4基の土坑が検出された。周辺から遺物は出土していないため、時期は不明である。3T検出のSK 004はSA 001の下から検出されているため、SA 001よりも古い遺構とみられる。

**検出遺物** 縄文土器片が4点、103.59g出土した。1は縄文時代中期の阿玉台式土器とみられる。竹管による連続刺突文と沈線文が施文され、胎土には雲母を含む。3Tから出土した。2～4は縄文時代後期の称名寺式または堀之内式土器とみられる。2は口縁部片で波状を呈するとみられ、口唇部に窪みが認められる。

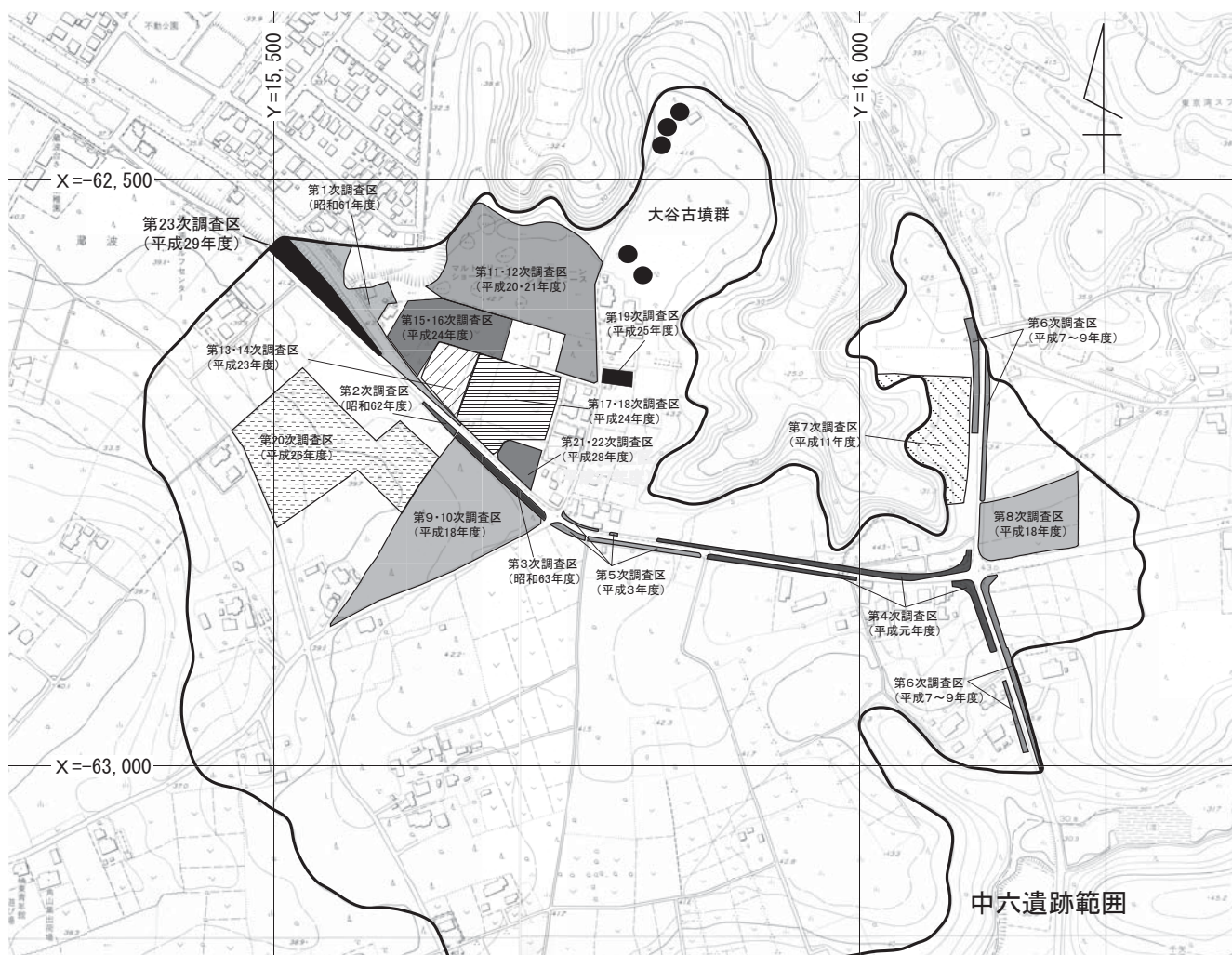
3は胴部で5条からなる櫛歯状の施文具により蛇行する垂下沈線が施される。2、3は4TのSA 001の底面から出土した。流れ込みによるものと考えられる。4は胴部で3と同様に5条からなる櫛歯状の施文具により蛇行する垂下沈線が施される。4Tの漸移層中から出土した。

### 3. まとめ

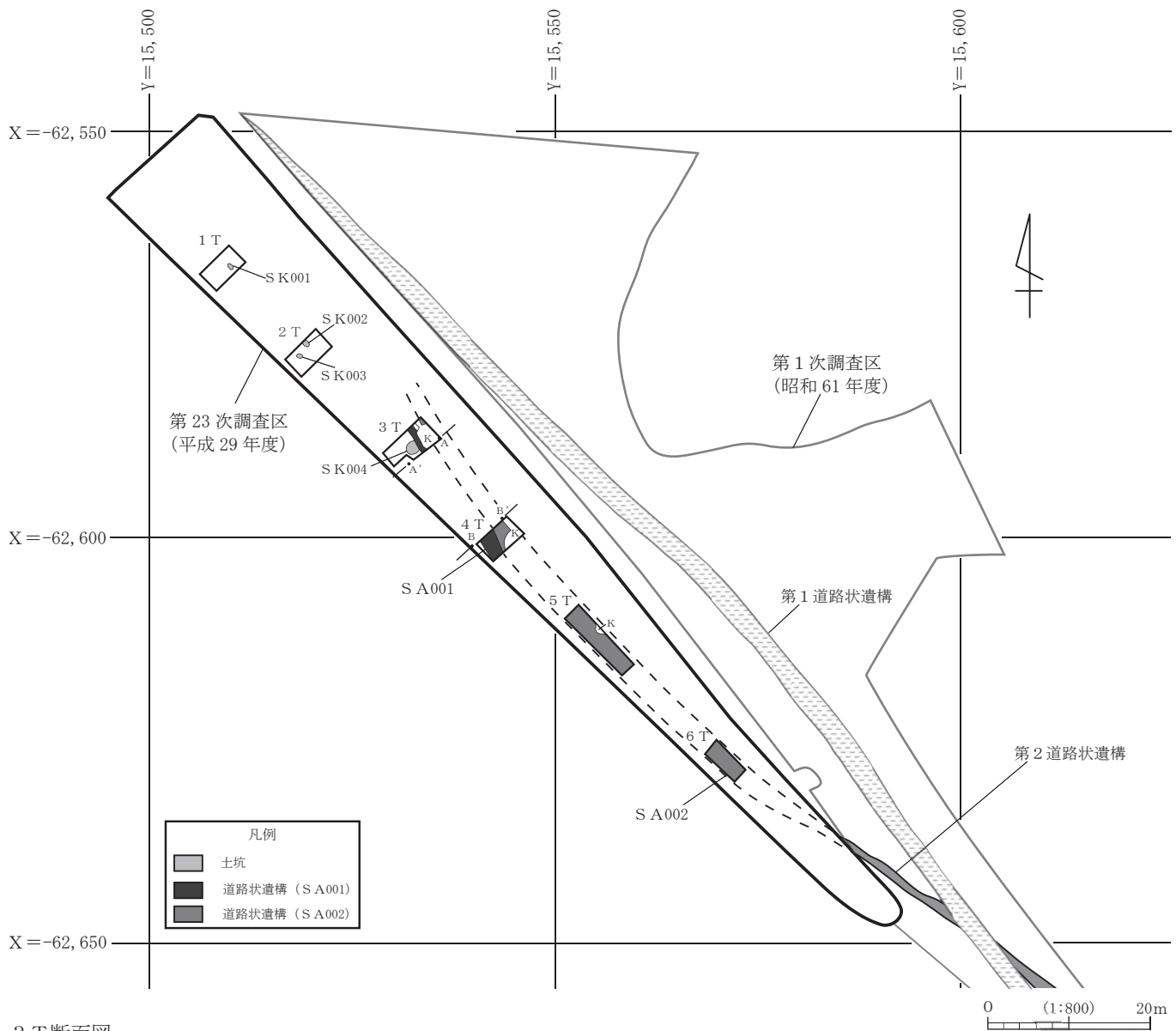
今回の調査では、第1次調査で検出された第2号道路状遺構の延長とみられるSA 002が検出された。SA 002は南東―北西方向を走行する道路で覆土上層に宝永の火山灰が堆積しているため、近世以前の遺構であると推測される。また、SA 002に並行する新たな道路状遺構SA 001が検出された。SA 001は、SA 002に切られているため、SA 002より古いものとみられ、底面から縄文時代後期初頭～前葉の称名寺～堀之内式とみられる土器が出土した。流れ込みによるものと考えられる。なお、本調査区では、中六遺跡の主体となっている縄文時代早期や古墳時代前期を示す遺構・遺物の検出は確認できなかった。

#### 参考文献

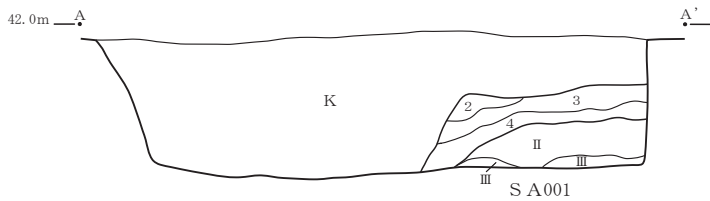
- 井口崇 1987『千葉県袖ヶ浦町 中六遺跡』（財）君津郡市文化財センター  
 桐村修二 1993『千葉県袖ヶ浦市 中六遺跡Ⅱ』（財）君津郡市文化財センター  
 小林清隆 1999『袖ヶ浦市中六遺跡』（財）千葉県文化財センター



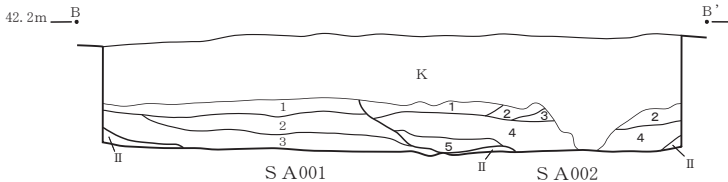
第9図 中六遺跡調査区位置図 (1 : 6,000)



3 T 断面図

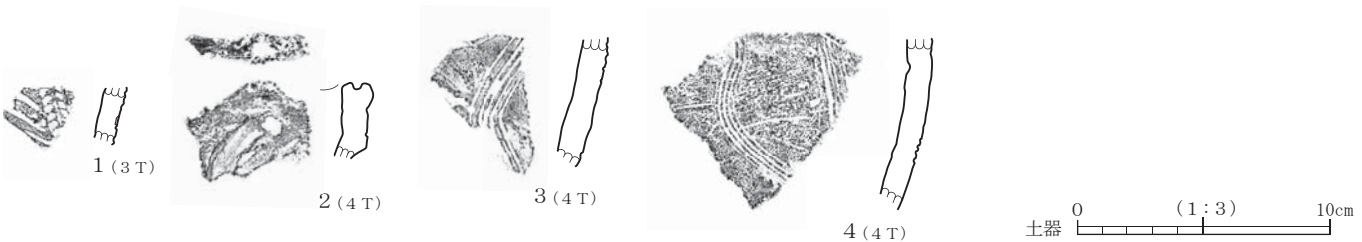


4 T 断面図



- II 漸移層
- III ソフトローム層
- S A 001
  - 1 明茶褐色 ローム粒・ローム粒子を多量含む
  - 2 明茶褐色 ローム粒・ローム粒子を多量含む 硬質
  - 3 褐色 ローム粒子を多量含む 硬質
  - 4 暗褐色 ローム粒子を多量含む 硬質
- S A 002
  - 1 明茶褐色 ローム粒子を含む
  - 2 茶褐色 宝永の火山灰を含む
  - 3 茶褐色 宝永の火山灰を多量含む
  - 4 褐色 ローム粒・ローム粒子を多量含む 硬質
  - 5 暗褐色 ローム粒・ローム粒子を多量含む 硬質

トレンチ断面図 (1:60) 0 2m



第10図 中六遺跡(23) 遺構確認状況図、断面図、出土土器実測図



## 第5章 兎谷台遺跡

### 1. 周辺の遺跡と環境（第11図）

兎谷台遺跡は、袖ヶ浦台地北部標高50～57mの舌状台地の縁辺部に位置する。周辺は久保田川と蔵波川の開析により、いくつもの丘陵と谷が入り組んだ複雑な地形を呈している。本遺跡は久保田川左岸に位置し、縄文時代早期、古墳時代の埋蔵文化財包蔵地として周知されていたが、今回初めて発掘調査を実施した。

本遺跡の周辺遺跡について概観する。本遺跡から西約400mに位置する子者清水遺跡では、本地域では類例の少ない古墳時代中期～後期の竪穴住居を主体とした遺構が検出されている。また、縄文時代早期・前期の炉穴や土坑、奈良・平安時代の方形区画墓や火葬墓が検出されている。本遺跡から南東600mに位置する正源戸B遺跡では、当地域において類例の少ない縄文時代前期の竪穴住居が検出されている。加えて同時期の炉穴・土坑、古墳時代前期と奈良・平安時代の竪穴住居が検出されている。本遺跡の対岸に位置する豆作台遺跡では、子者清水遺跡とともに縄文時代前期の竪穴住居が検出されている。

### 2. 調査と遺跡の概要（第12・13図、図版5）

**調査方法** 埋立造成に伴い、75.3㎡対象として確認調査を実施した。なお、調査範囲が狭小であるため、掘削可能範囲内で調査を実施した。重機による表土掘削、人力による遺構確認作業を行った。当初3本のトレンチを設定し掘削を行ったが、1Tを拡幅したことにより、1Tと3Tが繋がる形となった。

**遺跡の概要** 1Tから土坑が1基検出された。出土した土器から縄文時代早期のものとみられる。調査区からは新期テフラ層が明瞭に確認できた。

**遺構・遺物** 遺構は、土坑（SK001）が台地縁辺部標高約51mのソフトローム層付近で検出された。主軸N-68°-E、長軸1.30m、短軸0.62m、深さ0.08mで平面形は不整な楕円形を呈する。底面は皿状を呈し、中央部がやや落ち込む。

遺物は合計4点、123.45g出土した。1はSK001の確認面から出土した。縄文時代早期の条痕文系の土器である。斜位の条痕文が施され、胎土には繊維を含む。2は3TのⅡ層上面から出土した。二次加工を有する土器である。土器の底部片を加工したとみられ、円形を呈すると推測される。最大厚が1.2cmで中央部が厚く、端部に向かい薄くなる。端部は両面から打ち欠かれており、2箇所切れ込みが認められる。胎土に石英を含み、堅緻な焼成である。特徴的な文様や調整が見られないため、時期は不明である。

### 3. まとめ

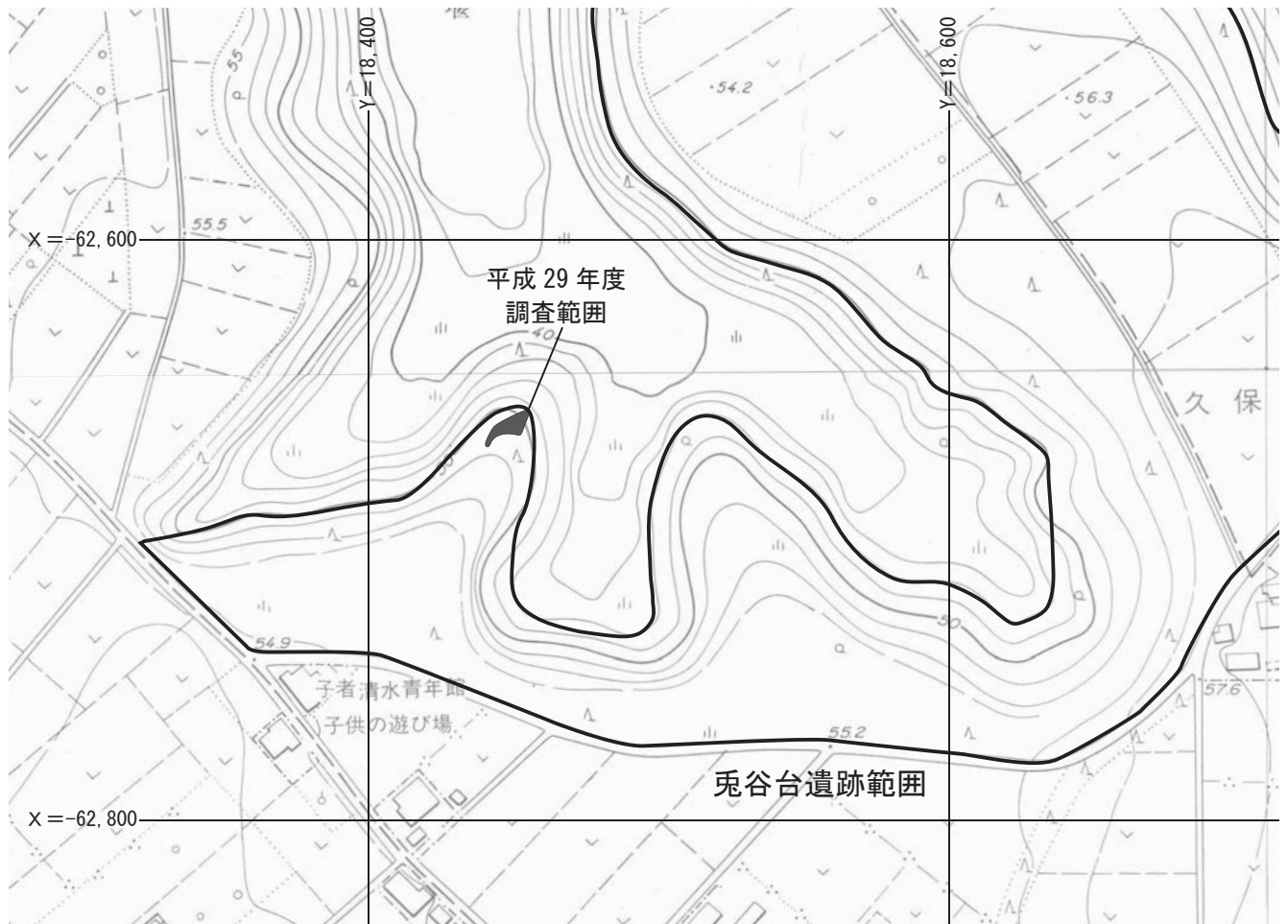
本遺跡は、検出された遺構・遺物から台地縁辺部の斜面地まで縄文時代早期の遺構が分布していることが判明した。本調査区では新期テフラの堆積が認められたが、新期テフラ層の下層と上層の堆積土は検出できなかった。斜面地のため流れてしまったのか、或いは改変があったのかは不明である。また、本調査区において古墳時代と特定できる遺構・遺物は確認できなかった。

#### 参考文献

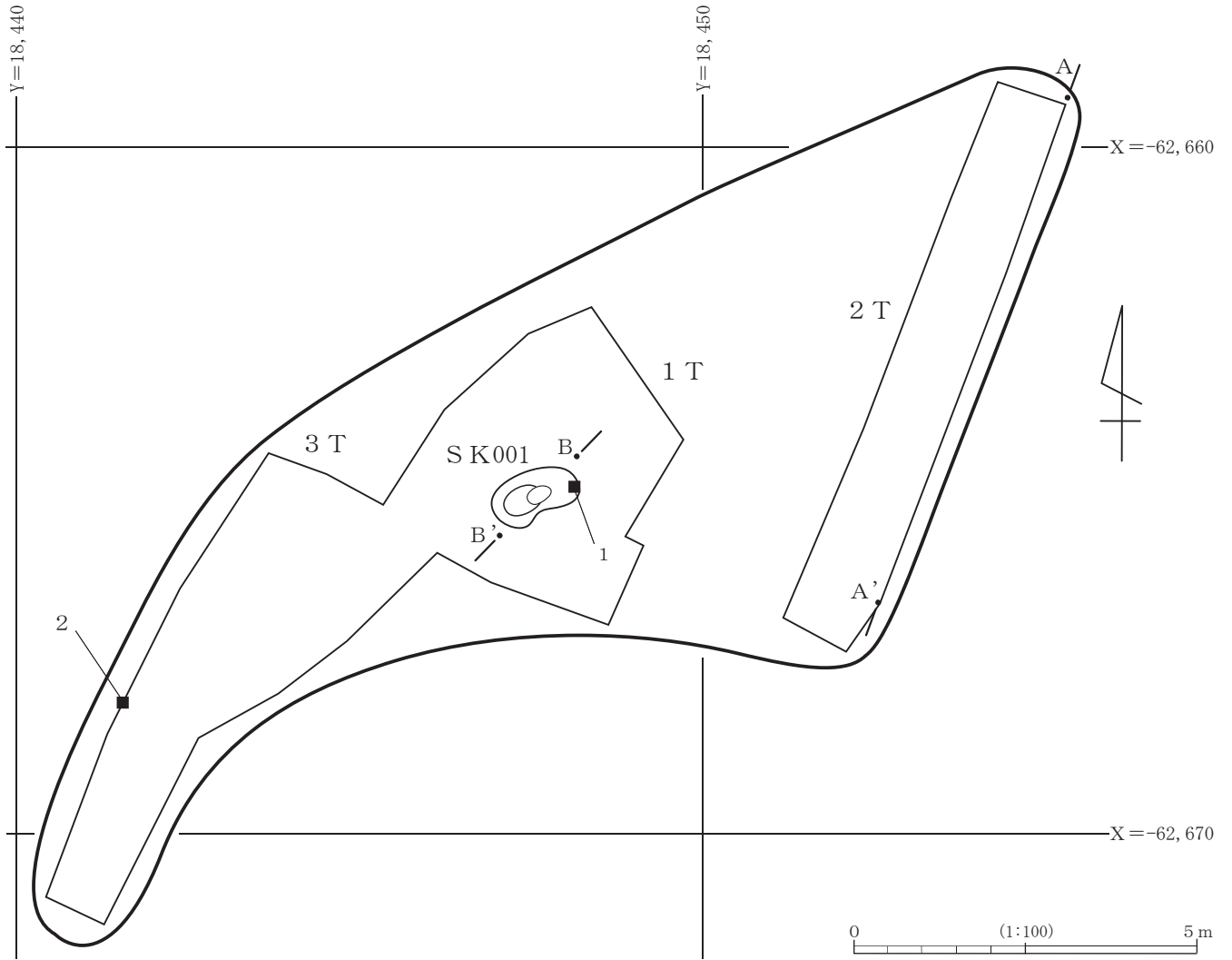
西原崇浩 2000『正源戸B遺跡・子者清水遺跡』（財）君津郡市文化財センター



第11図 免谷台遺跡周辺遺跡位置図 (1 : 20,000)

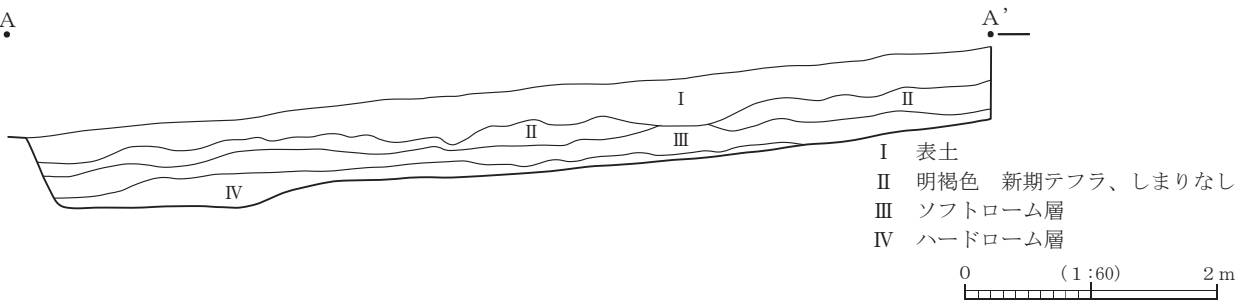


第12図 免谷台遺跡調査区位置図 (1 : 2,500)

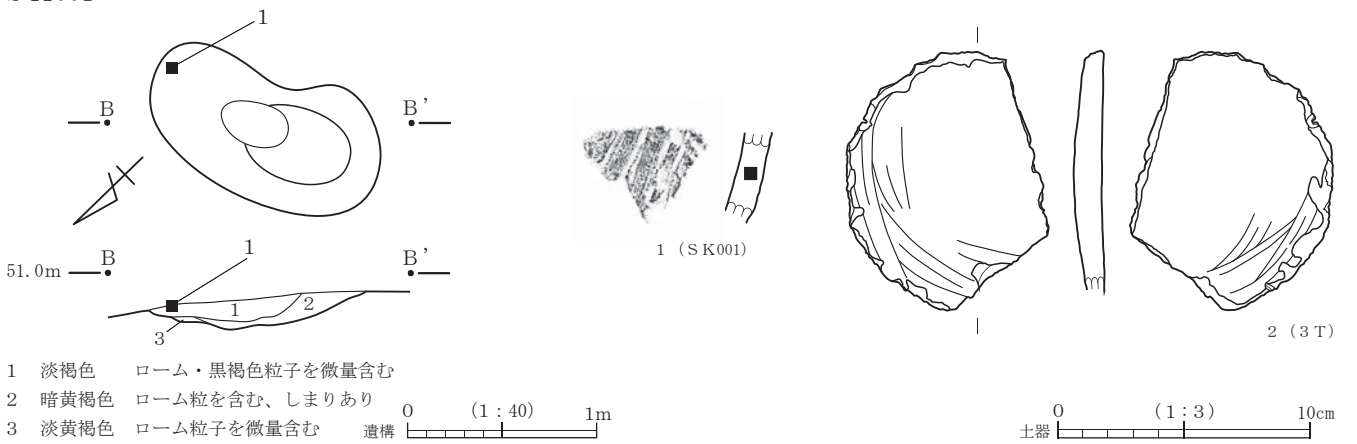


2 T 断面図

51.8m — A



SK001



- 1 淡褐色 ローム・黒褐色粒子を微量含む
- 2 暗黄褐色 ローム粒を含む、しまりあり
- 3 淡黄褐色 ローム粒子を微量含む 遺構

第 13 図 兎谷台遺跡遺構確認状況図、断面図、出土土器実測図

## 第6章 宮ノ越貝塚

### 1. 周辺の遺跡と環境（第14図）

宮ノ越貝塚は、小櫃川下流域右岸の標高約29mの台地上に位置する。これまで宮ノ越貝塚の発掘調査は実施されていないが、昭和60年の圃場整備に伴う貝層測量や表採資料により南北約75m、東西約65m規模の北側に開口する縄文時代中～後期にかけての馬蹄形貝塚と推定されている。また、平成6年の土地改良事業に伴う根形台遺跡群確認調査において、宮ノ越貝塚の北に設定されたトレンチより貝層が検出されており、トレンチが設定された周辺の現表土においても貝の散布が確認できる。

宮ノ越貝塚が立地する台地は、広範囲に各時代の遺構・遺物が分布しており根形台遺跡群としてとらえられ、宮ノ越貝塚は根形台遺跡群の西端にあたる。同台地上の周辺遺跡では、西ノ窪遺跡や境No.2遺跡が挙げられる。台地北西部に位置する西ノ窪遺跡からは、縄文時代後期の遺構や堀之内式～加曾利B式土器が出土し、弥生～奈良・平安時代の住居が約190軒検出されている。台地南西部に位置する境No.2遺跡からは堀之内式土器を中心に、早期～晩期にかけての土器が出土し、弥生時代中期～後期にかけての住居が約130軒検出されるなど、濃密な遺構分布を示している。また、宮ノ越貝塚が立地する台地に対して、野田から上池に至る支谷を挟んだ西側に位置する台地上には、縄文時代後期前葉～晩期中葉にかけての大型貝塚である山野貝塚、後期初頭～前葉の住居を検出した伊丹山遺跡、縄文時代早期～晩期にかけての遺物が出土する角山遺跡などが立地するなど、市内において縄文時代後期～晩期にかけての遺跡が最も集中する地域の一つである。

### 2. 調査概要

今回の調査は、本貝塚の遺存状況及び分布範囲を把握するとともに、隣接する大型貝塚である山野貝塚との比較を目的に、1,822㎡を調査対象として実施した。調査対象地は、昭和60年の測量による貝層分布域の南限にあたる。トレンチは南北方位を軸に25か所設定した。トレンチの掘削は重機により行い、遺構確認作業は人力により行った。平成27年度袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書において、調査概要を報告し、本報告書において、調査の詳細を報告するものである。

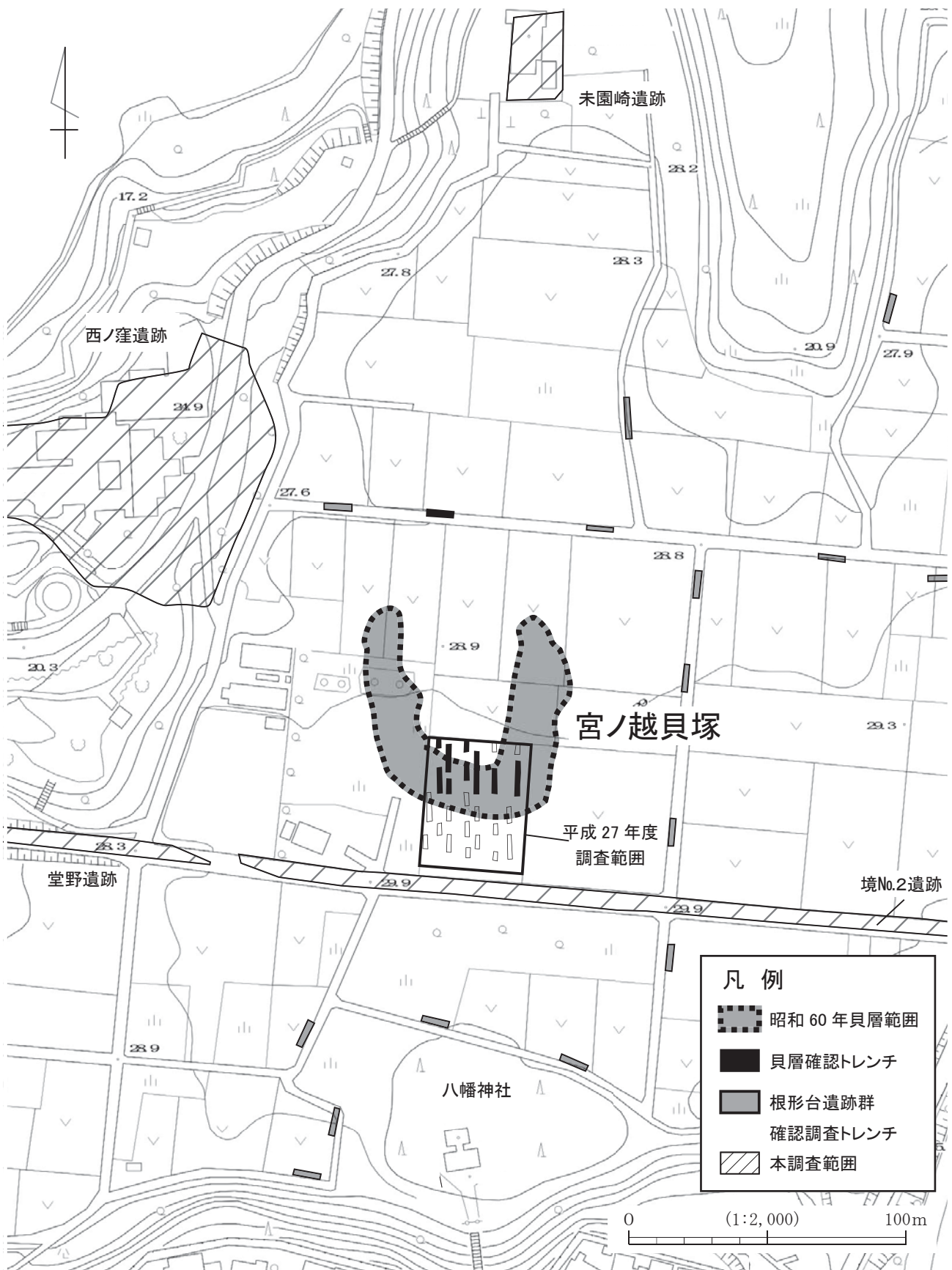
基本層序は、Ⅰ層：現表土（耕作土）（25～30cm）、Ⅱa層：旧耕作土（10～15cm）、Ⅱb層：近世以降の造成土（30～60cm）、Ⅱc層：遺物包含層・遺構覆土（20cm）、Ⅱd層：ソフトローム漸移層（5～10cm）、Ⅲ層：ソフトローム層である。トレンチの確認面はⅡc層上層とし、一部のトレンチはⅢ層まで掘り下げた。

### 3. 検出された遺構と遺物

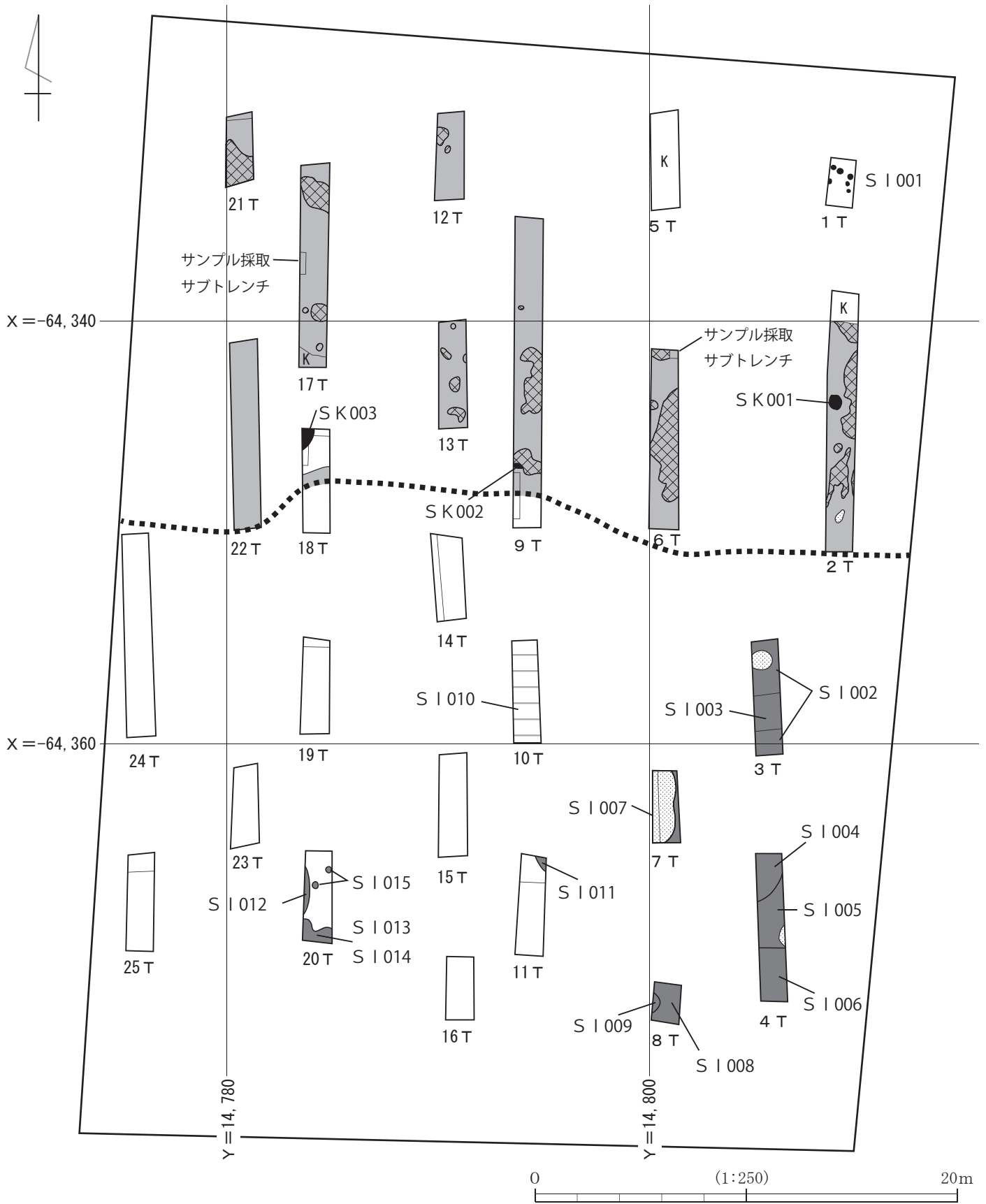
#### （1）貝層及び遺構検出状況（第15～18図、図版6～8）

1 トレンチ 全面においてⅡc・d層が確認できないことから、Ⅱb層の影響により、貝層は失われた可能性が高い。Ⅲ層からピット6基を検出した。形状から住居と判断した（SⅠ001）。

2 トレンチ ほぼ全面より貝層が確認でき、北部・中央部・南部に貝層密集範囲がある。貝層はイボキサゴを主体とし、その他にツメタガイやカガミガイが確認できる。北部は1トレンチ同様に、Ⅱb層の影響により貝層は失われた可能性が高い。中央部西側より、土坑1基を検出した（SⅡ001）。土坑下には貝層が密



第14図 宮ノ越貝塚調査区位置図



凡 例			
	貝層密集範囲		貝層範囲
	貝層推定範囲		焼土
	縄文時代土坑		奈良・平安時代住居
	弥生~古墳時代住居		

第 15 図 宮ノ越貝塚遺構確認状況図

集していたため、サンプルとして採集した。トレンチ南部をボーリング調査したところ、Ⅱ c 層上層から約 20 cm 下に硬化面が確認できることから、住居が存在する可能性がある。

**3 トレンチ** 全面の硬化、焼土の検出、土器が多数出土することから、全面を住居と判断した (S I 002)。出土土器から、弥生時代後期のものと推測する。また、トレンチ中央部に設置したサブトレンチより、Ⅱ b 層下約 40 cm から黒褐色土の硬化面を検出したことから、S I 002 下にも少なくとも 1 基の住居があると判断した (S I 003)。貝層は検出されなかった。

**4 トレンチ** 全面の硬化、焼土が検出されることから、全面を住居と判断した。北西部、南部は明確な黒褐色のプランをもち、中央部は黄褐色土硬化面及び炉跡と推測できる焼土が検出されることから、住居 3 軒と判断した (S I 004～006)。貝層は検出されなかった。

**5 トレンチ** 全面においてⅡ c・d 層が確認できないことから、Ⅱ b 層の影響により、貝層は失われた可能性が高い。ボーリング調査を行ったが、Ⅰ層下約 90 cm までの範囲に貝層は確認できなかった。

**6 トレンチ** ほぼ全面より貝層が確認でき、北部・中央部に貝層密集範囲がある。中央部貝層からはイボキサゴ、ツメタガイ、アカニシ、マガキが確認でき、一部破砕貝を含む。北部貝層密集範囲にサブトレンチを設定し、サンプルを採集した。サブトレンチ 4・5 層からシカ上腕骨等が交連に近い状態で出土した。サブトレンチ下のボーリング調査により、トレンチ底面から約 20 cm 下に硬化面が確認できたことから、住居が存在する可能性がある。

**7 トレンチ** 全面の硬化、焼土が検出されることから、住居と判断した (S I 007)。焼土は広範囲から検出されることから焼失住居と推測する。貝層は検出されなかった。

**8 トレンチ** 全面が硬化することから、住居と判断した (S I 008)。西部に黒褐色のプランが確認でき、S I 008 同様に硬化していることから、別の住居と判断した (S I 009)。貝層は検出されなかった。

**9 トレンチ** ほぼ全面より貝層が確認でき、中央部・南部に貝層密集範囲がある。南部の貝層密集範囲は破砕貝が非常に多い。また、南部貝層密集範囲下から土坑を検出した (S K 002)。南部からは貝層が確認できず、西壁南部に設定したサブトレンチからも貝層が確認できないことから、貝層範囲の南限と推測する。

**10 トレンチ** 全面が硬化することから、全面を住居と判断した (S I 010)。北西隅からは、まとまって遺物が出土し、遺物出土地点周辺に粘土が確認できることから、竈の可能性はある。出土遺物より奈良・平安時代のものとして推測する。貝層は検出されなかった。

**11 トレンチ** 北壁に設定したサブトレンチにおいて、北東隅より楕円形のプランを検出した。隣接トレンチの遺構検出状況から、弥生～古墳時代の住居と判断した (S I 011)。貝層は検出されなかった。

**12 トレンチ** 全面より貝層が確認でき、北部に貝層密集範囲がある。貝層密集範囲からは加曾利 B 式期の土器がまとまって出土することから、後期中葉の貝層と推測する。

**13 トレンチ** 全面より貝層が確認でき、貝層密集範囲が点在する。中央部の貝層密集範囲からはシカ頭骨が出土した。シカ頭骨下の貝層はサンプルとして採取した。

**14～16 トレンチ** 貝層は検出されなかった。

**17 トレンチ** 全面より貝層が確認でき、北部・南部に貝層密集範囲がある。西壁中央部にサブトレンチを設定し、サンプルを採集した。南部は攪乱の影響を受けるが、攪乱下でも貝層が確認できる。

**18 トレンチ** 中央部から貝層を確認した。北壁及び西壁北部に L 字状にサブトレンチを設定したところ、

北西隅より土坑1基を検出した（SK 003）。サブトレンチから貝層は確認できなかった。また、南部からも貝層は確認できず、周辺の貝層検出状況より、貝層範囲の南限と推測する。

19 トレンチ 貝層は検出されなかった。

20 トレンチ 西部より楕円形プラン、南部より不定形プラン、北東部よりピット2基を検出した。規模・形状より西部のプランは住居1基（SI 012）、南部の不定形プランは住居2基（SI 013、014）が切り合ったものと判断した。北東部のピット2基も形状から住居と判断した（SI 015）。

21 トレンチ 全面より貝層が確認でき、南部に貝層密集範囲がある。

22 トレンチ 全面より貝層を確認した。

23～25 トレンチ 貝層は検出されなかった。

## （2）遺構（第16・18図、第2表、図版6・8・9）

本調査区においては、土坑3基、住居15軒が検出された。土坑1基（SK 002）は貝層下から検出されたため縄文時代、住居は出土遺物・検出状況及び周辺遺跡での遺構検出状況から弥生時代後期～古墳時代後期のものが主体と推測するが、未調査のため詳細は不明である。ここでは精査を実施したSK 001・003について記述する。

### SK 001

位置：2T中央部西側 形状：楕円形 規模：残存長軸0.78m、短軸0.65m、深さ0.12m

主軸：N-25° - W 覆土：ローム粒子を極微量含む暗褐色土

出土遺物：確認面で堀之内1式期の埋設土器が出土した。埋設土器は口縁部を北西方向、底部を南東方向に向けた横倒しの状態で出土した。確認面側の口縁～底部にかけては欠損しており、耕作の影響を受けたものと推測する。土器内部からは人骨が検出された。土器以外の出土物は2T-貝層骨4・6が出土した。出土土器の状況から、堀之内1式期の墓坑と推測する。土坑下からは中期中葉の貝層が検出される。

### SK 003

位置：18T北西隅 形状：楕円形 規模：長軸・短軸不明、深さ0.19m

主軸：不明 覆土：しまりの弱い暗褐色土

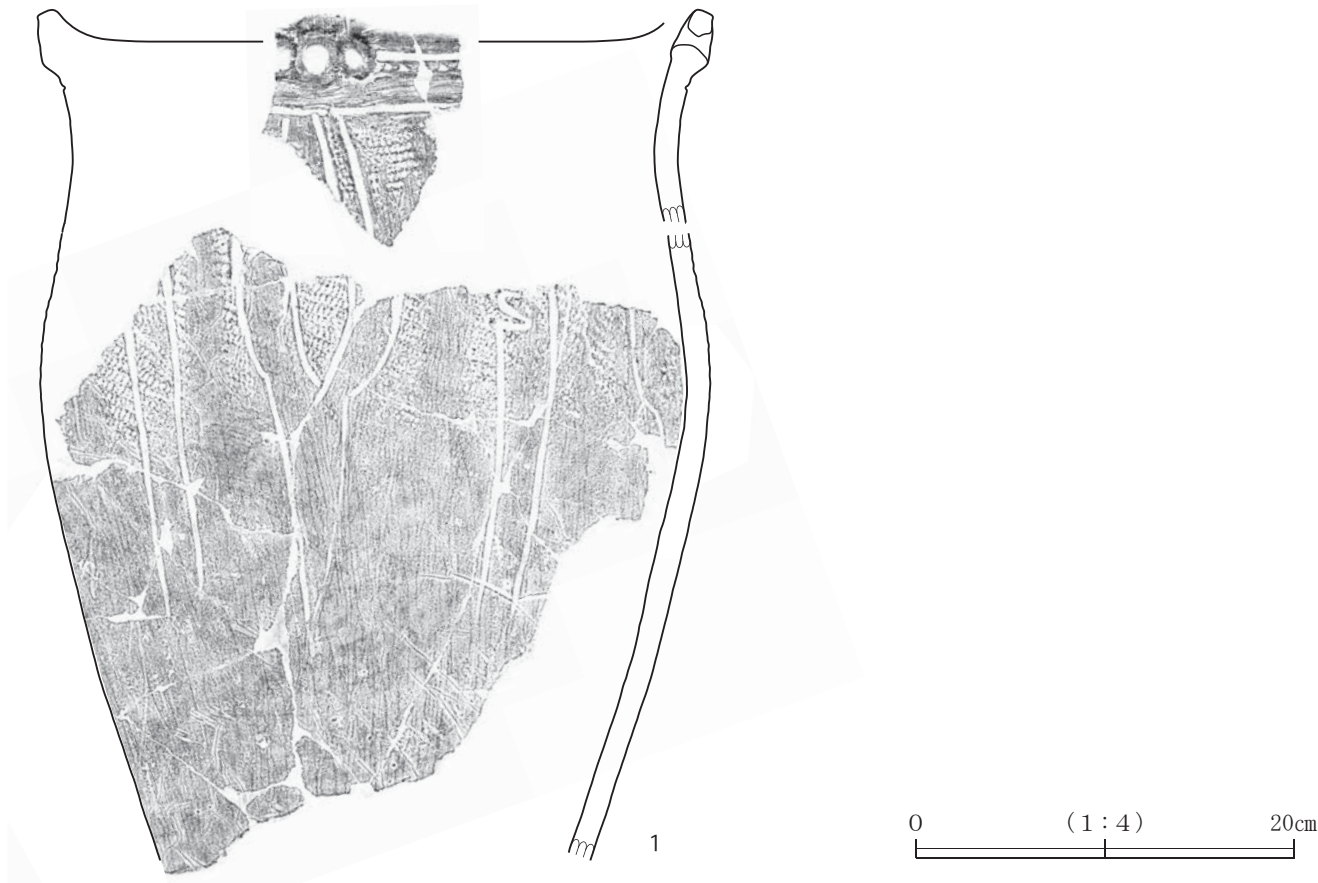
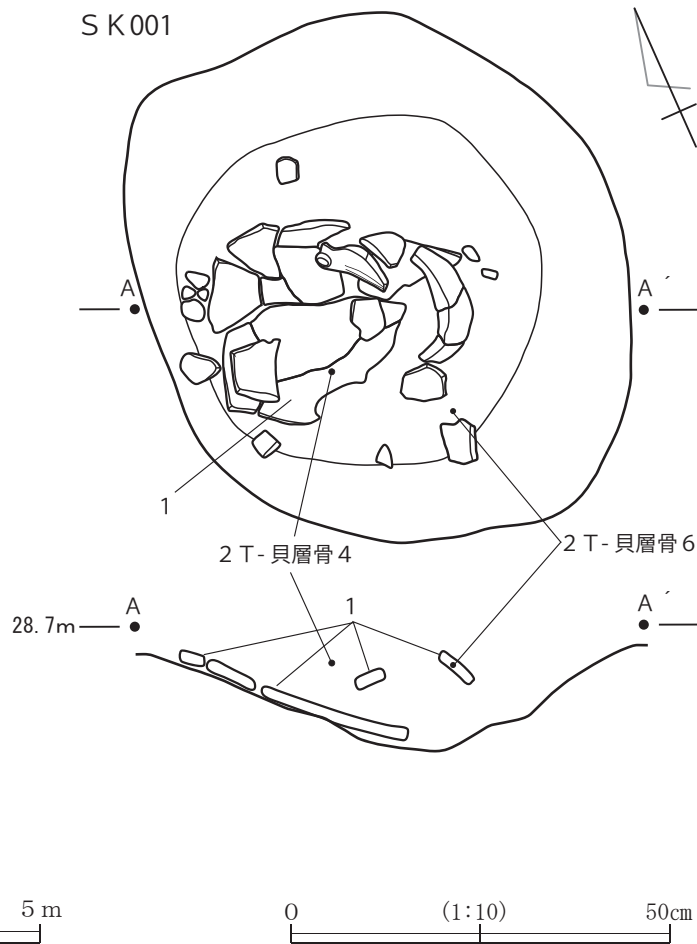
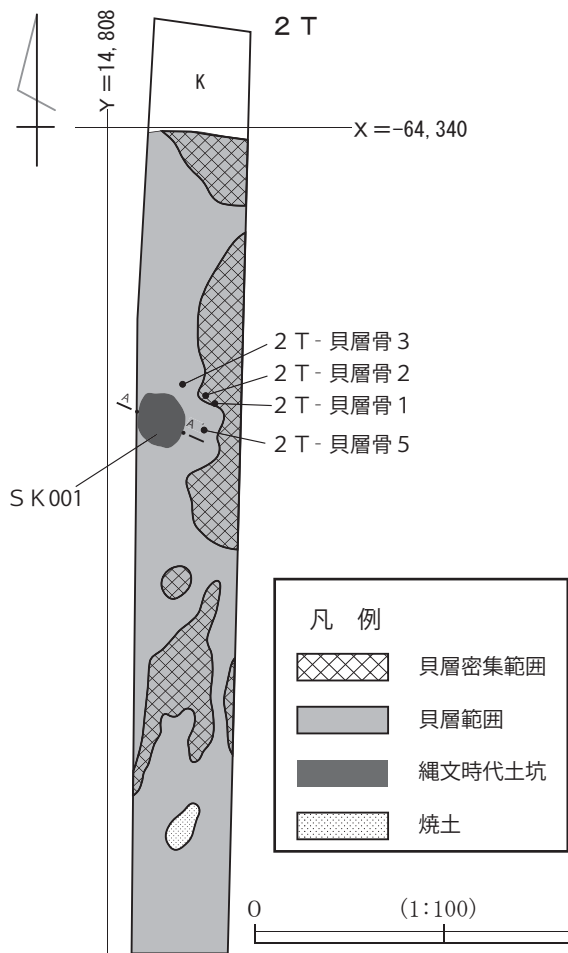
出土遺物：確認面で堀之内1式期の埋設土器が出土した。埋設土器は口縁部を西方向、底部を東方向に向けた横倒しの状態で出土した。確認面側の口縁～胴部にかけては欠損しており、耕作の影響を受けたものと推測する。土器内部からは人骨が検出された。出土土器の状況から、堀之内1式期の墓坑と推測する。本土坑周辺からは貝層が検出されなかった。

第2表 宮ノ越貝塚遺構出土土器観察表

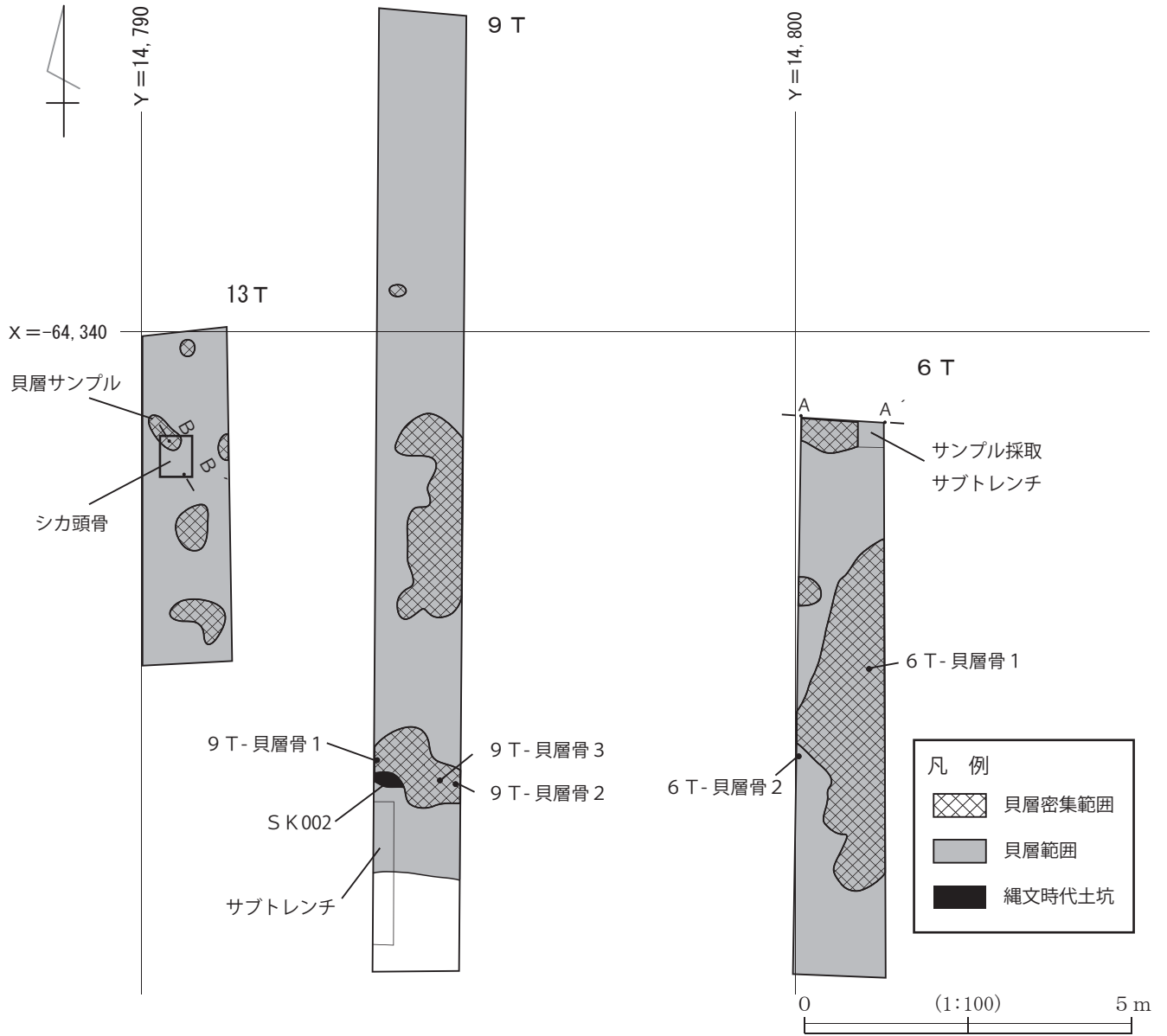
挿図番号	出土位置	名称	部位	時期	口径	器高	底径	文様及び調整	備考
第16図-1	SK001	深鉢	口縁～胴部	堀之内1	(34.2)	-	-	波状口縁を呈し、波頂部には穿孔された円孔文とその両側に未穿孔の円孔文を施す。口縁部下には沈線文、刺突文が巡る。胴部は単節RL縄文を地文とし、懸垂文を施す。	
第18図-1	SK003	深鉢	口縁～底部	堀之内1	(50.6)	60.8	13.6	単節LR縄文を地文とし、2条1単位の沈線文を施す。 工具は半藪竹管か？ 沈線文は、頸部の渦巻状沈線文(4単位)、渦巻状沈線文間に横位沈線文、渦巻状沈線文下に縦位大弧状沈線文(2段)、大弧状沈線文間に縦位小弧状沈線文(3段)、大弧状沈線文と右小弧状沈線文間に斜位沈線文の順に施す。	

単位:cm、():推定

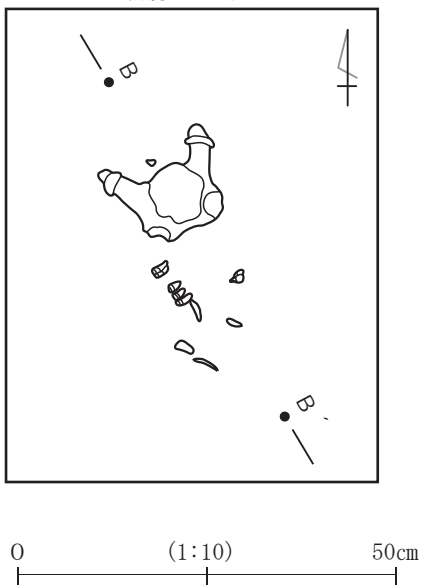




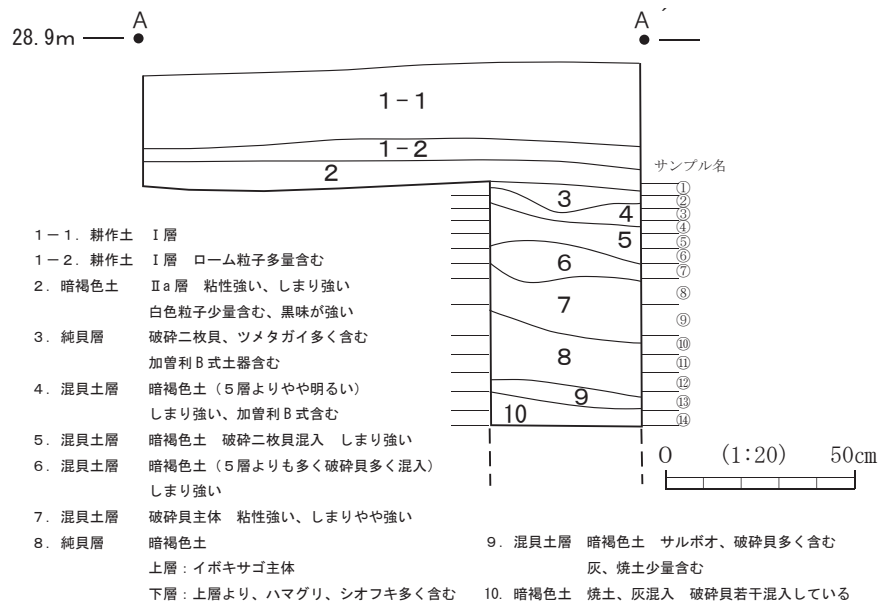
第16図 宮ノ越貝塚2トレンチ遺構確認状況図、断面図、出土土器実測図



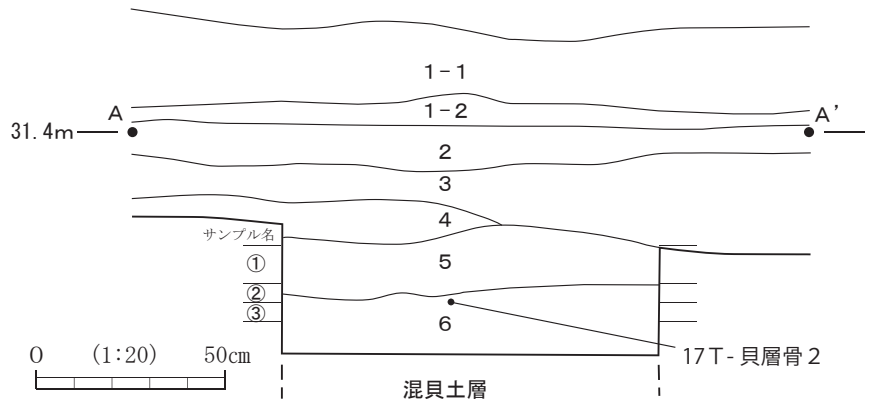
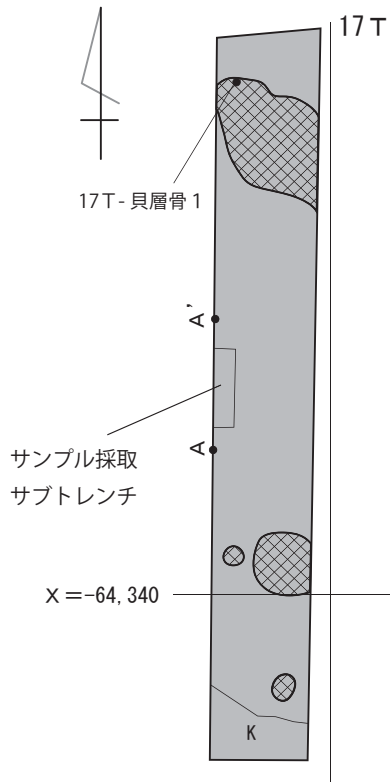
13Tシカ頭骨出土状況図



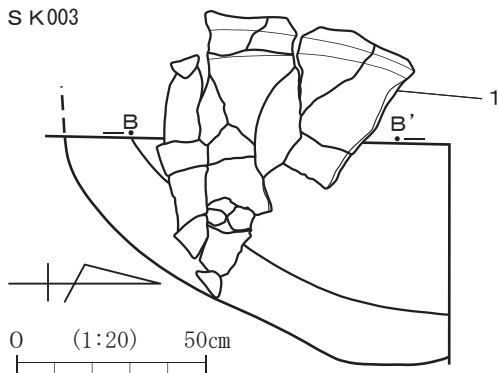
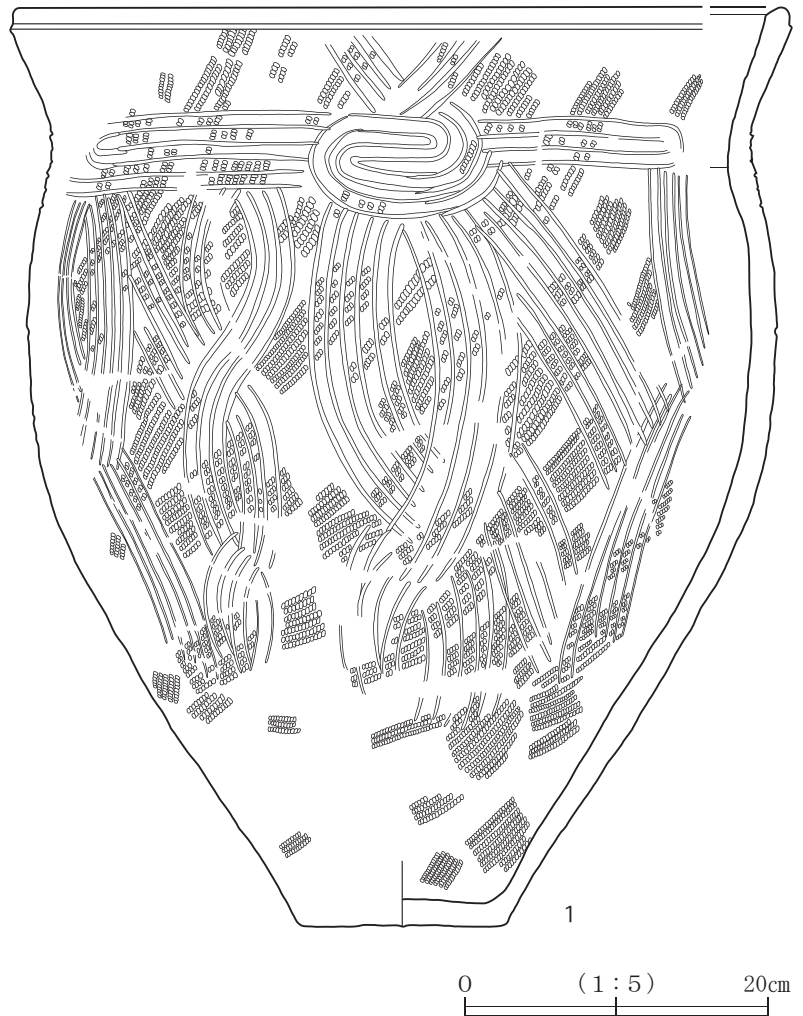
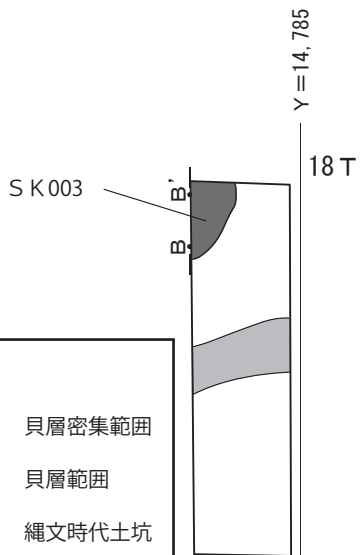
6Tサブトレンチ断面図



第17図 宮ノ越貝塚6・9・13トレンチ遺構確認状況図、シカ頭骨出土状況図、断面図



- |                           |                         |
|---------------------------|-------------------------|
| 1-1. 耕作土 I層               | 4. 暗褐色土 IIb層 粘性強い、しまり強い |
| 1-2. 耕作土 I層 ローム粒子多量含む     | 微細な貝片極微量、ロームブロック含む      |
| 2. 暗褐色土 IIa層 粘性強い、しまり強い   | 5層よりやや明るい               |
| 白色粒子少なく、黒味が強い             | 5. 暗褐色土 粘性やや強い、しまり強い    |
| 3. 暗褐色土 IIb層 粘性やや強い、しまり強い | 微細な貝片極微量、ローム粒子微量含む      |
| 微細な貝片微量、微小土器片多量含む         | 6. 黒褐色土 (混貝土層) 粘性やや強い   |
| ローム粒子、白色粒子少量含む            | 破砕貝が多い                  |



第18図 宮ノ越貝塚17・18トレンチ遺構確認状況図、断面図、出土土器実測図

### (3) 出土遺物

#### 土器 (第19～23図、第4～6表、図版9～13)

縄文土器58, 280.21 g、弥生土器1, 203.14 g、古墳時代土師器2, 191.24 g、奈良・平安時代土師器493.29 g、須恵器412.34 g、陶磁器137.51 gが出土した。縄文土器の出土量の比率は、全体の約9割に当たり、精製土器と粗製土器の出土比率は、精製土器が約5割、粗製土器が約2割である。精製土器の型式別出土比率は、堀之内1式が約65%、加曾利EⅡ式が約12%、加曾利B式が約8%、称名寺式・堀之内2式が約5%、加曾利EⅠ式が約2%、その他が1%以下である。SK 001・003から厚く、残存率の高い堀之内1式土器(SK 001-1:2, 866.30 g、SK 003-1:15, 320.90 g)が出土しているため、同時期の重量比が大きくなっている。この2点を除いた型式別出土土器比率は、加曾利EⅡ式が約28%、堀之内1式・加曾利B式が約19%、称名寺式・堀之内2式が約11%、加曾利EⅠ式が約5%、その他が1%以下である。遺構出土遺物を除いた時期別の土器出土量の比率は、中期中葉が約36%、中期後葉が約2%、後期初頭が約11%、後期前葉が約30%、後期中葉が約19%、後期後葉、晩期前半が1%以下であり、中期中葉と後期初頭～中葉にかけての土器出土量に対して、中期後葉の土器出土量が少ないことがわかる。出土位置は、後世の耕作の影響や貝層上層で調査を終了した関係もあり、主だった傾向は見られない。縄文土器以外では弥生土器、古墳時代土師器が多く出土しており、出土位置は調査区南側の貝層範囲外が中心である。

#### 土製品 (第24図、第7表、図版13)

土器片に挟りがあるものを土器片錘、土器片に二次加工が施され、円形もしくは楕円形を呈するものうち、土器片錘を除いたものを土製円盤とした。土器片錘は8点、土製円盤は4点出土した。土器片錘に使用される土器片の型式は、加曾利E式4点、連弧文?1点、不明3点であり、中期後半のものが大半を占める。3のみ挟りは1箇所、他7点は対向する方向に1対の挟りを有する。最大長が4.5～6cmの大型のもの、3cm前後の小型のものに2分される。重量の平均は、大型のもので約35g、小型のもので約14gである。土製円盤は、1点が縄文のみ、3点が無文のため、時期は不明である。規模は最大長が推定5cm以上の大型のもの、3cm前後の小型のものに2分される。重量の平均は、大型のもので約23g、小型のもので約12gである。

#### 石器・礫 (第25図、第8表、図版13))

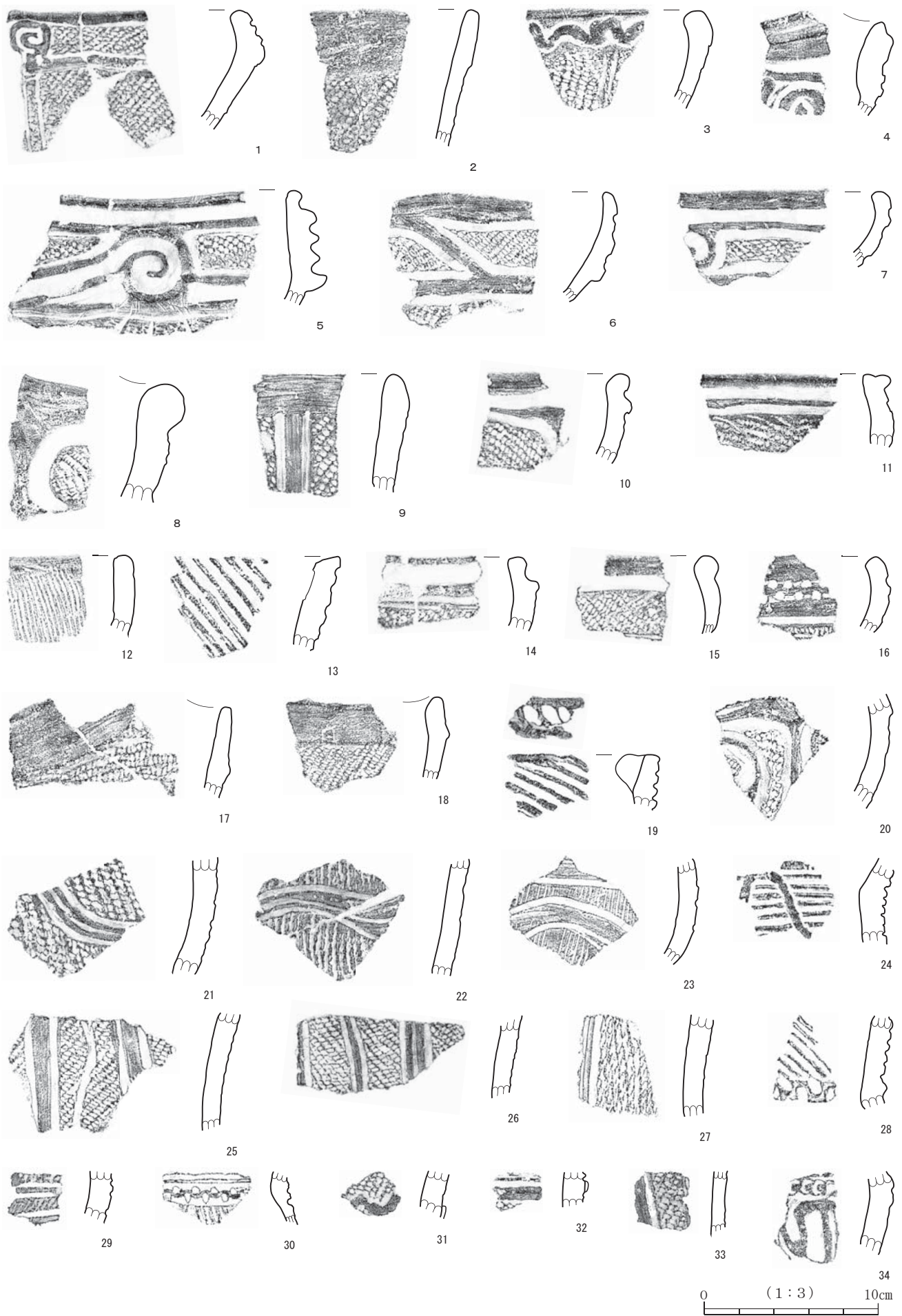
石器は52点出土した。内訳は磨石類13点、砥石6点、楔形石器3点、打製石斧2点、石棒?2点、石皿1点、磨製石斧1点、軽石製品1点、二次加工のある剥片1点、石核1点、剥片21点である。剥片を除くと、磨石類や砥石等の加工具が主体となる。砥石の一部は、貝層範囲外から多く検出されている弥生～古墳時代や奈良・平安時代の住居と同時期のものと推測する。

礫は177点、6,399.44 g、軽石は6点、102.52 g出土した。今回は石材・被熱痕跡の有無等の観察・記載は行っていない。

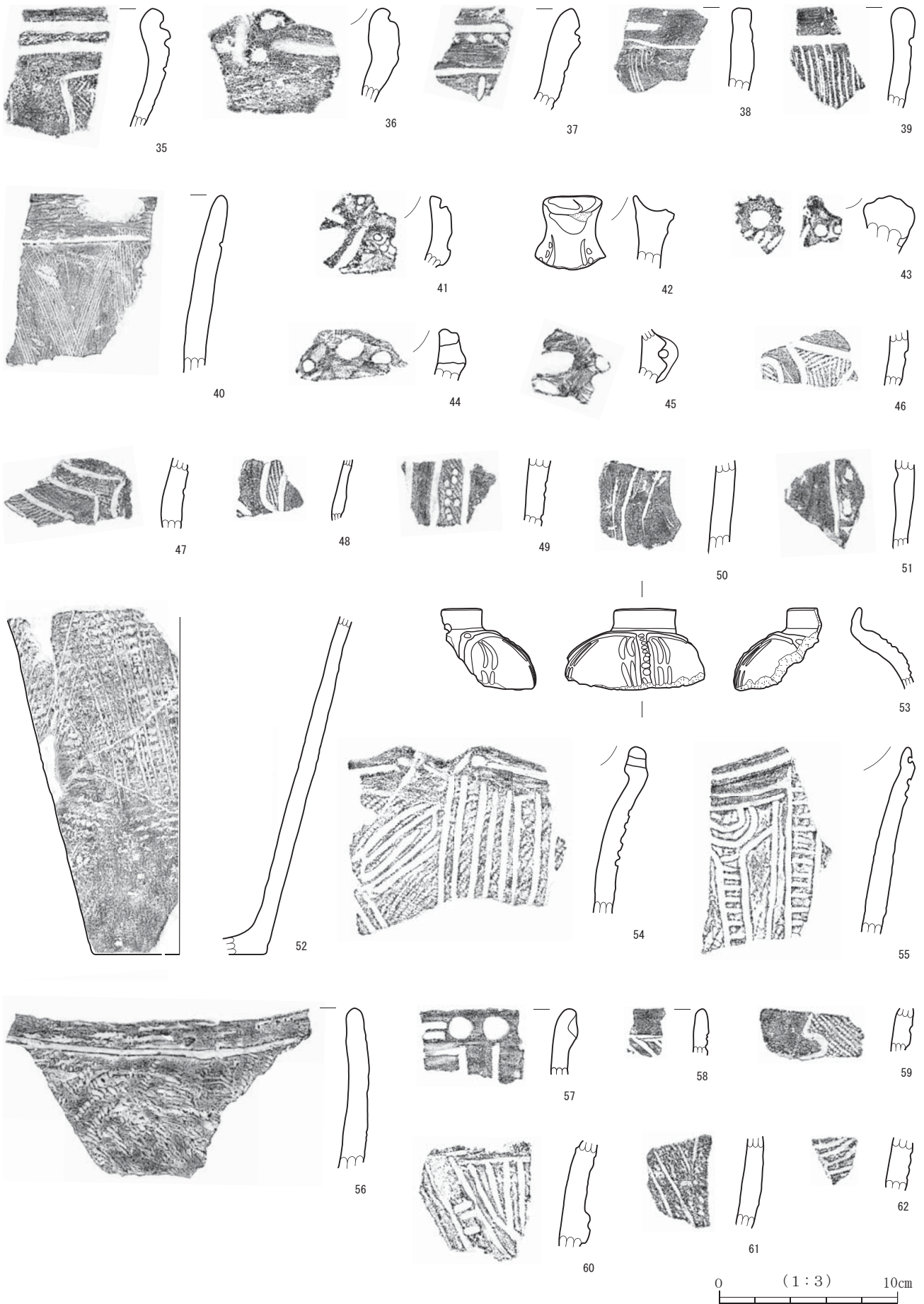
#### 貝製品・骨角歯牙製品 (第26図、図版13)

貝製品2点、骨角歯牙製品1点が出土した。1は貝刃で、素材はハマグリである。貝層サンプル6T-A⑬から検出された。殻長軸長7.3cm、殻高1.9cm、17.65gである。貝殻腹縁部内面に連続する小剥離痕が見られ、剥離痕の間には擦痕が確認できる。検出貝層サンプルから中期中葉～後期前葉のものと推測する。2はへら状貝製品で、素材はチョウセンハマグリである。貝層サンプル6T-A⑧から検出された。殻長軸長7.0cm、殻高1.6cm、32.10gである。貝殻腹縁部に擦痕が見られないことから、本形状の状態で持ち込まれたものと推測する。検出貝層サンプルから後期前葉のものと推測する。3は遺存状況が悪いが、管状垂飾と推測する。素材は骨であるが、種は不明である。貝層サンプル17T③から検出された。高さ0.7cm、遺存幅1.1cm、0.17gである。両端は擦り切りにより切断される。検出貝層サンプルから中期中葉～後期前葉のものと推測する。

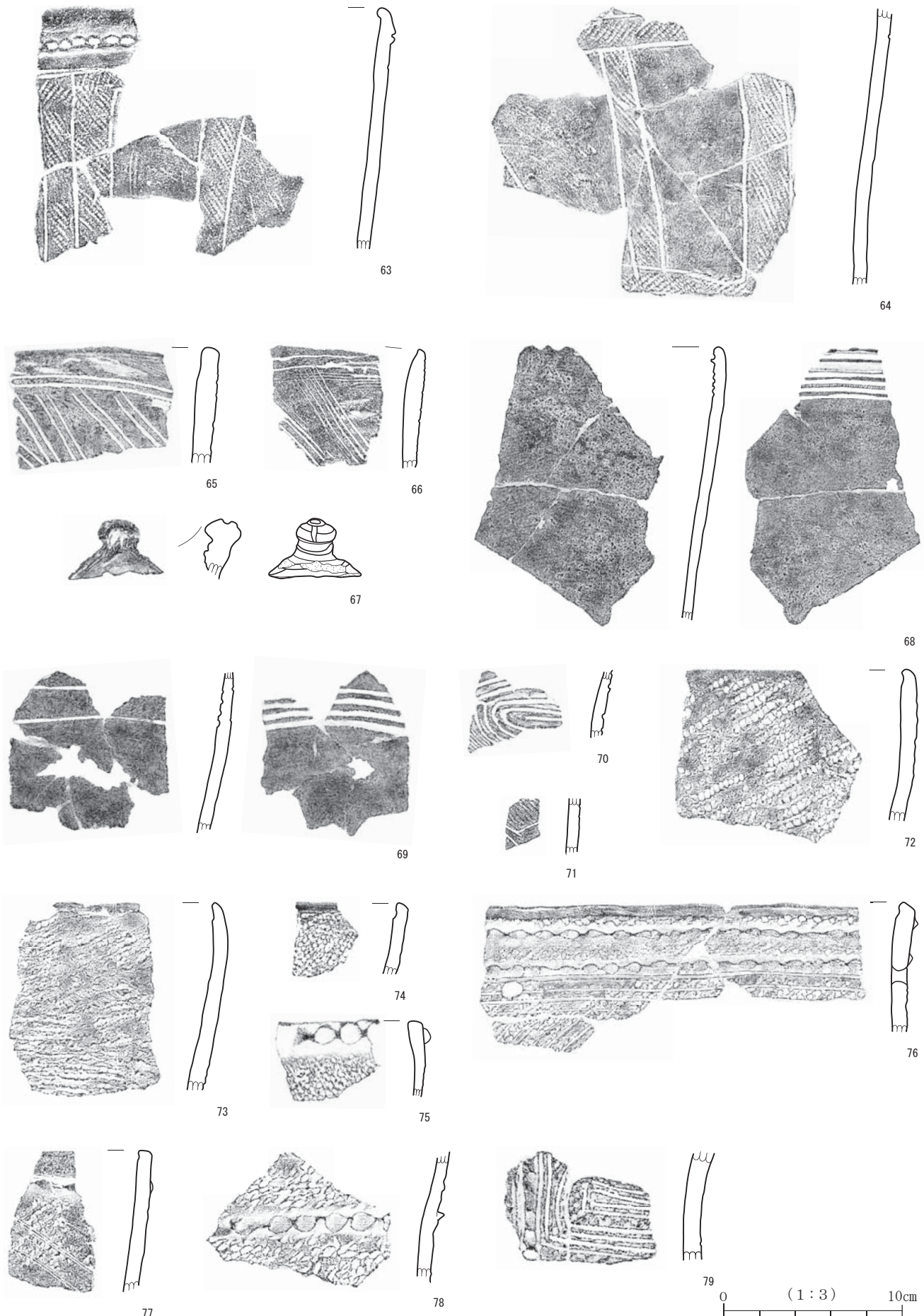




第19図 宮ノ越貝塚出土土器実測図①

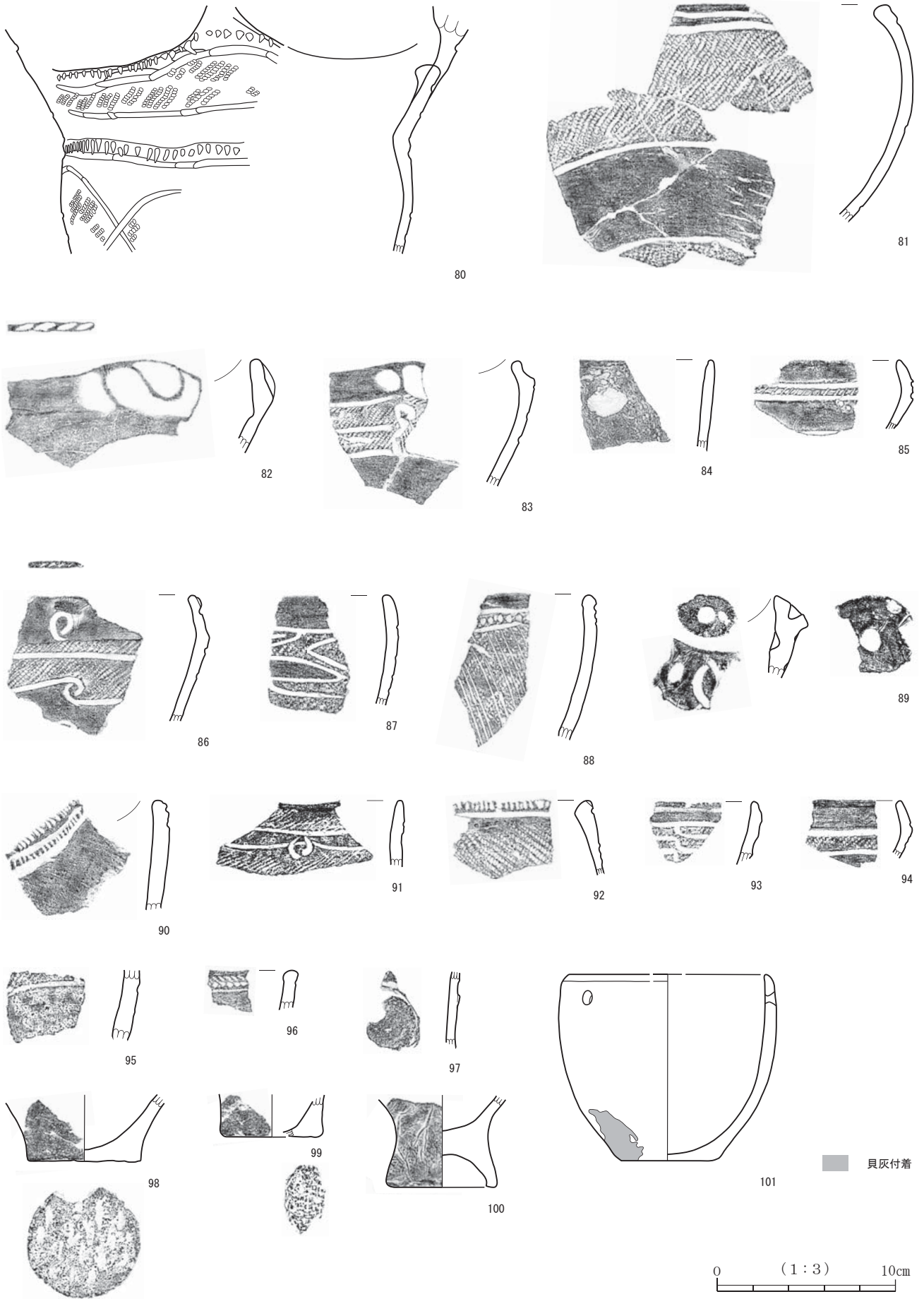


第20図 宮ノ越貝塚出土土器実測図②

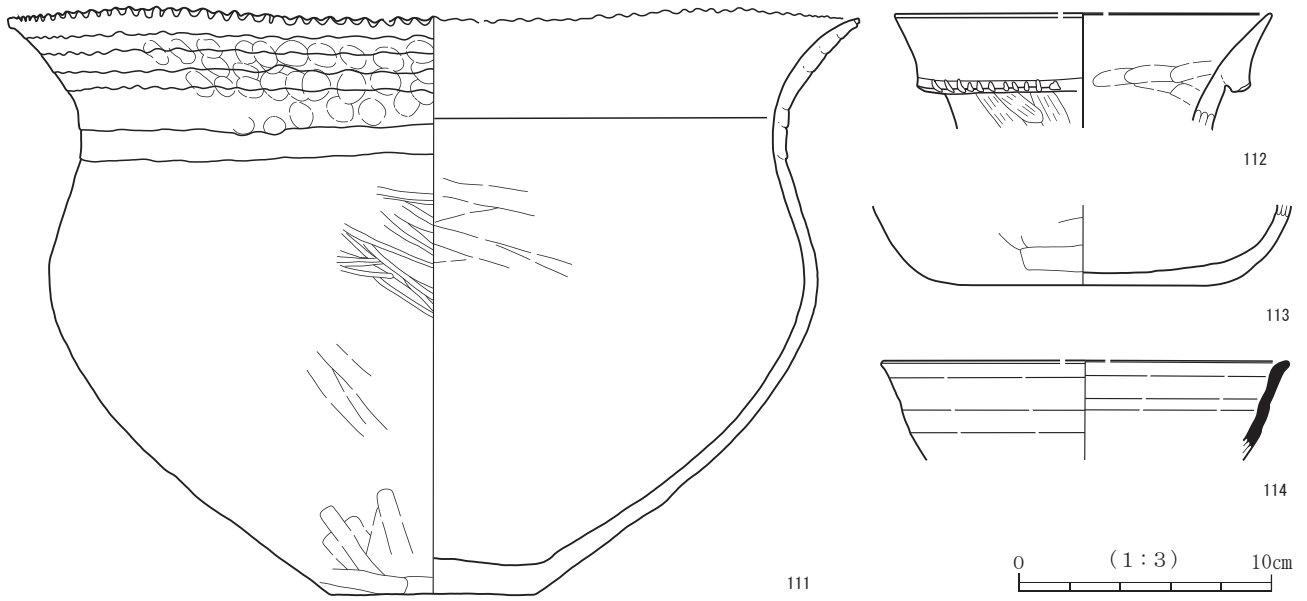
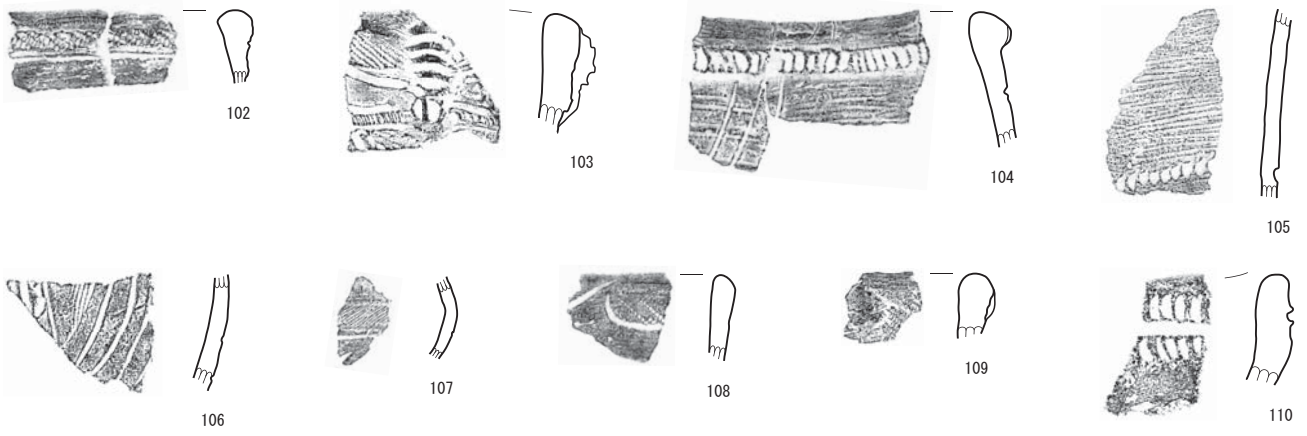


第21図 宮ノ越貝塚出土土器実測図③

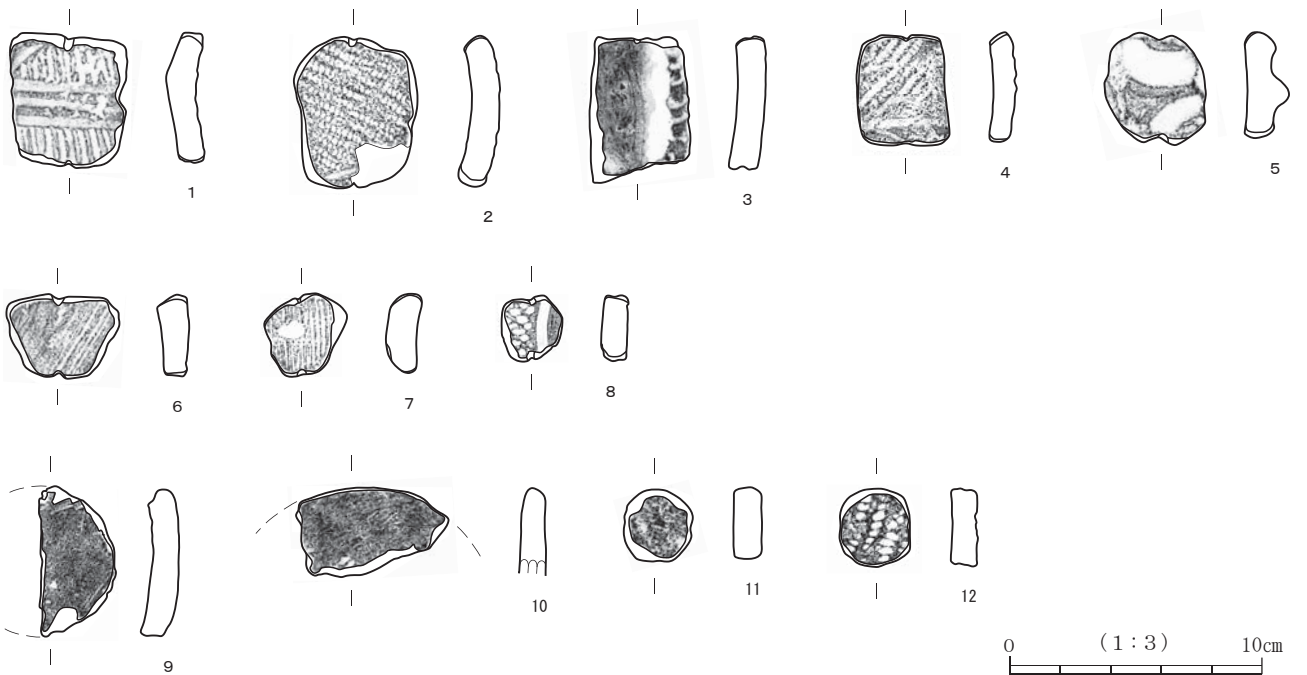




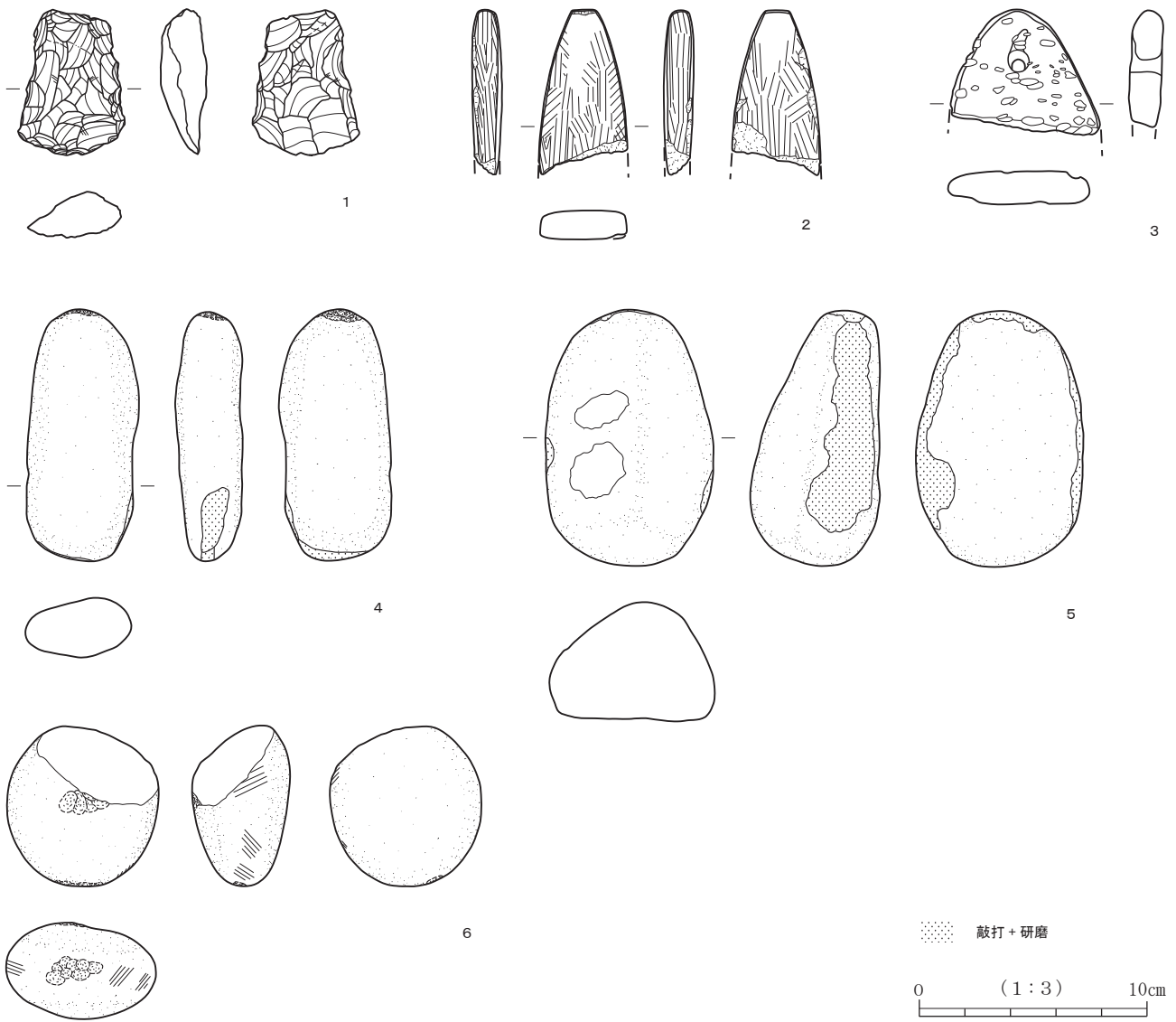
第22図 宮ノ越貝塚出土土器実測図④



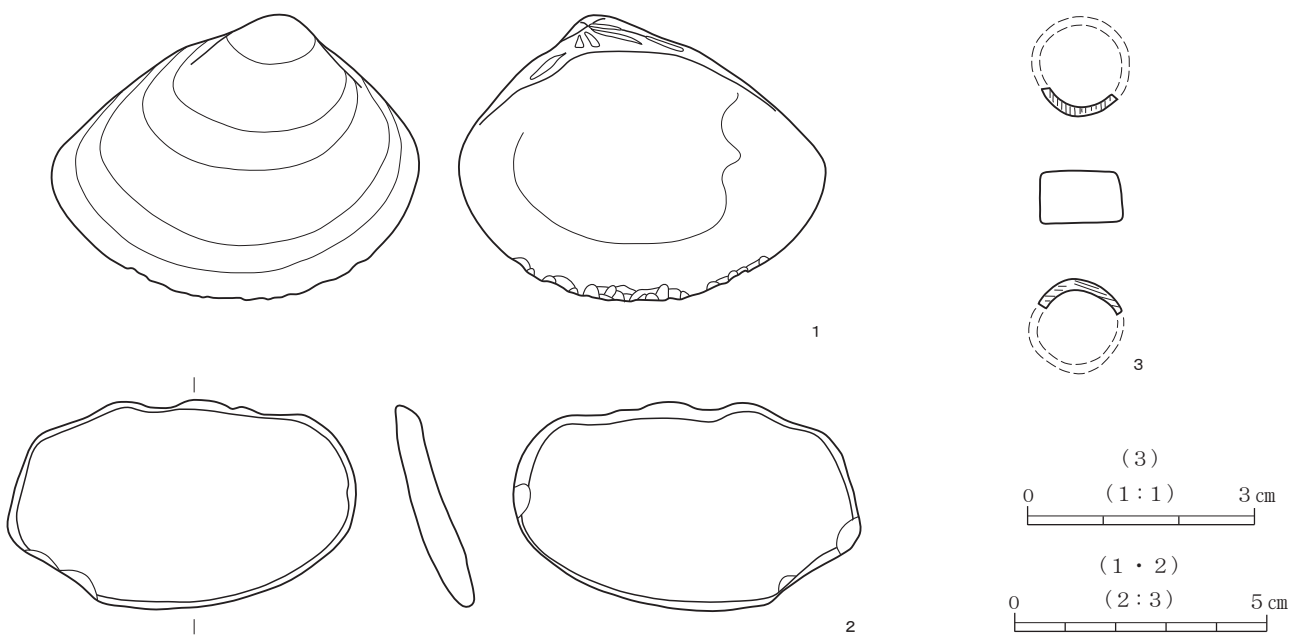
第23图 宮ノ越貝塚出土土器実測図⑤



第24图 宮ノ越貝塚出土土製品実測図



第 25 図 宮ノ越貝塚出土石器実測図



第 26 図 宮ノ越貝塚出土貝製品・骨角歯牙製品実測図

第4表 宮ノ越貝塚出土土器観察表①

単位:cm、() :推定

挿図番号	出土位置	名称	部位	時期	口径	器高	底径	文様及び調整
第19図-1	18T	深鉢	口縁部	加曾利E I	-	-	-	単節RL縄文を地文とし、口縁部隆帯区画内に隆帯と沈線により渦巻文を施文し、渦巻文以下の胴部に2条の垂下沈線を施す。
第19図-2	14T	深鉢	口縁部	加曾利E I	-	-	-	口縁部無文で全体的にやや肥厚する。頸部以下に単節RL縄文を施す。
第19図-3	19T	深鉢	口縁部	加曾利E I	-	-	-	口縁部に蛇行する粘土紐を横位に貼り付け、貼付以下に単節LR縄文を施す。
第19図-4	25T	深鉢	口縁部	加曾利E I	-	-	-	波状口縁。口唇部は若干窪む。口縁部には貼付による隆帯を施す。
第19図-5	22T	深鉢	口縁部	加曾利E II	-	-	-	単節RL縄文を地文とし、口縁部に横S字状の隆帯による文様を施文する。頸部には若干の無文帯が形成され、渦巻状隆帯下の胴部に垂下する沈線を施す。
第19図-6	21T	深鉢	口縁部	加曾利E II	-	-	-	単節RL縄文を地文とし、口縁部に隆帯を施す。
第19図-7	2T	深鉢	口縁部	加曾利E II	-	-	-	単節LR縄文を地文とし、口縁部に隆帯を施す。
第19図-8	1T	深鉢	口縁部	加曾利E II	-	-	-	波状口縁を呈する。隆帯と沈線による枠状区画内に単節RL縄文を施す。
第19図-9	18T	深鉢	口縁部	加曾利E II	-	-	-	単節RL縄文を地文とし、縦位2条の沈線間を磨消す。
第19図-10	19T	深鉢	口縁部	加曾利E II	-	-	-	単節RL縄文を地文とし、隆帯と沈線による区画内を磨消す。
第19図-11	3T	深鉢	口縁部	加曾利E II	-	-	-	口唇部の中央が横位にやや窪む。単節RL縄文を地文とし、口縁部に平行する沈線を施す。
第19図-12	3T	深鉢	口縁部	加曾利E II	-	-	-	縦位に櫛歯状工具による沈線を施す。
第19図-13	19T	深鉢	口縁部	加曾利E II	-	-	-	外面に斜行文を施し、内面の貼付は剥落する。曾利系。
第19図-14	6T	深鉢	口縁部	加曾利E II	-	-	-	横位隆帯貼付により口縁部横位凹線状を呈する。隆帯下に横位に2条の沈線施文後、単節RL縄文を施す。
第19図-15	9T	深鉢	口縁部	加曾利E II	-	-	-	区画文内に単節RL縄文を施す。
第19図-16	18T	深鉢	口縁部	加曾利E II	-	-	-	口縁部横位に2条の円形刺突文を施し、頸部沈線以下に燃糸文施文後横位沈線を施す。
第19図-17	18T	深鉢	口縁部	加曾利E IV	-	-	-	波状口縁。隆起線作出後、隆起線以下に単節RL縄文を施す。
第19図-18	19T	深鉢	口縁部	加曾利E IV	-	-	-	波状口縁。隆起線作出後、隆起線以下に単節RL縄文を施す。
第19図-19	14T	深鉢	口縁部	曾利	-	-	-	口縁部内面に横位に粘土紐貼付後、口唇部に連続する刻みを施し、口縁部外面に斜行文を施す。
第19図-20	12T	深鉢	胴部	加曾利E II	-	-	-	隆帯に伴う沈線間に単節LR縄文を充填する。大木式の影響か。
第19図-21	24T	深鉢	胴部	加曾利E II	-	-	-	複節LRL縄文を地文とし、3条1対の沈線による波状文を施文し、沈線間を磨消す。
第19図-22	19T	深鉢	胴部	加曾利E II	-	-	-	燃糸文を地文とし、3条の沈線による波状文を施文し、沈線間を磨消す。
第19図-23	19T	深鉢	胴部	加曾利E II	-	-	-	櫛歯状工具による縦位条線文を地文とし、波状沈線間を磨消す。
第19図-24	22T	深鉢	胴部	加曾利E II	-	-	-	数条の横位沈線施文後、大きく蛇行する細い粘土紐を貼付ける。
第19図-25	2T	深鉢	胴部	加曾利E II	-	-	-	単節RL縄文を地文とし、2条の縦位沈線間を磨消す。縄文施文部にはやや蛇行する垂下沈線を1条施す。
第19図-26	18T	深鉢	胴部	加曾利E II	-	-	-	単節LR縄文を地文とし、2～3条の縦位沈線間を磨消す。
第19図-27	6T	深鉢	胴部	加曾利E II	-	-	-	燃糸文を地文とし、縦位沈線間を磨消す。
第19図-28	17T	深鉢	胴部	加曾利E II	-	-	-	口縁部に斜行文、頸部屈曲部に交互刺突文を施す。曾利系。
第19図-29	9T	深鉢	胴部	阿玉台～加曾利E I	-	-	-	無節Iを地文とし、横位沈線区画内の一部を磨消す。沈線より上側に横位連続刺突文を施す。胎土に金雲母を多量に含む。
第19図-30	7T	深鉢	胴部	加曾利E I	-	-	-	頸部に交互刺突文を施し、頸部以下に燃糸文を施す。連弧文系。
第19図-31	2T②	深鉢	胴部	加曾利E I	-	-	-	単節RL縄文を地文とし、蛇行する横位粘土紐を貼付ける。
第19図-32	2T③	深鉢	胴部	加曾利E I	-	-	-	単節RL縄文を地文とし、横位隆帯文を貼付ける。
第19図-33	2T③	深鉢	胴部	加曾利E II	-	-	-	単節RL縄文を地文とし、縦位沈線間を磨消す。
第19図-34	10T	深鉢	胴部	曾利	-	-	-	深鉢の頸部付近か。横位に貼付文上に半截竹管による連続刺突を施し、その下部に大きく蛇行する貼付文を施す。
第20図-35	7T	深鉢	口縁部	称名寺	-	-	-	口縁部に2条の横位沈線を施し、沈線間に縄文を充填する。沈線下にはクランク状の沈線区画内に縄文を施す。
第20図-36	2T	深鉢	口縁部	称名寺	-	-	-	波頂部に縦位に2個1対の円孔を施した貼付文施文後、横位沈線を施す。
第20図-37	4T	深鉢	口縁部	称名寺	-	-	-	口縁部がやや肥厚し、横位沈線下の隆帯に連続する刺突を施す。刺突下の無文帯を挟み横位沈線を施し、その下に縦位沈線を施すようである。
第20図-38	24T	深鉢	口縁部	称名寺	-	-	-	横位沈線以下に櫛歯状工具による垂下沈線を施す。
第20図-39	19T	深鉢	口縁部	称名寺	-	-	-	横位沈線以下に櫛歯状工具による垂下沈線を施す。
第20図-40	6T	深鉢	口縁部	称名寺	-	-	-	櫛歯状工具による垂下沈線を鋸歯状に施文後、横位に連続する刻みを施し、刻みに横位沈線を施す。
第20図-41	10T	深鉢	口縁部	称名寺	-	-	-	やや波状を呈する口縁の波頂部。隆帯貼付後、刺突や沈線を施す。
第20図-42	22T	深鉢	口縁部	称名寺	-	-	-	波状口縁の波頂部。口唇部は「の」の字状の隆帯が巡り皿状に窪む。外面に縦位沈線と沈線に沿った刺突を施す。
第20図-43	11T	深鉢	口縁部	称名寺	-	-	-	波状口縁の波頂部。側面観が円形を呈し、片面の中央部に円形の窪み、窪み下に短沈線を数条施し、縁辺には連続する刻みを施文する。外面には数個の刺突を施す。
第20図-44	9T	深鉢	口縁部	称名寺	-	-	-	波状口縁の波頂部。中央部が穿孔され、その左右に数個の刺突を施す。
第20図-45	4T	深鉢	胴部	称名寺	-	-	-	突起が貼り付けられ、突起を貫通する横位沈線を施す。
第20図-46	9T	深鉢	胴部	称名寺	-	-	-	沈線区画内に単節LR縄文を充填する。

第5表 宮ノ越貝塚出土土器観察表②

単位:cm、() :推定

挿図番号	出土位置	名称	部位	時期	口径	器高	底径	文様及び調整
第20図-47	14T	深鉢	胴部	称名寺	-	-	-	屈曲する沈線区画内に縄文を施す。
第20図-48	3T	深鉢	胴部	称名寺	-	-	-	縦位沈線間に単節LR縄文を施す。
第20図-49	18T	深鉢	胴部	称名寺	-	-	-	縦位沈線間に単節RL縄文を施した後、連続する刺突を施す。
第20図-50	19T	深鉢	胴部	称名寺	-	-	-	縦位沈線区画内に列点を施す。
第20図-51	19T	深鉢	胴部	称名寺	-	-	-	縦位沈線間に連続する刺突を施す。
第20図-52	18T	深鉢	胴～底部	堀之内1	-	-	(9.7)	単節RL縄文施文後、斜位条線文を施す。
第20図-53	24T	注口土器?	口縁～胴部	堀之内1	3.2	-	-	胴部は球形を呈し、口縁部は直立ぎみに立ち上がる。口縁部無文で、頸部に隆帯を貼付け、頸部隆帯から垂下する隆帯上に連続する刺突を施す。垂下隆帯の左右には2条1対の弧線文を数段施すようである。頸部の対になる位置に焼成前の穿孔を施す。
第20図-54	3T	深鉢	口縁部	堀之内1	-	-	-	2個1対の小波状口縁。各波頂部に穿孔を施し、口縁部に沿って沈線が巡る。単節RL縄文施文後、縦位沈線を通し、沈線間を結ぶ斜行沈線を通す。
第20図-55	9T	深鉢	口縁部	堀之内1	-	-	-	波状口縁。単節RL縄文施文後縦位沈線を通し、沈線間に横位短沈線により梯子状の文様を呈する。
第20図-56	17T	深鉢	口縁部	堀之内1	-	-	-	内傾する口縁部。横位沈線施文後、沈線以下に単節LR縄文と無節R縄文を施す。
第20図-57	14T	深鉢	口縁部	堀之内1	-	-	-	口縁部に横位に複数個の円形の窪みを施し、窪みの脇に2条の横位沈線、窪み下に縦位沈線とクラック状の沈線を通す。
第20図-58	17T	深鉢	口縁部	堀之内1	-	-	-	横位沈線施文後、斜位沈線を通す。
第20図-59	2T	深鉢	胴部	堀之内1	-	-	-	蛇行する垂下沈線の区画内に単節LR縄文を施す。
第20図-60	2T	深鉢	胴部	堀之内1	-	-	-	斜位隆帯貼付後、沈線を通し、隆帯上に連続する刻みを施す。
第20図-61	2T	深鉢	胴部	堀之内1	-	-	-	縄文を地文とし、条線文を施す。
第20図-62	6T	深鉢	胴部	堀之内1	-	-	-	数条の斜位沈線を通す。
第21図-63	18T	深鉢	口縁～胴部	堀之内2	-	-	-	口縁部外面に横位に連続する刻みを施した貼付文を施し、口縁～胴部にかけては縦位2～3条の沈線間に単節LR縄文を施す。口縁部側の沈線はクラック状を呈する。口縁部内面に1条の沈線が巡る。
第21図-64	18T	深鉢	胴部	堀之内2	-	-	-	横位2条の沈線間に単節LR縄文を施した帯縄文を胴部上半と下半に施し、その区画内に縦位2条の沈線間に単節LR縄文を施した帯縄文を数組施す。
第21図-65	22T	深鉢	口縁部	堀之内2	-	-	-	外面に半藪竹管による横位沈線施文後、沈線以下に斜位沈線を通す。内面口縁部に横位に1条の浅い沈線を通す。
第21図-66	18T	深鉢	口縁部	堀之内2	-	-	-	小波状を呈する。櫛歯状工具による横位沈線施文後、沈線以下に斜位沈線を通す。内面口縁部に横位に1条の浅い沈線を通す。
第21図-67	12T	深鉢	口縁部	堀之内2	-	-	-	口縁の突起部。突起上部に環状の貼付を施し、その内面中央部側に1条の貼付を施す。頸部内面にも貼付を施したようであるが剥落している。
第21図-68	21T	浅鉢	口縁部	堀之内2	-	-	-	小波状を呈する。外面無文で、口縁部内面に横位に6条の沈線を通し、最上段の沈線間が貼付けにより突出する。上から2、4段目の沈線間には縦位の刻みを密に施す。
第21図-69	17T	深鉢	胴部	堀之内2	-	-	-	外面横位2条の沈線間に不明瞭ながら単節RL縄文を施すようである。内面には横位4条の沈線を通す。
第21図-70	9T	深鉢	胴部	堀之内2	-	-	-	数条の楕円形沈線を通した外側に縄文を施す。
第21図-71	6T-A⑧	深鉢	胴部	堀之内2	-	-	-	幾何学上の沈線を通し、沈線区画の上部に単節LR縄文を施す。
第21図-72	17T	深鉢	口縁部	堀之内2～加曾利B	-	-	-	外面に単節LR縄文を施し、内面口縁部に1条の沈線が巡る。
第21図-73	9T	深鉢	口縁部	堀之内2～加曾利B	-	-	-	外面に縄文を施し、内面に横位に1条の沈線が巡る。
第21図-74	9T	深鉢	口縁部	堀之内2～加曾利B	-	-	-	外面に単節RL縄文を施す。口縁部の紐線文は剥落したようである。内面に1条の沈線が巡る。
第21図-75	18T	深鉢	口縁部	堀之内2～加曾利B	-	-	-	単節RL縄文施文後、口縁部に紐線文を貼付ける。
第21図-76	18T	深鉢	口縁部	堀之内2～加曾利B	-	-	-	単節LR縄文施文後、横位に2条の紐線文を貼付け、下段の紐線文以下に4条の横位沈線を通した後に斜位の条線文を施す。内面に1条の横位沈線が巡る。補修孔。
第21図-77	17T	深鉢	口縁部	堀之内2～加曾利B	-	-	-	単節LR縄文施文後、斜位条線文を施した後、横位紐線文を貼付ける。口縁部内面には1条の沈線が巡る。
第21図-78	9T	深鉢	胴部	堀之内2～加曾利B	-	-	-	単節LR施文後、紐線文を貼付ける。
第21図-79	14T	深鉢	口縁部	堀之内2～加曾利B	-	-	-	縄文を地文とし、縦位に紐線文貼付け後、2条1対の工具により杵状の沈線を通す。
第22図-80	12T	深鉢	口縁～胴部	加曾利B	(21.3)	-	-	4単位の波状口縁。口縁部は沈線区画内に単節LR縄文を施し、口唇部に連続する刻みを施す。頸部は横位に2条の沈線施文後沈線間に連続する刻みを施す。胴部はたすき掛け状沈線区画内に単節LR縄文を施す。
第22図-81	12T	浅鉢	口縁～胴部	加曾利B	-	-	-	口縁部に横位2条の沈線、胴部に横位1条の沈線を通し、沈線間に単節LR縄文を施文する。胴部から底部の沈線間は無文帯となり、底部沈線区画内に縄文を施す。
第22図-82	17T	浅鉢	口縁部	加曾利B	-	-	-	口縁部に逆S字状の粘土紐を横位に貼付け、口唇部に連続する刻みを施す。内面と外面口縁部を著しく研磨し、内面は黒色を呈する。外面頸部以下はケズリを施す。
第22図-83	17T	鉢	口縁部	加曾利B	-	-	-	口縁部に円形の窪みを有する小突起を貼付ける。口縁部外面に横位沈線を3条施し、小突起下部に縦位2段の対弧文を施す。その後、沈線と対弧文上に単節LR縄文を施し、最上段の沈線下に沿って連続する刻みを施す。内外面ともよく研磨され、内面は黒色を呈する。
第22図-84	6T-A⑩	深鉢	口縁部	加曾利B	-	-	-	外面に疎らな縄文を施し、内面に横位に1条の沈線が巡る。
第22図-85	9T	鉢	口縁部	加曾利B	-	-	-	口縁部に2条の横位沈線施文後、沈線間に連続する斜位の刻みを充填する。頸部の沈線区画内に数個の円孔文を施すようである。
第22図-86	22T	鉢	口縁部	加曾利B	-	-	-	口唇部に刻みを施し、口縁部に対弧文施文後貼付文を施す。頸部横位沈線と横位入組文区画内に単節LR縄文を施す。
第22図-87	17T	鉢	口縁部	加曾利B	-	-	-	口縁部の横位沈線を境に、口縁部は無文となり、沈線以下は単節LR縄文を施文した後、蛇行する沈線を通し、部分的に縄文を磨消す。
第22図-88	12T	深鉢	口縁部	加曾利B	-	-	-	単節縄文施文後斜位条線文を施す。その後、口縁部に2条の横位沈線を通し、沈線区画内に連続する刺突を施す。
第22図-89	6T-A③	深鉢	口縁部	加曾利B	-	-	-	口縁部の突起。端部の平坦面中央に円形の窪み、外面に対弧文と対弧文の外側に楕円形の窪み、内面中央に円形の窪みを施す。内外面とも著しく研磨され、黒色を呈する。

第6表 宮ノ越貝塚出土土器観察表③

単位:cm、() :推定

挿図番号	出土位置	名称	部位	時期	口径	器高	底径	文様及び調整
第22図-90	22T	深鉢	口縁部	加曾利B	-	-	-	波状口縁。口縁部に沿って2条の沈線を施す。口唇部と沈線間に連続する刻みを施文後、沈線以下には無節rを施す。
第22図-91	6T-A③	鉢	口縁部	加曾利B	-	-	-	横位2条の沈線を施文し、下側の沈線上に対弧文を施す。沈線より口縁部側と下側の沈線以下に単節LR縄文を充填する。内外面ともに著しく研磨され、黒色を呈する。
第22図-92	17T	深鉢	口縁部	加曾利B	-	-	-	口縁部外面に横位に連続する刺突、刺突下に横位沈線、沈線下に単節RL縄文を施す。
第22図-93	9T	鉢	口縁部	加曾利B	-	-	-	口縁部に横位2条の沈線を施文後、数条のクランク状の横位沈線を施し、沈線間に縄文を充填する。
第22図-94	6T-A④	鉢	口縁部	加曾利B	-	-	-	頸部屈曲部に横位2条の沈線を施文し、沈線間に単節LR縄文を施す。内外面ともによく研磨され、内面は黒色を呈する。
第22図-95	6T-A⑩	鉢	胴部	加曾利B	-	-	-	胴部下半部で、横位沈線を施す。
第22図-96	9T	深鉢	口縁部	曾谷	-	-	-	単節LRを施した帯縄文上に連続する刻みを施す。
第22図-97	14T	深鉢	口縁部	新地?	-	-	-	粘土貼付けにより浮線文状を呈する。
第22図-98	9T	鉢	底部	加曾利B	-	-	6.3	底面に網代痕が認められる。
第22図-99	9T	深鉢	底部	加曾利B	-	-	(5.3)	底面に網代痕が認められる。
第22図-100	19T	台付鉢	台部	加曾利B	-	-	(5.8)	台付鉢の台部。内外面ともによく研磨される。
第22図-101	13T	鉢	口縁～底部	後期	(11.0)	10.5	5.2	口縁部内面に1条の横位沈線が巡る。補修孔。外面に貝灰付着。
第23図-102	3T	深鉢	口縁部	安行1	-	-	-	口縁部に単節RL縄文を施文した帯縄文を施し、帯縄文下の沈線区画内は無文帯となる。
第23図-103	8T	深鉢	口縁部	安行2	-	-	-	波状口縁の波底部。口縁部に単節RL縄文を施す帯縄文を施す。三角形の無文帯を挟み、連続する刻みを施す横位隆帯を貼付けた後、豚鼻状突起と横位短沈線を施す縦長の突起を貼付ける。
第23図-104	14T	深鉢	口縁部	後期安行	-	-	-	横位条線施文後、口縁部紐縄文を貼付ける。その後斜位に3条の沈線を施す。
第23図-105	9T	深鉢	胴部	後期安行	-	-	-	横位条線施文後、頸部に連続する刺突を施す。
第23図-106	9T	浅鉢か	胴部	安行3a	-	-	-	数条の弧状の沈線施文後、微細な縄文を施す。縄文内側に低位の貼付文を施す。
第23図-107	9T	注口土器?	胴部	安行3a	-	-	-	外面胴部突出部に微細な縄文を施す。一部に三叉文の端部と思われる沈線が認められる。同一個体他1片あり。
第23図-108	19T	深鉢	口縁部	安行3b	-	-	-	口縁部外面に横位「し」の字状の沈線を施文し、沈線区画内に単節RL縄文を施す。
第23図-109	14T	深鉢	口縁部	安行3b	-	-	-	単節RL縄文を施文した帯縄文上に円形の貼付文を施す。
第23図-110	18T	深鉢	口縁部	後期?	-	-	-	波状口縁か。2条の刺突文を施文後、刺突間に横位沈線を施す。
第23図-111	3T	壺	口縁～底部	弥生時代後期	(30.3)	23.1	7.9	口唇部に刻目文を施す。口縁～頸部には6段の輪積痕及び指圧痕が残る。外面胴部はミガキ調整、内面はヘラナデ調整を施す。
第23図-112	15T	壺	口縁部	古墳時代前期	(15.0)	-	-	折返し口縁部下端に刻みを施文し、頸部はハケム調整を施す。
第23図-113	16T	坏	胴～底部	奈良・平安時代	-	-	(10.3)	外面胴部下は手持ちヘラケズリ調整、内面はヨコナデ調整を施す。
第23図-114	4T	坏	口縁～胴部	奈良・平安時代	(15.9)	-	-	ロク口調整。

第7表 宮ノ越貝塚出土土製品観察表

():推定

挿図番号	出土位置	器種	時期	計測値(単位:cm)	重量(単位:g)	文様及び調整	備考
第24図-1	18T	土器片錘	連弧文?	長さ:5.4 幅:4.8 厚さ:1.3	41.64	燃糸文を地文とし、横位・斜位の沈線を施す。	挟り:対向する方向に1対
第24図-2	18T	土器片錘	加曾利E	長さ:6.1 幅:5.0 厚さ:1.1	42.58	単節RL縄文を地文とし、縦位の沈線を施文する。	挟り:対向する方向に1対
第24図-3	2T	土器片錘	不明	長さ:5.8 幅:4.0 厚さ:1.1	39.90	隆帯に連続刺突文を施す。	挟り:1箇所
第24図-4	21T	土器片錘	加曾利EIV	長さ:4.6 幅:3.8 厚さ:0.9	20.70	口縁部。単節RL縄文を地文とし、縦位の沈線を施す。	挟り:対向する方向に1対
第24図-5	21T	土器片錘	加曾利E	長さ:4.5 幅:4.1 厚さ:1.7	27.93	隆帯と沈線による枠状区画内に単節RL縄文が施される。	挟り:対向する方向に1対
第24図-6	21T	土器片錘	不明	長さ:3.4 幅:4.5 厚さ:1.2	21.91	櫛歯状工具による沈線を施す。	挟り:対向する方向に1対
第24図-7	18T	土器片錘	不明	長さ:3.4 幅:3.3 厚さ:1.2	13.88	櫛歯状工具による沈線を施す。	挟り:対向する方向に1対
第24図-8	6T-A⑭	土器片錘	加曾利E II	長さ:2.7 幅:2.5 厚さ:1.1	7.33	単節LR縄文を地文とし、縦位2条の沈線間を磨消す。	挟り:対向する方向に1対
第24図-9	3T	土製円盤	不明	径:(6.0) 厚さ:1.1	23.89	無文。	
第24図-10	18T	土製円盤	不明	径:(11.0) 厚さ:1.1	22.23	無文。	
第24図-11	3T	土製円盤	不明	長さ:3.0 幅:2.8 厚さ:1.2	11.12	無文。	
第24図-12	18T	土製円盤	不明	長さ:3.1 幅:2.8 厚さ:1.1	12.42	単節RL縄文を施す。	

第8表 宮ノ越貝塚出土石器観察表

():現存値

挿図番号	出土位置	器種	長さ(単位:cm)	幅(単位:cm)	厚さ(単位:cm)	重量(単位:g)	石材	備考
第25図-1	20T	打製石斧	6.4	4.8	2.1	62.74	砂岩	
第25図-2	22T	磨製石斧	(7.2)	(4.0)	(1.4)	62.96	透閃石岩	定角式
第25図-3	18T	軽石製品	(5.5)	(6.6)	(1.6)	9.41	軽石	穿孔上部に紐擦有
第25図-4	12T	磨石類	11.0	5.1	3.1	247.88	石英斑岩	上部に敲打痕、下部に敲打痕・研磨痕有
第25図-5	18T	磨石類	11.2	7.4	5.8	642.08	安山岩	上部・両側面に敲打痕・研磨痕有
第25図-6	14T	磨石類	(7.1)	6.8	4.3	246.72	砂岩	上面・下部に敲打痕、両側面に研磨痕有

## 4. 自然遺物の分析

### (1) 分析資料の概要 (第9・10表)

本項では本調査において現地採集・水洗選別で採集された貝類・脊椎動物遺体等について記載する。

動物遺体は発掘現場で目視確認され、点あげ若しくは一括として採取した「現地採集資料」と、貝層サンプルから水洗選別によって検出された「貝層サンプル資料」がある。

貝層サンプルは、4か所から採取した。2Tでは、SK001から①土器内堆積土、②土坑下貝層(破碎貝中心)、③土坑下貝層、④土坑下貝層(貝少量)の4カットを採取した。6Tでは、トレンチ北壁に40cm×40cmのサブトレンチを設定し、3層から厚さ3～8cmの規模でコラムサンプルを14カット(A①～⑭)、その他トレンチ内精査時等に採取した5カット(A⑮～⑰、B、C)の計19カットを採取した。また、6T-A⑭下より灰が検出されたため、貝層サンプルとは別に採取した。12Tでは、シカ頭骨下の貝層1カットを採集した。17Tでは、トレンチ西壁中央部に100cm×10cmのサブトレンチを設定し、5層から厚さ5～10cmの規模でコラムサンプルを3カット(①～③)を採取した。貝層サンプルの水洗選別には9.5mm、4mm、2mm、1mmメッシュの試験フルイを使用し、乾燥後に各メッシュの残留物の選別を行った。

分析作業及び原稿の執筆については、貝類は大河原が行い、西野雅人氏(千葉県埋蔵文化財センター)の協力を得た。ただし、水洗選別で検出された微小貝類遺体については黒住耐二氏(千葉県立中央博物館)に同定・分析を依頼し、脊椎動物遺体については、樋泉岳二氏(早稲田大学)に同定・分析を依頼した。なお、大量の動物遺体のほか、少数の植物遺体(炭化種子等)や人骨が検出されているが、未分析である。

第9表 宮ノ越貝塚貝層サンプル一覧

名称	カット	採取単位	採取法(厚さ)	採取量	分析量	保管量	推定時期	備考
<b>2T</b>		<b>SK001下貝層別</b>		<b>43.4</b>	<b>41.4</b>	<b>2.0</b>		
	①	土器内堆積土	一括	4.5	4.0	0.5	後期前葉	
	②	土坑下貝層(破碎貝中心)	一括	11.5	11.0	0.5	中期中葉	
	③	土坑下貝層	一括	14.8	14.3	0.5	中期中葉	
	④	土坑下貝層(貝少量)	一括	12.6	12.1	0.5	中期中葉	
<b>6T-A</b>		<b>貝層コラムほか&lt;40×40×厚さcm&gt;</b>		<b>115.8</b>	<b>98.8</b>	<b>17.0</b>		<b>※コラムは不等量</b>
	①～③	コラム2～4層	10cm	16.0	13.0	3.0	不明	耕作土の影響あり
	④	コラム4・5層	3cm	4.8	3.8	1.0	後期中葉	③～④シカ上腕骨等
	⑤	コラム5層	4cm	6.4	5.4	1.0	後期前葉～中葉	
	⑥	コラム5・6層	4cm	6.4	5.4	1.0	後期前葉～中葉	
	⑦	コラム6・7層	4cm	6.4	5.4	1.0	後期前葉	
	⑧	コラム6・7層	7cm	11.2	10.2	1.0	後期前葉	
	⑨	コラム7・8層	8cm	12.8	11.8	1.0	中期中葉～後期前葉	
	⑩	コラム7・8層	5cm	8.0	7.0	1.0	中期中葉～後期前葉	
	⑪	コラム8層	5cm	8.0	7.0	1.0	中期中葉～後期前葉	
	⑫	コラム8・9層	5cm	8.0	7.0	1.0	中期中葉～後期前葉	
	⑬	コラム8～10層	5cm	8.0	7.0	1.0	中期中葉～後期前葉	
	⑭	コラム10層	4cm	6.4	5.4	1.0	中期中葉～後期前葉	
	⑮	サブトレンチ最上層	一括	4.2	3.2	1.0	不明	コラム外
	⑯	サブトレンチ南部	一括	3.4	2.4	1.0	不明	コラム外
	⑰	サブトレンチ西壁	一括	5.9	4.9	1.0	不明	コラム外
6T-B	—	北部貝層密集範囲一括	一括	8.0	7.0	1.0	不明	
6T-C	—	コラムサンプル残土	一括	0.6	0.6		不明	
13T	—	シカ頭骨下貝層	一括	3.6	2.6	1.0	不明	
<b>17T</b>		<b>貝層コラム&lt;100×100×厚さcm&gt;</b>		<b>20.0</b>	<b>17.0</b>	<b>3.0</b>		<b>※コラムは不等量</b>
	①	コラム5層	10cm	10.0	9.0	1.0	不明	耕作土の影響あり
	②	コラム5・6層	5cm	5.0	4.0	1.0	後期前葉	
	③	コラム6層	5cm	5.0	4.0	1.0	中期中葉～後期前葉	

※保管量のうち、2T①③、6T-A④⑥⑧⑩⑫⑭、17T②③の10サンプルに関しては、微小貝類遺体のみ分析。分析量は2T①③が0.5g、他は1.0g。

第10表 宮ノ越貝塚貝層サンプル内容物計測表

重量:g

	水洗前	貝片	骨	土器 土粒	石	ガラス質 鉱物	炭	灰	備考
2T①	2,609.94	23.77	16.70	135.39	12.01	0.77	1.05	0.00	
2T②	7,742.51	253.99	32.38	517.24	36.53	4.27	2.97	0.00	黒曜石小片検出
2T③	10,024.26	312.68	30.80	355.62	15.19	2.55	2.30	0.00	黒曜石小片検出
2T④	8,275.89	19.17	22.61	269.76	11.36	2.19	1.72	0.00	黒曜石小片検出
6T-A①	5,923.42	955.91	12.27	18.55	2.51	0.12	0.28	0.00	
6T-A②	1,850.31	643.62	7.47	12.17	0.33	0.08	0.06	0.00	
6T-A③	5,750.09	2,185.91	75.98	145.71	7.59	0.32	1.04	0.00	
6T-A④	3,303.22	745.68	44.87	55.55	3.97	0.64	1.18	0.00	
6T-A⑤	3,368.20	481.06	20.71	27.72	2.34	0.43	0.97	0.00	
6T-A⑥	3,472.93	1,142.66	21.73	40.71	2.94	0.32	0.47	0.00	
6T-A⑦	3,209.28	1,252.38	22.16	26.08	2.36	0.43	0.61	0.00	黒曜石小片検出
6T-A⑧	4,932.72	1,259.13	22.11	104.10	3.48	1.21	1.50	0.00	黒曜石小片検出
6T-A⑨	5,454.02	869.85	46.19	74.09	9.52	1.29	1.55	0.00	黒曜石小片検出
6T-A⑩	2,868.10	360.52	26.02	35.74	4.51	0.54	1.10	0.00	黒曜石小片検出
6T-A⑪	2,960.30	893.00	5.11	17.94	1.05	0.26	0.53	0.00	
6T-A⑫	3,910.58	1,810.91	6.92	26.03	0.96	0.35	0.51	0.00	
6T-A⑬	2,524.37	1,049.90	4.35	24.67	0.74	0.18	0.62	0.05	
6T-A⑭	2,814.66	492.98	9.68	113.38	0.87	0.14	0.85	3.46	
6T-A⑮	3,509.94	350.37	13.68	48.95	11.89	1.50	0.56	0.00	黒曜石小片検出
6T-A⑯	2,789.77	718.42	10.69	43.35	4.21	0.14	0.44	0.00	
6T-A⑰	4,690.03	1,233.09	21.83	96.06	8.67	0.55	1.38	0.00	黒曜石小片検出
6T-B	6,400.31	116.31	19.95	108.41	32.15	2.64	1.54	0.00	
6T-C	396.69	94.04	5.00	20.98	0.20	0.02	0.05	1.07	
13T	2,559.66	279.78	19.47	37.97	5.50	0.38	0.97	0.00	
17T①	12,086.11	1,190.38	74.34	199.26	49.13	4.04	7.02	0.00	
17T②	5,630.55	1,199.02	27.14	128.50	8.44	0.92	6.91	0.86	
17T③	5,632.18	1,053.22	56.74	124.19	5.16	0.96	4.09	0.00	

第11表 宮ノ越貝塚検出貝類種名表

綱	亜綱	目	科	サンプル名	学名		
腹足綱	前鰓亜綱	原始腹足目	ニシキウスカヱ科	イボキサゴ	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i>		
			カニナ科	カワニナ	<i>Semisulcospira libertina</i>		
			ウミナ科	ホソウミニナ ウミニナ	<i>Batillaria cumingii</i> <i>Batillaria multiformis</i>		
		新腹足目	ヘナタリ属	Cerithideopsilla sp.			
			オニツカヱ科	カニモリガイ	<i>Proclava kochii</i>		
			タマカヱ科	ツメタガイ	<i>Glassaulax didyma</i>		
			アキカヱ科	アカニシ イボニシ	<i>Rapana venosa</i> <i>Thais (Reishia) clavigera</i>		
			ムシロカヱ科	アラムシロ	<i>Reticunassa festiva</i>		
			エゾバヱ科	バイ	<i>Balytonia japonica</i>		
			掘足綱	ツカヱ目	ツカヱ科	ツノガイ	<i>Antalis weinkauffi</i>
			二枚貝綱	フネカヱ目	フネカヱ科	サルボオ	<i>Scapharca subcrenata</i>
						タマキガイ	<i>Glycymeris vestita</i>
		マガキ				<i>Crassostrea gigas</i>	
		マルスタレカヱ目			イタボガキ	イタボガキ	<i>Ostrea denselamellosa</i>
						モシオガイ	<i>Nipponocrassatella japonica</i>
シオフキ	<i>Mactra quadrangularis</i>						
バカガイ	バカガイ				<i>Mactra chinensis</i>		
	ミルクイ				<i>Tresus keenae</i>		
	フジナミガイ				<i>Soletellina boeddinghausi</i>		
キヌタアゲマキカヱ科	キヌタアゲマキ				<i>Solecurtus divaricatus</i>		
	マテガイ				<i>Solen strictus</i>		
	ヤマトシジミ				<i>Corbicula japonica</i>		
マルスタレカヱ科	カガミガイ	<i>Phacosoma japonicum</i>					
	アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>					
	オキアサリ	<i>Gomphina (Nacridiscus) aequilatera</i>					
オノガイ	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>					
	オオノガイ	<i>Mya arenaria oonogai</i>					
	計	20科	29種以上				



(2) 貝類 (第 27・28 図、第 11～15 表、図版 14)

分析方法

本報告では貝層サンプル (27 カット) を水洗選別した資料を対象とし、貝類標本をもとに同定を行った。巻貝類は殻口部下端の付いた殻軸をもって 1 個体とし、二枚貝類は殻頂部を左右別に同定・集計した上で、多い方を最小個体数とした。同数の場合は、他の貝層サンプル資料において、左右の多い方を集計した。計測可能個体についてはすべてを計測した。計測にはノギスを用いた。計測後、イボキサゴ・アラムシロは 2 mm、他は 5 mm ごとの各階級に入る個体数を記録し、平均・標準偏差を算出した。一部の貝については時期別のヒストグラムを作成した。

貝類組成

本調査範囲からは 20 科 29 種以上を検出した。組成比率はイボキサゴが 89.0% と突出しており、主体種といえる。以下、シオフキ 3.8%、マテガイ 2.6%、ハマグリ 1.7%、ツメタガイ 1.2% と続いており、これらは頻出種といえる。イボキサゴは全採取サンプルから検出されており、頻出種は 2 T の貝層サンプル以外からはほとんど検出されている。頻出種の中では、多くのサンプルにおいてシオフキが最も多く検出されているが、6 T-A⑩、17 T②ではマテガイ、6 T-A⑨、17 T③ではハマグリが最多となっており、時折意図的に採取されていた可能性がある。また、6 T-A⑨～⑩と⑫～⑭はともに中期中葉～後期前葉としていますが、採取サンプル量は 6 T-A⑨～⑩の方が多いにもかかわらず、頻出種は 6 T-A⑫～⑭の方が多く検出されるなど、両サンプル間には明確な違いが見られる。

主体種・頻出種以外では、アラムシロ、アサリ、アカニシ、バカガイ、カガミガイ、オオノガイ、サルボオ、バイ、カワニナ、イボニシ等が多く検出されている。アラムシロはほとんどの貝層サンプルから検出されており、イボキサゴ漁で混獲されたものと推測する。バカガイは中期中葉～後期前葉の貝層サンプルから多く検出されるが、そのほとんどは 6 T-A⑫～⑭からであり、頻出種とともに 6 T-A⑨～⑩と⑫～⑭の違いを表す。

稀な種としては、モシオガイが 6 T-A⑧から検出された。富津岬以南に生息し、今回検出されたものは死骸で海岸に打ち上げられたものと推測される。汽水産のヤマトシジミは 4 点検出された。表採資料からも十数点検出されているが、本調査において時期がわかるものは中期中葉～後期前葉の貝層サンプルから検出

第 12 表 宮ノ越貝塚貝類組成表 (時期別)

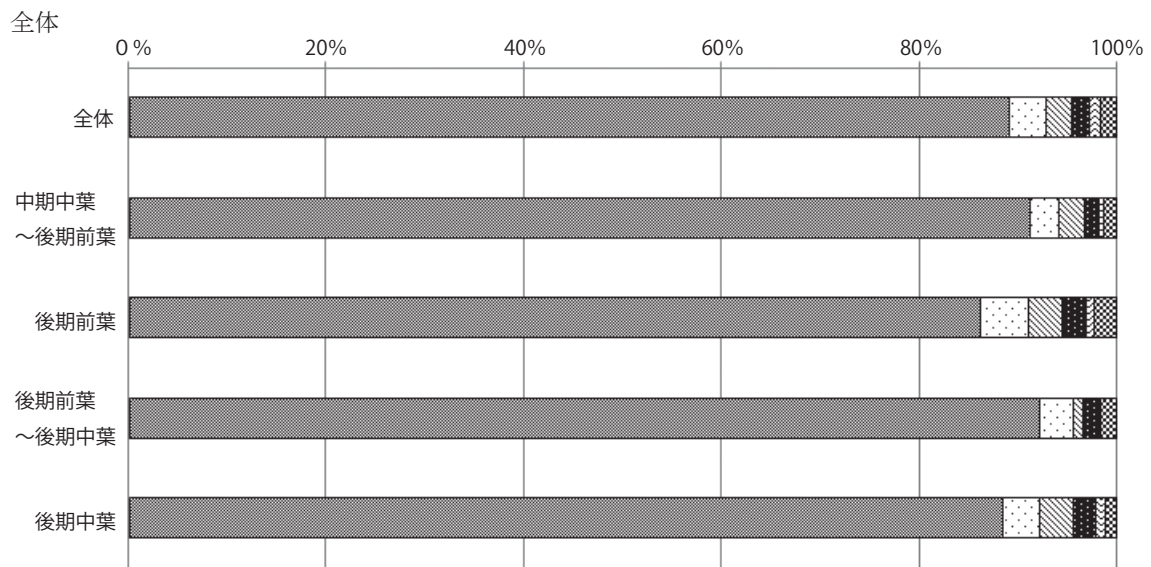
時期	中期中葉		中期中葉～後期前葉		後期前葉		後期前葉～中葉		後期中葉		不明		全体	
イボキサゴ	2651	99.8%	5978	91.2%	2578	86.2%	1831	92.1%	538	88.3%	3761	80.4%	17337	89.0%
シオフキ		0.0%	190	2.9%	141	4.7%	68	3.4%	23	3.8%	319	6.8%	741	3.8%
マテガイ		0.0%	167	2.5%	102	3.4%	20	1.0%	21	3.4%	188	4.0%	498	2.6%
ハマグリ	1	0.0%	94	1.4%	75	2.5%	31	1.6%	14	2.3%	124	2.7%	339	1.7%
ツメタガイ	3	0.1%	39	0.6%	24	0.8%	4	0.2%	6	1.0%	155	3.3%	231	1.2%
他	0	0.0%	88	1.3%	70	2.3%	34	1.7%	7	1.1%	128	2.7%	327	1.7%
合計	2655	100.0%	6556	100.0%	2990	100.0%	1988	100.0%	609	100.0%	4675	100.0%	19473	100.0%
<b>他の内訳</b>														
アラムシロ			28	0.4%	22	0.7%	19	1.0%	2	0.3%	25	0.5%	96	0.5%
アサリ			8	0.1%	13	0.4%	3	0.2%			15	0.3%	39	0.2%
アカニシ			1	0.0%	5	0.2%	1	0.1%	2	0.3%	25	0.5%	34	0.2%
バカガイ			28	0.4%	3	0.1%					3	0.1%	34	0.2%
カガミガイ			4	0.1%	4	0.1%	1	0.1%	1	0.2%	19	0.4%	29	0.1%
オオノガイ			3	0.0%	7	0.2%	2	0.1%	1	0.2%	9	0.2%	22	0.1%
サルボオ			2	0.0%	3	0.1%	1	0.1%	1	0.2%	10	0.2%	17	0.1%
バイ			2	0.0%	2	0.1%					10	0.2%	14	0.1%
カワニナ			3	0.0%	2	0.1%	4	0.2%			3	0.1%	12	0.1%
イボニシ			3	0.0%	3	0.1%	1	0.1%			4	0.1%	11	0.1%
ヤマトシジミ			2	0.0%							2	0.0%	4	0.0%
マガキ					1	0.0%	1	0.1%					2	0.0%
ホソウミナ			1	0.0%							1	0.0%	2	0.0%
ウミナ											1	0.0%	1	0.0%
イタボガキ					1	0.0%							1	0.0%
オキアサリ					1	0.0%							1	0.0%
カニモリガイ					1	0.0%							1	0.0%
キヌタアゲマキ			1	0.0%									1	0.0%
タマキガイ							1	0.1%					1	0.0%
ツノガイ			1	0.0%									1	0.0%
フジナミガイ											1	0.0%	1	0.0%
ヘナタリ類			1	0.0%									1	0.0%
ミルクイ					1	0.0%							1	0.0%
モシオガイ					1	0.0%							1	0.0%

第13表 宮ノ越貝塚貝類組成表（貝層サンプル別）

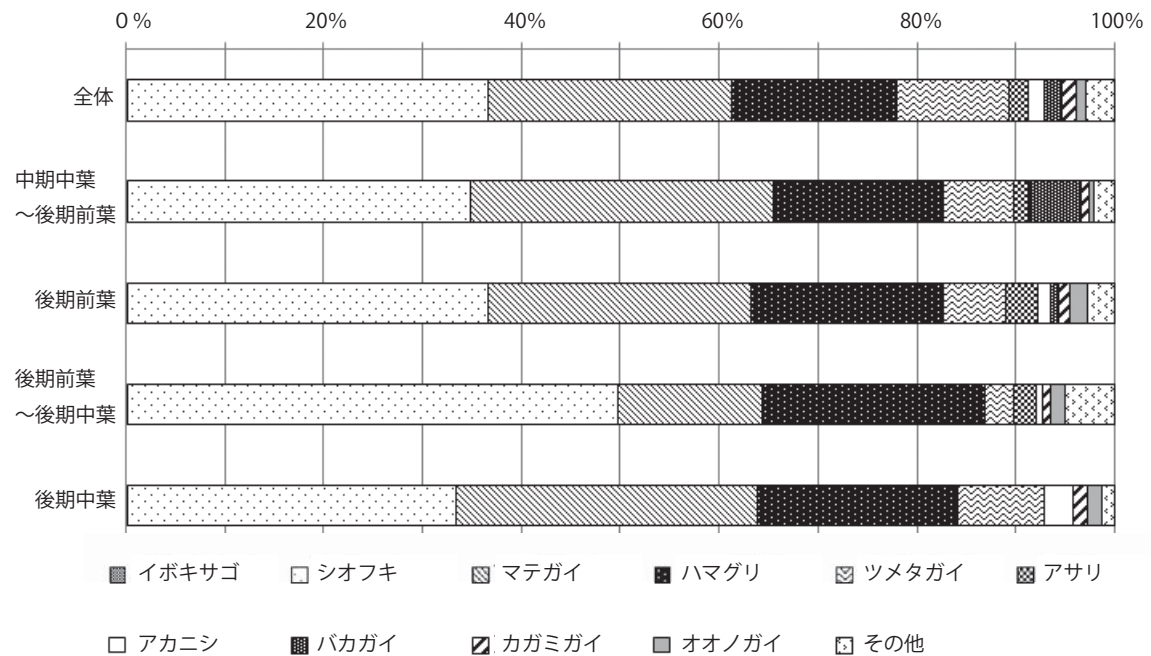
サンプル名	6T-A①~③	6T-A④	6T-A⑤	6T-A⑥	6T-A⑦	6T-A⑧	6T-A⑨	6T-A⑩	6T-A⑪	6T-A⑫	6T-A⑬	6T-A⑭	6T-A⑮	6T-A⑯	6T-A⑰
時期	不明	後期中葉	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉	後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	不明	不明	不明
イボキサゴ	989	538	825	1006	1035	787	1321	627	1290	1457	501	246	103	133	1525
シオフキ	210	23	20	48	60	51	11	1	3	66	66	24	2	34	34
マテガイ	115	21	11	9	23	25	8	1	8	63	42	22	2	9	23
ハマグリ	70	14	6	25	30	19	14	3	5	18	4	1	4	15	11
ツメタガイ	81	6		4	6	8	6	4	2	6	8	9	13	21	4
その他	51	7	9	25	26	20	13	4	7	22	15	10	1	14	25
合計	1516	609	871	1117	1180	910	1373	640	1315	1632	636	312	125	226	1622
<b>他の内訳</b>															
アラムシロ	10	2	6	13	11	6	4	3	4	10	1	1		2	11
アサリ	5		1	2	2	6	2		1	1		2		2	5
アカニシ	13	2		1		3							1	1	1
バカガイ					2					9	13	5		1	1
カガミガイ	4	1		1	1	1	1			1				3	2
オオノガイ	3	1		2	4	2	1			1				1	1
サルボオ	7	1		1	2	1	1		1						1
バイ	5										1			4	
カワニナ			2	2	2		1	1	1						2
イボニシ				1	1										1
ヤマトシジミ	2											1			
マガキ				1											
ホソウミナ							1								
ウミナ	1														
イタボガキ															
オキアサリ															
カニモリガイ													1		
キヌタアゲマキ															
タマキガイ				1											
ツノガイ							1								
フジナミガイ	1														
ヘナタリ属							1								
ミルクイ					1										
モシオガイ						1									

サンプル名	6T-B	6T-C	2T①	2T②	2T③	2T④	13T	17T①	17T②	17T③
時期	不明	不明	後期前葉	中期中葉	中期中葉	中期中葉	不明	不明	後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉
イボキサゴ	233	89	117	1226	1339	86	50	639	639	536
シオフキ		4					6	29	30	19
マテガイ		3					8	28	54	23
ハマグリ	1			1			2	21	26	49
ツメタガイ	7				3		3	26	10	4
その他	1	2					3	31	24	17
合計	242	98	117	1227	1342	86	72	774	783	648
<b>他の内訳</b>										
アラムシロ								2	5	5
アサリ							1	2	5	2
アカニシ								9	2	1
バカガイ								1	1	1
カガミガイ	1							9	2	2
オオノガイ		1					2	1	1	1
サルボオ								2		
バイ								1	2	1
カワニナ		1								
イボニシ								3	2	3
ヤマトシジミ										1
マガキ									1	
ホソウミナ								1		
ウミナ										
イタボガキ									1	
オキアサリ									1	
カニモリガイ									1	
キヌタアゲマキ										
タマキガイ										
ツノガイ										
フジナミガイ										
ヘナタリ属										
ミルクイ										
モシオガイ										



イボキサゴ・混獲種を除く



第 27 図 宮ノ越貝塚貝類組成（時期別）

された 2 点のみであり、傾向を捉えるにはサンプル数が少ない。

イボキサゴを主体種とする点は東京湾東岸域の貝塚に共通する点であるが、次いで採取量を占めるのがシオフキというのは本貝塚の特徴といえるだろう。また、検出数は少ないが、淡水域に生息するカワニナ、汽水域に生息するヤマトシジミ、湾奥の泥干潟に生息するマガキ、外湾に生息するモシオガイやカニモリガイなど、多様な生息域の種が含まれている。

#### 計測値分布

主体種・頻出種については、資料数に関係なく時期別にヒストグラムを作成した。ヒストグラムは、資料数が 100 点以上のものは%で表記し、100 点以下のものは点数で表記した。

イボキサゴは時期が新しくなるにつれて、平均値が小さくなる傾向が見られる。また、後期前葉以降のものは 12～14mm に集中するのに対して、中期中葉～後期前葉は 12～18mm の間でばらつきが見られる。

シオフキとハマグリは、後期中葉の資料は少ないが、時期が新しくなるにつれて、平均値が大きくなる傾向が見られる。また、シオフキは顕著に見えないが、ハマグリは時期が新しくなるにつれて標準偏差が小さく推移する。

ツメタガイは各時期を通じて平均値に大きな変化は見られないが、古い時期の方が標準偏差は大きい。

第 14 表 宮ノ越貝塚貝類計測表①

イボキサゴ殻高

サンプル名	6T-A ①~③	6T-A④	6T-A⑤	6T-A⑥	6T-A⑦	6T-A⑧	6T-A⑩	6T-A⑪	6T-A⑫	6T-A⑬	6T-A⑭	6T-A⑮	6T-A⑰	6T-C	13T	17T①	17T②	17T③				
時期	不明	後期中葉	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉	後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	不明	不明	不明	不明	不明	後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉		
殻高mm																						
-12	1			1	2	4	3	2	3	1	5	2						1		3	12	8
-14	7	7	16	24	31	25	14	10	32	100	101	29		43	7	2	5		5	21	10	
-15	2	1	7	16	13	20		8	43	136	79	25	1	57	6				6	10	2	
-16	3	1	4	2	3	13		19	100	139	50	17	1	77	5					5	9	
-18			1	1	3	9		16	82	135	36	20		49	6					5	6	
-20					1	1		1	3	3	1			2					1			
試料数	13	9	28	44	52	72	17	56	263	514	272	93	2	229	24	2	15	53	35			
平均	13.84	13.72	13.86	13.75	13.79	14.47	12.81	15.21	15.37	15.13	14.44	14.67	14.75	15.08	14.84	13.40	14.02	13.58	13.94			
標準偏差	1.15	0.88	0.98	0.86	1.20	1.51	0.76	1.58	1.26	1.24	1.31	1.26	0.78	1.34	1.39	0.14	2.35	1.69	1.93			
最大	15.90	15.40	16.00	16.15	17.45	18.50	13.85	18.35	18.90	18.70	18.38	17.50	15.30	18.88	17.15	13.50	20.50	17.55	17.10			
最小	11.72	12.38	12.22	11.95	11.78	11.20	11.42	11.45	11.08	11.90	11.28	11.78	14.20	11.88	12.62	13.30	10.50	10.50	10.65			

シオフキ殻長

サンプル別	6T-A ①~③	6T-A④	6T-A⑤	6T-A⑥	6T-A⑦	6T-A⑧	6T-A⑩	6T-A⑪	6T-A⑫	6T-A⑬	6T-A⑭	6T-A⑮	6T-A⑯	6T-A⑰	6T-C	13T	17T①	17T②	17T③	
時期	不明	後期中葉	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉	後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	不明	不明	不明	不明	不明	不明	後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉
殻長mm																				
-20	1												1							
-25	2													1						
-30	1				1	1				10	7			1					1	
-35	1	1		1		2			13	8	1									1
-40	2		1	2	4	2		1		2	1								1	2
-45	1		1	1	3		1			1									3	4
-50				2		1								2					3	3
-55				1		1													1	1
試料数	8	1	2	7	8	7	1	1	23	19	2	1	2	2	1	1	8	9	7	
平均	29.93	30.85	39.65	41.54	38.03	37.64	43.50	36.80	30.56	30.80	35.93	16.68	22.84	45.89	37.20	27.80	43.07	44.83	38.42	
標準偏差	8.71	-	0.64	6.94	4.38	7.44	-	-	2.28	4.83	3.85	-	3.88	0.09	-	-	4.93	4.28	9.64	
最大	42.45	30.85	40.10	51.30	42.05	50.40	43.50	36.80	34.55	40.30	38.65	16.68	25.58	45.95	37.20	27.80	48.60	52.08	54.20	
最小	19.12	30.85	39.20	31.78	28.20	29.15	43.50	36.80	26.62	22.60	33.20	16.68	20.10	45.82	37.20	27.80	36.00	38.40	28.00	

ハマグリ殻長

サンプル名	6T-A ①~③	6T-A④	6T-A⑤	6T-A⑥	6T-A⑦	6T-A⑧	6T-A⑩	6T-A⑪	6T-A⑫	6T-A⑬	6T-A⑭	6T-A⑮	6T-A⑰	13T	17T①	17T②	17T③
時期	不明	後期中葉	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉	後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	不明	不明	不明	不明	後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉
殻長mm																	
-20															1		1
-25																1	5
-30		1				2										1	5
-35	1					3									1	3	2
-40			2	3													5
-45		2	1	3						1							7
-50	1			2	1			1							2	1	3
-55					2	1		3								1	1
-60														1		1	
-65					1			1	1								
-70						1		1									
-75				1		1				1							
-80									1								
-85																	
-90	1																
-95																	
-100																	1
試料数	3	3	3	9	4	8	1	7	1	1	3	1	4	10	30		
平均	54.93	37.92	38.65	45.39	53.89	42.28	57.90	58.11	72.60	42.52	38.14	57.90	34.97	39.29	36.85		
標準偏差	27.14	7.81	4.15	11.57	6.13	18.44	-	10.16	-	1.20	-	-	10.93	12.36	14.47		
最大	85.50	44.00	43.35	73.30	62.05	70.52	57.90	75.65	72.60	42.52	39.10	57.90	43.22	56.00	97.50		
最小	33.70	29.12	35.50	36.45	48.08	25.80	57.90	49.52	72.60	42.52	36.80	57.90	19.70	21.20	19.88		

ツメタガイ殻高

サンプル名	2T③	6T-A ①~③	6T-A④	6T-A⑤	6T-A⑥	6T-A⑦	6T-A⑧	6T-A⑩	6T-A⑪	6T-A⑫	6T-A⑬	6T-A⑭	6T-A⑮	6T-A⑯	6T-A⑰	13T	17T①	17T②	17T③
時期	中期中葉	不明	後期中葉	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉	後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	不明	不明	不明	不明	不明	後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉
殻高mm																			
-10										1									
-15			1											1					
-20			2											1					
-25			5	1										5				2	1
-30	1	13	1	5		1	2						1	1	5			1	1
-35		16		1		5	2						2	1	1			2	1
-40	1	13	2	1			2	1	1	1	2		1	1				1	1
-45		2	1	3			1		1				2	1	2			1	2
-50		5					2												
-55					1									1					
試料数	2	57	5	10	2	6	9	1	2	3	6	6	5	13	3	2	10	6	3
平均	33.33	32.06	33.60	33.70	49.30	30.95	35.97	35.48	24.15	34.80	33.69	36.36	25.87	26.94	33.75	37.69	27.02	32.00	41.18
標準偏差	7.39	7.56	7.86	7.15	1.02	2.08	7.45		21.14	9.38	11.15	11.43	12.97	7.41	7.54	4.51	6.23	11.13	8.38
最大	38.55	48.60	41.95	44.50	50.02	32.48	48.10	35.48	39.10	42.90	46.35	53.62	43.95	41.40	39.20	40.88	36.88	44.68	50.60
最小	28.10	13.75	24.12	27.10	48.58	26.98	27.42	35.48	9.20	24.52	13.22	24.00	10.65	13.80	25.15	34.50	17.00	18.50	34.55

第15表 宮ノ越貝塚貝類計測表②

アラムシロ殻高

サンプル名	6T-A③	6T-A④	6T-A⑤	6T-A⑥	6T-A⑦	6T-A⑧	6T-A⑨	6T-A⑩	6T-A⑪	6T-A⑫	6T-A⑬	6T-A⑭	17T①	17T②	17T③
時期	不明	後期中葉	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉	後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	不明	不明	後期前葉 ~ 後期中葉
殻高mm															
-10				1	1										1
-12												1			1
-14	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1		4			1
-15		1	1	2	2	1	1	1	2	3		2	1	1	
-16			1	2	1	2	1	1	1	1					1
-18															
試料数	4	2	3	6	5	4	2	2	3	5	1	10	1	1	4
平均	13.09	14.21	14.11	13.70	13.14	14.90	14.64	14.76	14.16	14.76	11.80	13.05	14.55	14.4	11.71
標準偏差	0.77	0.58	1.49	2.49	2.90	0.91	1.25	0.51	0.79	0.88	-	1.97	-	-	2.58
最大	13.80	14.62	15.45	15.55	15.10	15.75	15.52	15.12	14.80	16.12	11.80	16.05	14.55	14.40	15.02
最小	12.20	13.80	12.50	8.80	8.20	13.75	13.75	14.40	13.28	14.00	11.80	9.78	14.55	14.40	9.20

バカガイ殻長

サンプル名	6T-A⑫	6T-A⑬
時期	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉
殻長mm		
-50		1
-55		
-60	2	
-65		2
-70		
-75		1
試料数	2	4
平均	57.70	60.88
標準偏差	0.71	10.11
最大	58.20	70.15
最小	57.20	46.55

サルボオ殻長

サンプル名	6T-A①~③	6T-A④	6T-A⑥	6T-A⑦	6T-A⑧	6T-A⑪	6T-A⑰	17T①
時期	不明	後期中葉	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉	後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉	不明	不明
殻長mm								
-10						1		
-15								
-20								
-25								
-30								
-35		1		1				
-40								1
-45								
-50					1			2
-55	2							
-60	1				2			
-65								
-70	1							
-75			1					
試料数	5	1	1	1	1	2	1	3
平均	51.33	72.90	30.12	47.58	58.33	8.35	48.48	42.79
標準偏差	19.09	-	-	-	0.96	-	-	6.61
最大	66.95	72.90	30.12	47.58	59.00	8.35	48.48	47.32
最小	30.05	72.90	30.12	47.58	57.65	8.35	48.48	35.20

アカニシ殻高

サンプル名	6T-A②③	6T-A⑤	6T-A⑥	6T-A⑧	6T-A⑫	6T-A⑮	6T-A⑱	17T①	17T②	17T③
時期	不明	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉	不明	不明	不明	不明	後期前葉 ~ 後期中葉	中期中葉 ~ 後期前葉
殻高mm										
-40	1									
-45	2									1
-50	1	1			1					
-55		1							1	1
-60	1			1						
-65					1					
-70	1	1								
-75										
-80							1		1	
試料数	6	3	1	3	1	1	1	2	1	1
平均	49.34	55.74	56.20	61.27	45.92	55.10	63.71	49.42	42.60	42.60
標準偏差	11.93	12.19	-	17.22	-	20.35	-	-	-	-
最大	67.00	69.68	56.20	78.00	45.92	55.10	78.10	49.42	42.60	42.60
最小	35.20	47.05	56.20	43.60	45.92	55.10	49.32	49.42	42.60	42.60

イボニシ殻高

サンプル名	6T-A⑤	6T-A⑥	6T-A⑦	17T③
時期	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉
殻高mm				
-30	1	1		2
-35				1
-40				1
試料数	1	1	1	3
平均	28.70	26.95	39.22	28.24
標準偏差	-	-	-	2.79
最大	28.70	26.95	39.22	30.50
最小	28.70	26.95	39.22	25.12

バイ殻高

サンプル別	6T-A③	6T-A⑬	6T-A⑱	17T①	17T③
時期	不明	中期中葉 ~ 後期前葉	不明	不明	中期中葉 ~ 後期前葉
殻高mm					
-55					1
-60	1				
-65	3	1	4		
-70					1
試料数	4	1	4	1	1
平均	61.37	61.50	62.10	54.22	68.00
標準偏差	1.84	-	1.17	-	-
最大	63.70	61.50	63.82	54.22	68.00
最小	59.40	61.50	61.35	54.22	68.00

アサリ殻長

サンプル別	6T-A⑥	6T-A⑧	6T-A⑰	17T①	17T②	17T③
時期	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉	不明	不明	後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉
殻長mm						
-25						1
-30						
-35		1				1
-40						
-45		1	1		1	1
-50	1					
試料数	1	3	1	1	2	1
平均	46.00	34.00	43.10	35.88	27.00	43.90
標準偏差	-	6.53	-	-	7.92	-
最大	46.00	40.08	43.10	35.88	32.60	43.90
最小	46.00	27.10	43.10	35.88	21.40	43.90

ヤマトシジミ殻長

サンプル別	6T-A③	6T-A⑱	17T③
時期	不明	中期中葉 ~ 後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉
殻長mm			
-25			1
-30			
-35		1	
-40			
-45	1		
試料数	1	1	1
平均	40.30	30.88	23.80
標準偏差	-	-	-
最大	40.30	30.88	23.80
最小	40.30	30.88	23.80

カワニナ殻高

サンプル別	6T-A⑤	6T-A⑥	6T-A⑦
時期	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉
殻高mm			
-20		1	
-25	1		
-30			
-35			1
試料数	1	1	1
平均	20.85	17.00	33.22
標準偏差	-	-	-
最大	20.85	17.00	33.22
最小	20.85	17.00	33.22

カガミガイ殻長

サンプル別	6T-A⑤	6T-A⑦	6T-A⑱
時期	後期前葉 ~ 後期中葉	後期前葉	中期中葉 ~ 後期前葉
殻長mm			
-55			1
-60	1		
-65		1	
試料数	1	1	1
平均	58.18	61.68	54.02
標準偏差	-	-	-
最大	58.18	61.68	54.02
最小	58.18	61.68	54.02

イタボガキ殻長

サンプル別	17T②
時期	後期前葉
殻長mm	
-85	1
試料数	1
平均	83.78
標準偏差	-
最大	83.78
最小	83.78

ウミナシ殻高

サンプル別	6T-A③
時期	不明
殻高mm	
-15	1
試料数	1
平均	12.30
標準偏差	-
最大	12.30
最小	12.30

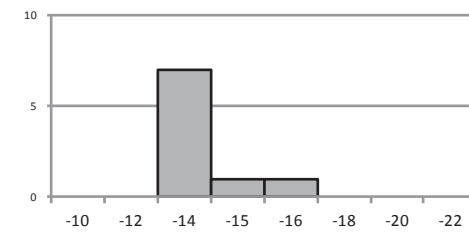
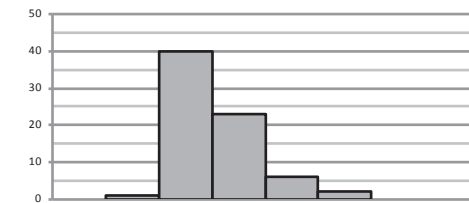
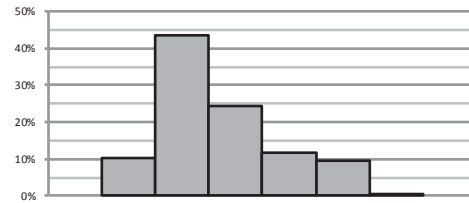
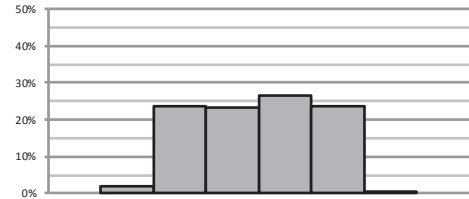
オキアサリ殻長

サンプル別	17T②
時期	後期前葉
殻長mm	
-45	1
試料数	1
平均	42.15
標準偏差	-
最大	42.15
最小	42.15

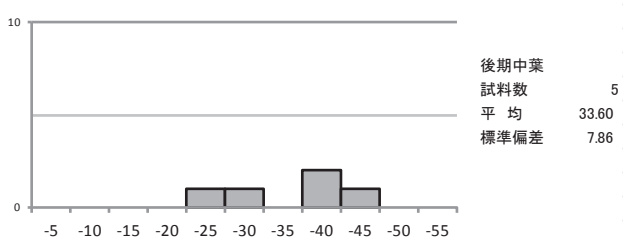
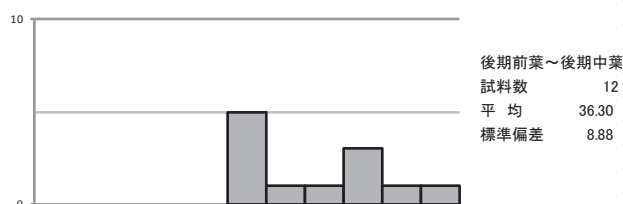
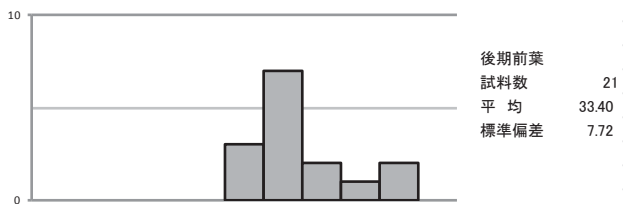
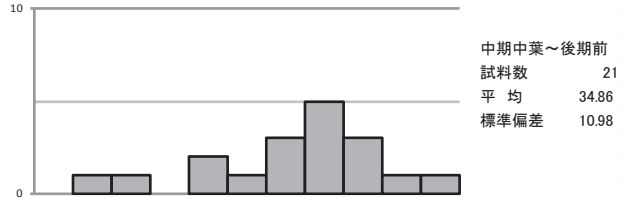
モシオガイ殻長

サンプル別	6T-A⑧
時期	後期前葉
殻長mm	
-30	1
試料数	1
平均	28.42
標準偏差	-
最大	28.42
最小	28.42

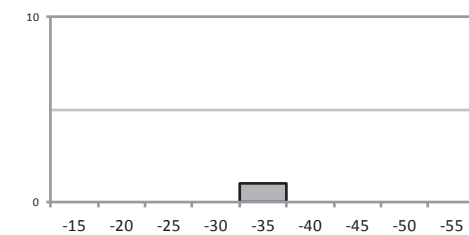
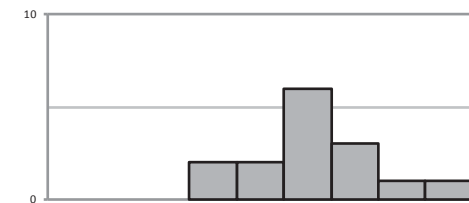
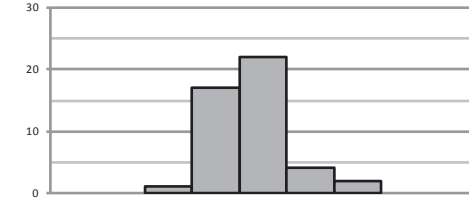
イボキサゴ



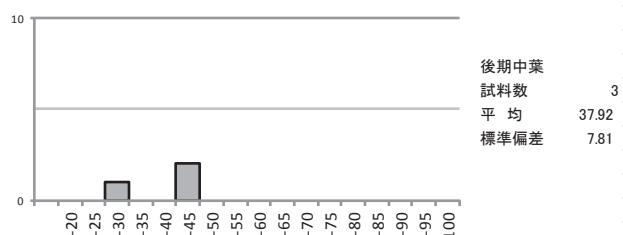
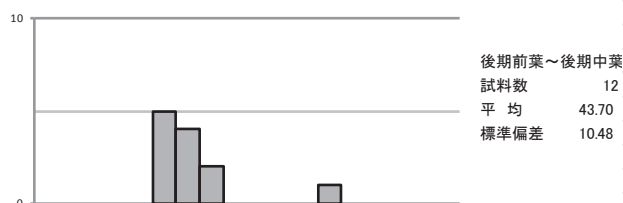
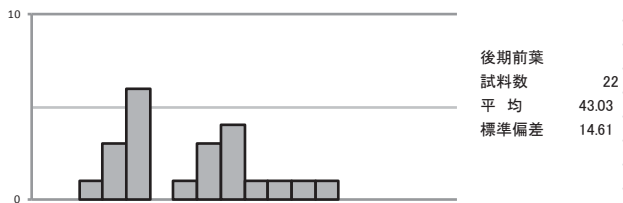
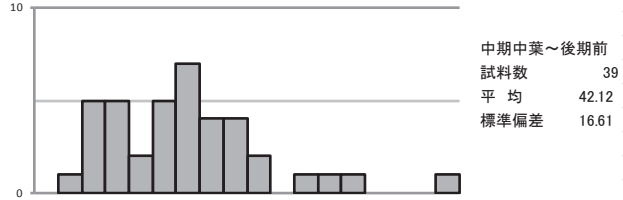
ツメタガイ



シオフキ



ハマグリ



第 28 図 宮ノ越貝塚貝類計測値ヒストグラム

### (3) 微小貝類遺体 (第 29 図、第 16・17 表)

宮ノ越貝塚は、千葉県袖ヶ浦市の台地上に立地する縄文時代中期～後期の貝塚遺跡であり、東京湾東岸の大形貝塚として残存するものとしてはほぼ最南端の国指定史跡・山野貝塚と谷を挟んで対岸に位置している。本遺跡の貝類遺体は、山野貝塚との比較で興味深いものと考えられ、今回、貝塚堆積物中の微小貝類遺体を検討させて頂く機会を得たので、その結果をここに報告したい。

#### 検討サンプルと方法

本調査区の北側に貝層が確認されており、本報告書第 6 章 4 (1) に採取位置や貝層サンプルの詳細が示されており、この中から地点や層位・遺構等を加味して、8 サンプルを選び、筆者のこれまで行ってきた処理方法 (黒住, 1997: 乾燥後、9.5/4/2/1mm のメッシュを用いた水洗選別を行い、浮遊部分 (LF) を 0.5mm 未満のネットで回収する) で処理し、浮遊部分と沈殿部分の 2・1mm メッシュに残ったものを分析対象とした。また、同様の処理は袖ヶ浦市教育委員会でも行われており、その抽出済み資料の一部も検討の対象とした。ただ、6 T-A /10 層は焼土として別にサンプリングされており、藻塩焼きを示すウズマキゴカイ類が含まれている可能性も想定されたので、そのうちの 125cc を処理した。75cc を水洗で、50cc を乾燥状態で、0.5mm メッシュまでを対象とした。処理量は、6 T-A /10 層は上記の通り 125cc で、2T の①・③は 500cc、それ以外は 10 である。

沈殿部分 (HF) のものも含め、貝類では殻頂部等の同定可能な部位を、その他のものは破片を含めて抽出した。ただ、食用貝類の殻頂部以外の破片は対象としなかった。抽出したものは、種の同定・出土部位・成長段階 (大形幼貝は成貝の 1/2、中形幼貝は 1/2-1/4、小形幼貝は 1/4 未満)・焼けの有無等を確認した。なお、4.0mm メッシュより大きな食用貝類遺体等は、別途報告されている (本報告書第 6 章 4 (2))。

#### 結果及び考察

今回の調査で得られた貝類遺体は、陸産貝類は 9 科 18 種、淡水産貝類 2 科 2 種、海産貝類等 6 科 6 種であった (第 16 表)。得られた貝類の多くは陸産種であり、浮遊部分から得られ、海産種は沈殿部分で確認された。その詳細を、第 17 表に示した。この表の処理欄で、K は筆者によるもので、S は袖ヶ浦市によるものである。

##### 1. 陸産貝類から見た植生景観復元

今回は 2 箇所で行ったが、筆者 (K) と袖ヶ浦市 (S) の間で大きな相違は見られないと判断できたので (第 17 表)、最少個体数 (MNI) の算出は、両者の浮遊・沈殿部分の全てをあわせて行った。ただ、移入種で、色彩の残っていたノハラノイシノシタ 1 個体のみは対象から除いた。

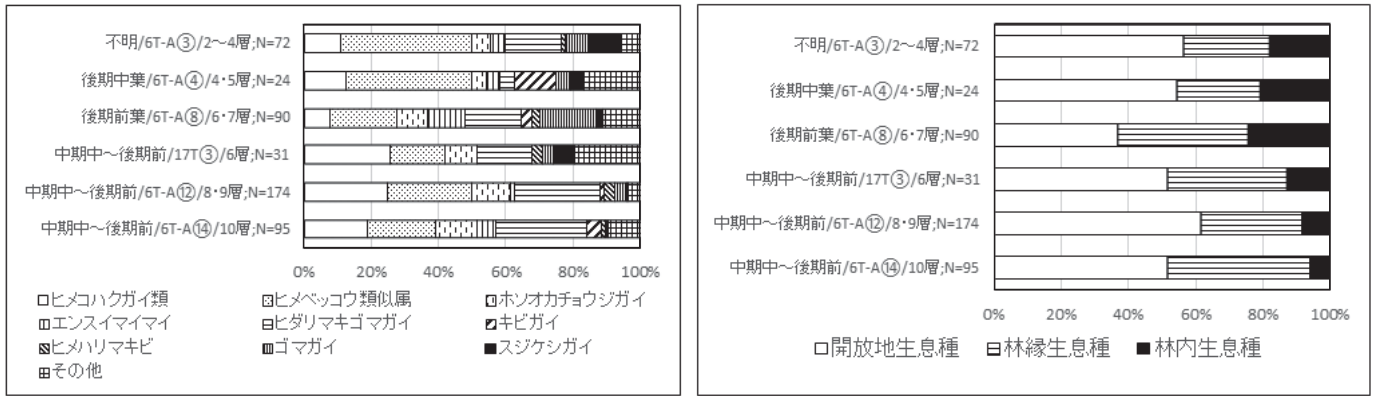
第 16 表 宮ノ越貝塚の貝層サンプルから得られた微小貝類遺体の分類学的位置と生息場所

軟体動物門 Mollusca		軟体動物門 Mollusca	
腹足綱 Gastropoda - 陸産		腹足綱 Gastropoda - 淡水産	
ゴマガイ科 Diplommatinidae		カワニナ科 Semisulcospiridae	
ヒダリマキゴマガイ <i>Diplommatina pusilla</i>	陸域/林縁	カワニナ? <i>Semisulcospira libertina?</i>	流水・止水
ゴマガイ <i>Diplommatina (Sinica) cassa</i>	陸域/林内	腹足綱 Gastropoda - 海産	
オカミガイ科 Ellobiidae		ニシキウズ科 Trochidae	
ニホンケシガイ <i>Carychium nipponense</i>	陸域/林縁	イボキサゴ <i>Umbonium moniliferum</i>	内湾/砂泥底/潮間帯
スジケシガイ <i>Carychium noduliferum</i>	陸域/林内	オリイレヨフバイ科 Nassariidea	
キセルガイ科 Clausiliidae		アラムシロ <i>Reticunassa festiva</i>	内湾/砂泥底/潮間帯
ヒカリゲセル <i>Zapytychopsis buschi</i>	陸域/林縁	二枚貝綱 Bivalvia - 淡水産	
オカクチケレガイ科 Subulinidae		マテガイ科 Solenidae	
オカチョウジガイ <i>Allopeas kyotoense</i>	陸域/林縁	マテガイ <i>Solen strictus</i>	内湾/砂泥底/潮間帯
ホソオカチョウジガイ <i>Allopeas pyrgula</i>	陸域/開放地	バカガイ科 Mactridae	
ナタネガイ科 Punctidae		シオフキ <i>Mactra quadrangularis</i>	内湾/砂泥底/潮間帯
ハリマナタネ <i>Punctum japonicum</i>	陸域/林縁	マルスダレガイ科 Veneridae	
ミジンナタネ <i>Punctum atomus</i>	陸域/林縁	ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>	内湾/砂泥底/潮間帯
イシノシタ科 Helicodiscidae		二枚貝綱 Bivalvia - 淡水産	
ノハラノイシノシタ* <i>Helicodiscus singleyanus inermis</i>		イシガイ科 Family Unionidae	
ベッコウマイマイ科 Helicarionidae		厚質イシガイ類 solid unionidae gen. et sp.	緩やかな流水
ヒメハリマキ <i>Parakaliella pagoduloides</i>	陸域/林内	マツカサガイ <i>Pronodularia japonensis</i>	
キビガイ <i>Gastrodontella stenogyra</i>	陸域/林内	ヨコハマシジラ <i>Inversium jokohamensis</i>	
ヒメベッコウ <i>Discoconulus sinapidium</i>	陸域/林縁	イシガイ <i>Nodularia douglasiae nipponensis</i>	
ヒメベッコウ類似属 <i>Discoconulus?</i> sp.	陸域/開放地	節足動物門 Arthropoda	
ウラジロベッコウ <i>Urazirochlamys doenitzii</i>	陸域/林縁	フジツボ科? Balanidae?	
エゾエンザ科 Pristilomatidae		フジツボ類 Balanidae?	海域/マガキ等に付着
ヒメコハクガイ類似種 <i>Hawaiiia</i> sp. cf. <i>minuscula</i>	陸域/開放地		
オナジマイマイ科 Bradybaenidae			
エンスイマイマイ <i>Aegista langfordi</i>	陸域/林縁		
ミスジマイマイ? <i>Euhadra peliomphala?</i>	陸域/林縁		

\*: 現生の移入種







第 29 図 宮ノ越貝塚の陸産貝類組成 左：種組成 右：生息場所類型組成

抽出された種の組成では（第 29 図左）、開けた環境（開放地生息種）で見られるヒメコハクガイ類とヒメベッコウ類似属、林の縁に生息する（林縁生息種）ヒダリマキゴマガイが多く、特にヒダリマキゴマガイと開放地生息種のヒメオカチョウジガイは下部で多かった。後期前葉のサンプルでは、林縁生息種のヒメスライマイマイとヒメゴマガイの割合が高く、上部では森林内にすむ（林内生息種）ヒメキビガイとヒメスジケシガイも目立っていた。

これらの陸産貝類を、その生息場所として示したものが第 29 図右である。開放地生息種がほとんどのサンプルで半数以上を占め、林縁生息種も 20-40%程度で、上部では林内生息種が約 20%であった。

この開放地生息種の陸産貝類が多い組成から貝塚周辺は基本的に開けていたものの、林縁生息種や林内生息種の存在により、周囲には林床に下草がある程度存在したような林のあったことも推測された。そして、時代が下るに従い林内生息種が増加していることから、人間の林に対する関与が減少したと考えられた。

この縄文時代後期における開けた環境から二次林の回復という現象は、山野貝塚では後期前葉から後期中葉にかけて生じていた（黒住 2016a）。これまで筆者は東京湾東岸の縄文後晩期における林内生息種の増加という状況を、「人間活動の減少」と捉えていた（黒住 2007、2016a）。ほぼ同時期の加曽利貝塚の微小陸産貝類の分析でも、縄文時代中期中葉の加曽利 E 式期から後期前葉の堀之内式期には開けており、加曽利 B 式期と想定された後期の貝層サンプルでは林内生息種の増加が確認できたものの、「加曽利貝塚における人間活動のピークは加曽利 B 式期」という指摘と、この時期から獣骨が増加することにより、「哺乳類狩猟を目的にした森林管理方策の変換」と考えるようになった（黒住 2017a）。今回の宮ノ越貝塚の結果は、後期中葉に大きく森林環境が変化したとは考えられなかった。後期前葉から森林管理が少し変化した可能性は、林内生息種の増加から読み取ることが可能かもしれないが、山野貝塚や加曽利貝塚のように、明瞭なものではなかった。

このことは、処理サンプルの量や採取地点に起因すると考えることも可能かもしれないが、筆者は後述するツノガイ類を指標とした装飾系の貝製品の遺跡間の相違と共に、遺跡自体の性格の違いと理解したい。山野貝塚や加曽利貝塚では二次林を回復させる行為が顕著であったが、宮ノ越貝塚では回復させる意図が低かった可能性も考えられる。

## 2. 土器埋設土坑

今回の 2 トレンチの 2 つの貝層サンプルは、土器埋設土坑の①は土器内から、③は土器下貝層から得られたものであった。処理量が両方とも 500cc と少なかったものの、現生混入を除きどちらからも陸産貝類は抽出できなかった。このことは、「比較的短期間に、土坑が掘られ、土器が埋められたために、陸産貝類が入り込めずに抽出されなかった」というようにも理解できると思われる。

## 3. 淡水産貝類

千葉県東京湾岸の縄文貝塚では、淡水産貝類が目立つことはほとんどなく、本遺跡でも同様で、山野貝塚でも全体でカワナナ 4 個体、イシガイ科 1 個体のみ確認されているだけであり（田中 2016）、本遺跡でも明確ではなかった。およそ同時期の君津市三直貝塚では、マツカサガイ類 *Inversidens* sp. として厚質イシガイ類が記録されているものの、その報告書の第 42 表のコラムサンプルから抽出された種には掲載されておらず（吉野 2006）、その出土数は極めて少ないようである。この貝塚の不明貝類は筆者が同定したが、その時の記憶では、マツカサガイ類複数個体の後部に細かな剥離のような痕跡が存在していた。宮ノ越貝塚か

らは、第 17 表の破片以外には厚質イシガイ類は未確認なので（本報告書第 6 章 4（2））、やはり出土数は極めて稀であることもわかる。筆者は縄文時代には厚質イシガイ類の特殊な利用が存在したと考えており（例えば、黒住 2013, 2016b）、東京湾沿岸でも市原市・西広貝塚の貝製品を詳細に検討した忍澤（2011）も厚質イシガイ類の 400 点以上の出土から、単に食用ではなく、何か特別な利用があったのではないかと想定している（p. 394-395）。ただ、僅かながら出土していることには意義があるものと思われる。

#### 4. 海産微小貝類

海産微小貝類からは、海藻利用や製塩関連の事象を検討できる場合があり、本遺跡でも注意を払って抽出を試みた。特に「藻灰」を用いた藻塩焼きの指標となるウズマキゴカイ類は、炉の堆積物に多いことが知られており（阿部 2016）、6 T-A /10 層の焼土 125cc を詳細に検討したが、ウズマキゴカイ類を含め、筆者の想定している“アシ灰”（黒住 1994, 2014）を示すカワザンショウガイ類・カワグチツボ等も確認できなかった。ただ、フジツボ類片とイボキサゴでは、サンプル数が少ないものの主に下部で焼けたものが少数認められた。

#### 5. 作業場としての貝塚

貝類ではないが、今回のサンプル中には、黒曜石？の石材小片が 2 つのサンプルの 2・1 mm メッシュから少数抽出された。この石材小片は袖ヶ浦市処理分でも確認されている（本報告書第 6 章 4（1）第 10 表）。筆者のこれまでに処理してきた貝塚を含めた遺跡の堆積物で、このような石材小片を確認したのは初めてであった。単純なことではあるが、この石材小片が貝塚から得られたことは、貝塚の上で作業を行っていたことを示していよう。もちろん、石器の調整を貝塚以外の住居内外で行った後に清掃ゴミとして廃棄したことも想定できるが、鋭利な微細石材小片によるケガ等を考えると、貝塚を作業空間と考える方が合理的であろう。貝塚が再生を願う場であったかどうかは別問題として、筆者は焼けた貝殻片が貝塚から抽出されることは、炉の周辺を清掃した折のゴミを貝塚に廃棄したと考えており（黒住 2006）、作業空間としての貝塚をイメージしたことはなかった。

#### 6. 非食用貝類から探る遺跡間の相違

今回の処理サンプル中からは 6 T-A⑧よりへら状貝製品（本報告書第 6 章 3（3））が抽出されたものの、ツノガイ類等の小形の貝製品は得られなかった。小形の貝製品は、袖ヶ浦市処理分のサンプルからもツノガイ類が 1 点と極めて少ないようである（本報告書第 6 章 4（2））。一方、山野貝塚では、10 T の極めて僅かな（幅 50cm）再発掘と採取・処理した堆積物サンプルから、小形貝製品として、イモガイ螺塔部 1 点、ツノガイ類 2 点が確認され、これらの遺物はこれまで山野貝塚では確認されていなかった（田中 2016）。このように調査精度の問題は大きいですが、今回の宮ノ越貝塚では貝塚堆積物が大量に水洗処理され、注意深く抽出作業が行われたにもかかわらず、小形貝製品が得られなかったことは、元から包含数が稀であったと考えられよう。谷を隔てただけで、およそ同時期の宮ノ越貝塚と山野貝塚での小形貝製品の出土量の違いは、前述した二次林の回復意図が異なっていたと考えたこととも関連し、“遺跡の性格”を示す指標になる可能性も想定される。

例えば筆者が貝塚堆積物を処理した例として、ツノガイ類は、加曽利貝塚（黒住 2017a）や九十九里浜に面した養安寺遺跡（黒住 2017b）では確認できず、両遺跡では様々な方法の水洗選別を行っていたにもかかわらず、ツノガイ類の出土／抽出数は、ごく僅かであった（西野・米倉 2017；小林・服部 2017）。膨大な量の水洗選別と抽出が行われ、詳細に報告された市原市の西広貝塚では、約 1000 点のツノガイ類が得られている（忍澤 2007）。また、余り注意が払われてこなかったようであるが、君津市の三直貝塚からは、ピックアップ法で 161 点、水洗選別で 29 点、合計 190 点ものツノガイ類が報告されている（吉野 2006）。そして、この堆積物サンプルから抽出されたものの対象メッシュサイズは明記されていないが他の食用貝類から 4 mm メッシュ残滓からの抽出である可能性が高い。山野貝塚の 2 点のうち、1 点は 1 mm メッシュで回収されており（黒住 2016）、三直貝塚のツノガイ類包含数はさらに数倍になることも十分に想定できる。出土数を比較するための問題点は後述するが、近接した遺跡間でも、このようにツノガイ類の包含数に大きな相違のあることは理解できよう。そして、前述した製塩に関する「藻灰」や“アシ灰”に関する焼けた海産微小貝類の確認も、加曽利貝塚と養安寺遺跡ではほとんど認められなかった（黒住 2017a, b）。

遺跡の性格付けには、検出住居址数や出土遺物数等という指標により、拠点集落・小規模集落およその関係性等が明らかにされてきている（例えば西野 2009）。この点に、上述してきた“ある種、人の生存に直結しない”小形装飾品の貝類や様々な微小貝類で確認される植物利用等の内容を付加させることにより、当時の生活の在り方をより具体的に推測／復元できるものと考えられる。

ただ、小形装飾品の貝類や微小貝の出土数は、当然抽出方法・その精度、サンプリング位置・サンプルの内容・発掘面積等々により大きく変わる。現時点では直接的な出土数と比較されているが、今後は“推定される遺跡内の包含数”を念頭に置いて発掘・処理を行うことが望まれる。黒住（2013, p. 357、2016）等でも示したが、具体的にはピックアップ法の精度（取り上げ物の大きさ等）・堆積物サンプルの採取位置と量の明記・選別方法とその抽出効率や対象メッシュサイズ等の記載が不可欠である。これらの情報から、推定ではあるが、包含数を単純な比例計算で求めることができ、絶対数ではないものの、ある程度確度の高い数値を求めることができる。山野貝塚と宮ノ越貝塚の例は、その好例になるものと考えられる。

謝辞：検討の機会を与えて頂き、サンプルの採取やその他の情報の確認等では袖ヶ浦市教育委員会の大河原務・田中大介の両氏に大変お世話になった。記して感謝したい。本報告には科学研究費補助金（16H0310、代表者：樋泉岳二）を用いた。

## 引用文献

- 阿部芳郎．2016．「藻塩焼く」の考古学—縄文時代における土器製塩技術の実験考古学的検討—．考古学研究，63(1)：22-41．
- 忍澤成視．2007．骨角貝製品．市原市西広貝塚Ⅲ，市原市埋蔵文化財センター調査報告書，(2)：863-1071，pls. 126-178．
- 忍澤成視．2011．貝の考古学．ものが語る歴史22．430 pp．同成社
- 黒住耐二．1994．柱状サンプルから得られた微小貝類遺存体．上高津貝塚A地点，慶應義塾大学文学部民族学・考古学研究室小報，(9)：291-317，3 pls．
- 黒住耐二．1997．1996年の用見崎遺跡調査でコラムサンプルから得られた貝類遺存体．用見崎遺跡Ⅲ，考古学研究室報告，(32)：35-41．熊本大学考古学研究室．
- 黒住耐二．2006．貝類遺体からみた遺跡の立地環境と生活．In 木下尚子（編），先史琉球の生業と交易Ⅱ—奄美・沖縄の発掘調査から—，pp. 115-134，285．熊本大学．
- 黒住耐二．2007．千葉県西広貝塚の土壌サンプルから得られた微小貝類遺体．市原市西広貝塚Ⅲ，市原市埋蔵文化財センター調査報告書，(2)：1314-1332．
- 黒住耐二．2013a．縄文時代後期の宮前貝塚から出土したカワシンジュガイ．ひたちなか埋文だより，(38)：13-14．
- 黒住耐二．2013b．ナガラ原東貝塚の貝類遺体．In 木下尚子（編），ナガラ原東貝塚の研究，pp. 340-362．熊本大学文学部．
- 黒住耐二．2014．化石貝と微小貝からみた資源利用．季刊考古学別冊，(21)：149-153．
- 黒住耐二．2016a．微小貝類遺体．In 袖ヶ浦市教育委員会（編），山野貝塚総括報告書，pp. 172-179．袖ヶ浦市教育委員会．
- 黒住耐二．2016b．貝類遺体に関する追加報告．In 西田 巖（編），東名遺跡群Ⅳ，東名遺跡群総括報告書，佐賀市埋蔵文化財調査報告書，第100集，第1分冊，pp. 121-132．
- 黒住耐二．2016c．東名遺跡の貝類利用．In 西田 巖（編），東名遺跡群Ⅳ，東名遺跡群総括報告書，佐賀市埋蔵文化財調査報告書，第100集，第4分冊，pp. 71-74．
- 黒住耐二．2017a. 3. 24. 微小貝類遺体．In 埋蔵文化財調査センター／西野雅人・米倉貴之（編），史跡 加曾利貝塚 総括報告書，第2分冊 pp. 734-744．千葉県教育委員会 / 査読ナシ / 金原科研・樋泉科研番号アリ
- 黒住耐二．2017b．微小貝類遺体．養安寺遺跡，千葉県教育振興財団調査報告書，(758)：583-592．国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所・(公財) 千葉県教育振興財団，千葉．
- 小林清隆・服部智至（編）．2017．養安寺遺跡，千葉県教育振興財団調査報告書，(758)：1-665，18s pls. 国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所・(公財) 千葉県教育振興財団，千葉．
- 田中大介（編）．2016．山野貝塚総括報告書，296 pp. + 29 pls. 袖ヶ浦市教育委員会．
- 西野雅人．2009．大型貝塚形成の背景をさぐる．In 阿部芳郎（編），東京湾巨大貝塚の時代と社会，pp. 143-161．雄山閣，東京．
- 西野雅人・米倉貴之（編）．2017．史跡加曾利貝塚総括報告書，898+130 pp. + 128 pls. + DVD. 千葉県教育委員会．
- 吉野健一（編）．2006．君津市三直貝塚，千葉県教育振興財団調査報告書，(533)：1-813，147 pls. 。

## (4) 脊椎動物遺体

### 1 分析資料と分析方法

分析資料には、現地採集資料（発掘現場で目視確認され手で取り上げられた資料）と水洗選別資料（貝層サンプルの水洗選別によって回収された資料）がある。

現地採集資料の年代は縄文中期中葉と後期前葉・中葉のものがあるが、今回は確認調査であったため貝層上層で調査を終了したことから詳細な年代を特定できた資料は少ない。水洗選別資料については、時間の制約上から詳細な年代が特定されている2 T①（縄文後期前葉）、2 T③（縄文中期中葉）、6 T-A④（縄文後期中葉）、6 T-A⑧（縄文後期前葉）、17 T②（縄文後期前葉）の5サンプルを抽出して分析した。

同定対象とした資料については、魚類では主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・椎骨を必須部位とし、他にも同定可能な特徴をもった資料は同定対象とした。魚類以外では、現地採集資料ではすべての資料、水洗選別資料では部位を特定できる資料を同定対象とした。同定は現生骨格標本との比較によって行った。なお、第22表に示したフナの咽頭歯の番号は中島（2016）に従った。

### 2 分析結果と考察

#### (1) 現地採集資料

同定結果の詳細を第19・20表に、同定標本数（NISP、四肢骨の全周を残さない破片・シカの角・部位不明の骨片は含めていない）による組成を第21表に示す。

魚類ではマダイ亜科が2点（上後頭骨はマダイ）、鳥類では詳細な種類の特定が困難な四肢骨が1点、哺乳類ではノウサギ1点、タヌキ3点、イノシシ20点、シカ45点、イノシシまたはシカのいずれかと思われる資料が18点、詳細な種類の特定が困難な小型哺乳類が1点確認された（点数はいずれもNISP）。

全体としては哺乳類が大半を占め、とくにシカが卓越している点、魚類が少ない点の特徴である。上記のとおり詳細な年代を特定できた資料が少ないため年代別の傾向性があるかは明らかでない（中期中葉ではイノシシ、後期前～中葉ではシカが多い点が気になるが、少数の資料のため時代変化を示すものか否かは判断できない）。

特筆すべき資料として、6 Tで同一個体のシカの上腕骨・橈骨・尺骨（6 T-4～6骨）が交連に近い状態で検出されている（検出時には肘関節がはずれていたが、埋没後の二次的な攪乱による可能性が強いように思われる）。保存状態も上腕骨の近位端と尺骨の遠位端が欠損しているがほぼ完存に近い。また13 Tではシカの左右前頭骨～角の基部（角座）が接合したままの状態出土している（13 T-0001）。角座はやや変色しており細かな亀裂もみられることから、確実ではないが焼かれている可能性もある。いずれも特異な出土状況であり、単なる残滓の廃棄とは異なる意図で取り扱われたものである可能性が強い。

#### (2) 水洗選別資料

同定結果の詳細を第22・23表に、同定標本数（NISP、魚類の歯・鱗棘・鱗は含めていない）による組成を第24表に示す。

資料の大半が魚類であり、その他ではカエル類・ヘビ類・鳥類・ネズミ類・イノシシ・シカがわずかに確認されたのみである。カエル類・ヘビ類・ネズミ類は自然の遺骸と思われる。

魚骨のメッシュ別検出数の比率をみると（第30図）、各年代を通じて2～1mmメッシュの検出資料が大半を占めており、これらの小型魚類が漁獲物の主体であったことが示唆される。ただし縄文中期中葉～後期中葉に向けて2mmメッシュの資料が漸増、1mmメッシュの資料が漸減しており、漁獲物のサイズにある程度の年代的な変化があった可能性がある。

魚類の組成をみると（第31図）、全体としては淡水魚のコイ科（咽頭歯はすべてフナ）・ドジョウ科・ギギ科など、東京湾に來遊する回遊性のニシン科（コノシロ・マイワシを含む）・カタクチイワシ・アジ類（おそらくマアジ）など、東京湾の普通種であるキス属などが多いが、組成はサンプルの年代によって大きく異なる。すわなち、縄文中期中葉の2 T③ではコイ科を主とする淡水魚類とニシン科やキス属などの回遊性／

内湾性種が卓越するが、縄文後期中葉の6 T - A④では淡水魚が激減し、アジ類が増加する。両者の中間である縄文後期前葉ではサンプルごとの差が大きく、2 T①は中期中葉、6 T - A⑧は後期中葉に近い傾向を示す。

ただし、以上は少量のサンプルからの結果であり、遺跡の全体的傾向をどの程度反映しているかについては慎重に検討する必要がある。

参考文献

中島経夫 2016 コイ科魚類の咽頭骨・咽頭歯の形態とその形態を表す部分の名称と用語, *Naturalistae* 20: 29-40

第18表 宮ノ越貝塚から採集された脊椎動物遺体の種名一覧

和名	学名
軟骨魚綱(板鰓類)	CHONDRICHTHYES (Elasmobranchii)
カスザメ属	<i>Squatina</i>
エイ類	Batoidea
硬骨魚綱	OSTEICHTHYES
マイワシ	<i>Sardinops melanostictus</i>
コノシロ	<i>Konosirus punctatus</i>
カタクチイワシ	<i>Engraulis japonicus</i>
ウナギ属	<i>Anguilla</i>
フナ	<i>Carassius auratus</i>
ドジョウ科	Cobitidae
ギギ科	Bagridae
サヨリ属	<i>Hyporhamphus</i>
スズキ属	<i>Lateolabrax</i>
キス属	<i>Sillago</i>
マアジ?	Carangidae cf. <i>Trachurus japonicus</i>
マダイ	<i>Pagrus major</i>
クロダイ属	<i>Acanthopagrus</i>
ハゼ科	Gobiidae
ハゼ科類似種	cf. Gobiidae
サバ属	<i>Scomber</i>
ギンポ類	cf. <i>Enedrias nebulosa</i>
コチ科	Platycephalidae
イシガレイ	<i>Kareius bicoloratus</i>
ウシノシタ類	Soleoidei
カワハギ科	Monacanthidae
フグ科	Tetraodontidae
両生綱	AMPHIBIA
カエル類	Anura
爬虫綱	REPTILIA
ヘビ類	Serpentes
鳥綱	AVES
目不明	Order indet
哺乳綱	MAMMALIA
ネズミ亜科	Murinae
ハタネズミ亜科	Arvicolinae
ノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i>
タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>
イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>

第19表 宮ノ越貝塚から現地採集された脊椎動物遺体の同定結果①

\* 残存位置・損傷の略号凡例: w 完存, p 近位端, m 骨幹, d 遠位端, fr 破片, (p)・(d)は未癒合の骨端のみ, (p-)・(d-)は骨端未癒合脱落, <p->・<d->は骨端のみ欠損, SF スパイラルフラクチャー。

トレンチ	採取位置	年代	種類	部位	残存位置*	左右	数	損傷*	備考
1T	1T-1骨	トレンチ一括	シカ	距骨		L	1		
2T	2T-貝層骨1	中央部貝層密集範囲点あげ	シカ	角	fr	?	1		加工痕なし
2T	2T-貝層骨2	中央部貝層密集範囲点あげ	イノシシ	上顎M	fr	?	1		
2T	2T-貝層骨3	中央部貝層密集範囲点あげ	イノシシ	環椎			1		
2T	2T-貝層骨4	SK001点あげ	後期前葉	幼児骨			3		
2T	2T-貝層骨4	SK001点あげ	後期前葉	イノシシ/シカ	四肢骨	mfr	?	1	
2T	2T-貝層骨5	中央部貝層密集範囲点あげ	中期中葉	イノシシ/シカ	四肢骨	mfr	?	1	SF
2T	2T-貝層骨6	SK001点あげ	後期前葉	イノシシ/シカ	四肢骨	mfr	?	1	SF
2T	2T-2骨	トレンチ北壁から南約5m付近一括	中期～後期	ヒト	頭蓋骨	fr	1		
2T	2T-2骨	トレンチ北壁から南約5m付近一括	中期～後期	イノシシ/シカ	四肢骨	mfr	?	1	
2T	2T-0003内骨	土器内出土骨一括	後期前葉	幼児骨			5		
2T	2T-0003内骨	土器内出土骨一括	後期前葉	イノシシ	基節骨	(p)	?	1	焼
2T	2T-0003内骨	土器内出土骨一括	後期前葉	シカ	中節骨	d	?	1	
2T	2T-0003内骨	土器内出土骨一括	後期前葉	イノシシ/シカ	大腿骨	(p)	?	1	
2T	2T-0003-2骨	土器下出土骨一括2	後期前葉	イノシシ/シカ?	不明	fr	1		焼
2T	2T-0003土器の下骨	土器下出土骨一括1	後期前葉	シカ	中足骨	mfr	?	1	加工痕なし
2T	2T-0003土器の下貝層中骨	土器下貝層出土骨一括	中期中葉	ノウサギ	切歯	*	1		
2T	2T-0003土器の下貝層中骨	土器下貝層出土骨一括	中期中葉	イノシシ	下顎2	R	1		
2T	2T-0003土器の下貝層中骨	土器下貝層出土骨一括	中期中葉	シカ	第2・3足根骨	R	1		
2T	2T-0003土器の下貝層中骨	土器下貝層出土骨一括	中期中葉	イノシシ/シカ	脛骨	(p)fr	?	1	
2T	2T-0003土器の下貝層中骨	土器下貝層出土骨一括	中期中葉	イノシシ/シカ	肋骨	m	?	1	
6T	6T-1骨	トレンチ北側一括	中期～後期	タヌキ	上顎骨	[P4]	R	1	
6T	6T-1骨	トレンチ北側一括	中期～後期	タヌキ	脛骨	d	R	1	
6T	6T-1骨	トレンチ北側一括	中期～後期	シカ	上顎P3	R	1		
6T	6T-1骨	トレンチ北側一括	中期～後期	イノシシ/シカ	大腿骨	dfr	?	1	焼
6T	6T-1骨	トレンチ北側一括	中期～後期	イノシシ/シカ	四肢骨	mfr	?	3	焼1
6T	6T-2骨	トレンチ南側一括	中期～後期	イノシシ/シカ?	不明	fr	1		焼1
6T	6T-4骨	6T-Aサンプル③・④	後期中葉	シカ	上腕骨	<p->-d	L	1	交連
6T	6T-5骨	6T-Aサンプル③・④	後期中葉	シカ	橈骨	w	L	1	交連
6T	6T-6骨	6T-Aサンプル③・④	後期中葉	シカ	尺骨	p-m	L	1	交連
6T	6T-貝層骨1	中央部貝層密集範囲点あげ	中期～後期	イノシシ/シカ	四肢骨	mfr	?	1	
6T	6T-貝層骨2	中央部貝層密集範囲点あげ	中期～後期	イノシシ	大腿骨	<d->	R	1	SF
6T	6T-10骨	6T-Aサンプル貝層確認面周辺一括	中期～後期	不明	不明	fr	1		ウミガメ/海獣の可能性もある
9T	9T-1骨	トレンチ北側一括	中期～後期	イノシシ	橈骨	p	R	1	SF
9T	9T-1骨	トレンチ北側一括	中期～後期	シカ	角	fr	?	1	風化
9T	9T-1骨	トレンチ北側一括	中期～後期	シカ	上顎M	fr	L	1	加工痕なし
9T	9T-1骨	トレンチ北側一括	中期～後期	シカ	下顎M3		R	1	
9T	9T-1骨	トレンチ北側一括	中期～後期	シカ	距骨	w	R	1	
9T	9T-1骨	トレンチ北側一括	中期～後期	シカ	踵骨	関節部fr	R	1	
9T	9T-1骨	トレンチ北側一括	中期～後期	イノシシ/シカ	椎骨			1	
9T	9T-1骨	トレンチ北側一括	中期～後期	イノシシ/シカ	肋骨	m		1	
9T	9T-2骨	トレンチ中央一括	中期～後期	イノシシ	膝蓋骨		L	1	
9T	9T-2骨	トレンチ中央一括	中期～後期	シカ	前頭骨+角	fr	?	1	角座部上端+角座, 加工痕なし
9T	9T-2骨	トレンチ中央一括	中期～後期	シカ	下顎M			1	咬耗進行
9T	9T-2骨	トレンチ中央一括	中期～後期	シカ	脛骨	p	L	1	
9T	9T-2骨	トレンチ中央一括	中期～後期	シカ	距骨	w	L	1	
9T	9T-2骨	トレンチ中央一括	中期～後期	イノシシ/シカ	四肢骨	mfr	2		焼1
9T	9T-3骨	トレンチ南側一括	中期～後期	イノシシ/シカ	不明	fr	2		焼1
9T	9T-4骨	サブトレンチ一括1	中期～後期	イノシシ/シカ	四肢骨	mfr	1		焼
9T	9T-5骨	サブトレンチ一括2	中期～後期	イノシシ/シカ	四肢骨	mfr	1		焼
9T	9T-貝層骨1	南部貝層密集範囲点あげ	中期～後期	イノシシ/シカ	四肢骨	mfr	2		
9T	9T-貝層骨2	南部貝層密集範囲点あげ	中期～後期	シカ	下顎骨	[M1M2M3]	R	1	
9T	9T-貝層骨3	南部貝層密集範囲点あげ	中期～後期	イノシシ/シカ	四肢骨	mfr	1		
12T	12T-1骨	トレンチ一括	後期中葉	シカ	中節骨	d	?	1	
12T	12T-1骨	トレンチ一括	後期中葉	イノシシ/シカ	不明	fr	5		
12T	12T-貝層骨	北部貝層密集範囲一括	後期中葉	イノシシ	側頭骨		L	1	
13T	13T-1歯・骨	トレンチ一括	中期～後期	タヌキ	上顎C		L	1	
13T	13T-1歯・骨	トレンチ一括	中期～後期	イノシシ	上顎M2		L	1	
13T	13T-1歯・骨	トレンチ一括	中期～後期	イノシシ	中手/中足骨	d	?	1	
13T	13T-1歯・骨	トレンチ一括	中期～後期	シカ	脛骨	d	L	1	
13T	13T-1歯・骨	トレンチ一括	中期～後期	シカ	基節骨	w	?	1	
13T	13T-1歯・骨	トレンチ一括	中期～後期	イノシシ/シカ	側頭骨	岩様部	*	1	
13T	13T-0001	シカ頭骨	中期～後期	シカ	前頭骨+角(角座)		L	1	角座は焼?
13T	13T-0001	シカ頭骨	中期～後期	シカ	前頭骨+角(角座)		R	1	角座は焼?
13T	13T-0001	0001内灰層	中期～後期	小型哺乳類	四肢骨	m	?	1	
13T	13T-3骨	シカ頭骨周辺一括	中期～後期	シカ	中足骨	mfr	?	1	
13T	13T-3骨	シカ頭骨周辺一括	中期～後期	イノシシ/シカ	不明	fr	3		
17T	17T-1骨	トレンチ北側一括	中期～後期	シカ	中心第4足根骨	w	L	1	
17T	17T-1骨	トレンチ北側一括	中期～後期	イノシシ/シカ	頸骨	fr	2		
17T	17T-1骨	トレンチ北側一括	中期～後期	イノシシ/シカ	不明	fr	2		焼1
17T	17T-2骨	トレンチ中央一括	中期～後期	シカ	角	尖端		1	
17T	17T-2骨	トレンチ中央一括	中期～後期	シカ	上顎M1		R	1	
17T	17T-2骨	トレンチ中央一括	中期～後期	シカ	距骨	w	L	1	
17T	17T-2骨	トレンチ中央一括	中期～後期	シカ	中手/中足骨	(d)	?	1	
17T	17T-2骨	トレンチ中央一括	中期～後期	イノシシ/シカ?	不明	fr	2		焼1
17T	17T-3骨	トレンチ南側一括	中期～後期	イノシシ/シカ	四肢骨	mfr	?	1	

第20表 宮ノ越貝塚から現地採集された脊椎動物遺体の同定結果②

\* 残存位置・損傷の略号凡例: w 完存, p 近位端, m 骨幹, d 遠位端, fr 破片, (p)・(d)は未癒合の骨端のみ, (p-)・(d-)は骨端未癒合脱落, <p->・<d->は骨端のみ欠損, SF スパイラルフラクチャー。

トレンチ	採取位置	年代	種類	部位	残存位置*	左右	数	損傷*	備考
17T	17T-4骨	サブトレンチ1~5層一括	シカ	踵骨	関節部	R	1		
17T	17T-4骨	サブトレンチ1~5層一括	シカ	第2+3手根骨		R	1		
17T	17T-4骨	サブトレンチ1~5層一括	シカ	第2+3足根骨		L	1		
17T	17T-4骨	サブトレンチ1~5層一括	イノシシ	頬骨		R	1		
17T	17T-4骨	サブトレンチ1~5層一括	イノシシ	下顎m2		R	1		
17T	17T-4骨	サブトレンチ1~5層一括	イノシシ	橈側手根骨		R	1		
17T	17T-4骨	サブトレンチ1~5層一括	イノシシ/シカ	側頭骨	岩縁部	*	1		
17T	17T-4骨	サブトレンチ1~5層一括	イノシシ/シカ	脛骨	pfr	L	1		
17T	17T-4骨	サブトレンチ1~5層一括	イノシシ/シカ	四肢骨	mfr	?	3	焼1	
17T	17T-4骨	サブトレンチ1~5層一括	イノシシ/シカ?	不明	fr		多		
17T	17T-5骨	17Tサンプル①一括	マダイ亜科	前上顎骨		L	1		やや小型
17T	17T-5骨	17Tサンプル①一括	シカ	角	fr	?	1		
17T	17T-5骨	17Tサンプル①一括	シカ	下顎M1		R	1		
17T	17T-5骨	17Tサンプル①一括	シカ	踵骨	d	R	1		
17T	17T-5骨	17Tサンプル①一括	シカ	中手/中足骨	pfr	?	1		
17T	17T-5骨	17Tサンプル①一括	シカ	大腿骨	p大腿骨頭	L	1		
17T	17T-5骨	17Tサンプル①一括	イノシシ	第5中足骨	p	L	1	焼	
17T	17T-5骨	17Tサンプル①一括	イノシシ/シカ	肋骨	m	?	1		
17T	17T-5骨	17Tサンプル①一括	イノシシ/シカ	四肢骨	mfr	?	4	焼1	
17T	17T-6骨	17Tサンプル②一括	シカ	上顎骨	fr	R	1		
17T	17T-0003	北部貝層密集範囲一括1	イノシシ/シカ	四肢骨	mfr	?	1		
17T	17T-0004	北部貝層密集範囲一括2	シカ	下顎骨	[P2P3P4M1]	L	1		
17T	17T-0005	北部貝層密集範囲一括3	イノシシ/シカ	四肢骨	mfr	?	2		
17T	17T-0005	北部貝層密集範囲一括3	イノシシ/シカ?	不明	fr		3		
17T	17T-貝層骨1	北部貝層密集範囲点あげ	シカ	肩甲骨	関節部	L	1		
17T	17T-貝層骨2	サブトレンチ6層点あげ	シカ	寛骨(腸骨)	白	R	1		
17T	17T混土貝層骨	サブトレンチ6層一括	イノシシ/シカ?	不明	fr		1		
21T	21T-0002	南部貝層密集範囲一括	シカ	寛骨	白	R	1		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	マダイ	上後頭骨			1		中型
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	鳥類(同定不可)	四肢骨	m	?	1		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	イノシシ	上顎m3		R	1		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	イノシシ	上顎骨	[P4M1]	L	1		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	イノシシ	上顎11		R	1		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	イノシシ	下顎1	fr		1		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	イノシシ	上腕骨	d	R	1		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	イノシシ	踵骨		R	1		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	シカ	上顎M1		L	1		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	シカ	肩甲骨	<d->	R	1		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	シカ	橈骨	m-<d->	R	1		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	シカ	寛骨(座骨)	白	L	1		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	シカ	大腿骨	<p->-m	L	1		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	シカ	距骨		R	2		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	シカ	踵骨		R	1		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	イノシシ/シカ	胸椎			1		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	イノシシ/シカ	腰椎	椎弓fr		2		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	イノシシ/シカ	椎骨	椎体		2		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	イノシシ/シカ	種子骨			1		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	イノシシ/シカ	四肢骨	mfr		17		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	イノシシ/シカ?	不明	fr		多		
21T	21T-1一括1	トレンチ一括	ヒト	頭蓋骨	fr		1		

第21表 宮ノ越貝塚から現地採集された脊椎動物遺体の組成 (N I S P)

\* 鳥獣四肢骨の全周を残さない破片・シカの角・詳細不明の骨片はNISPの算定から除外した。

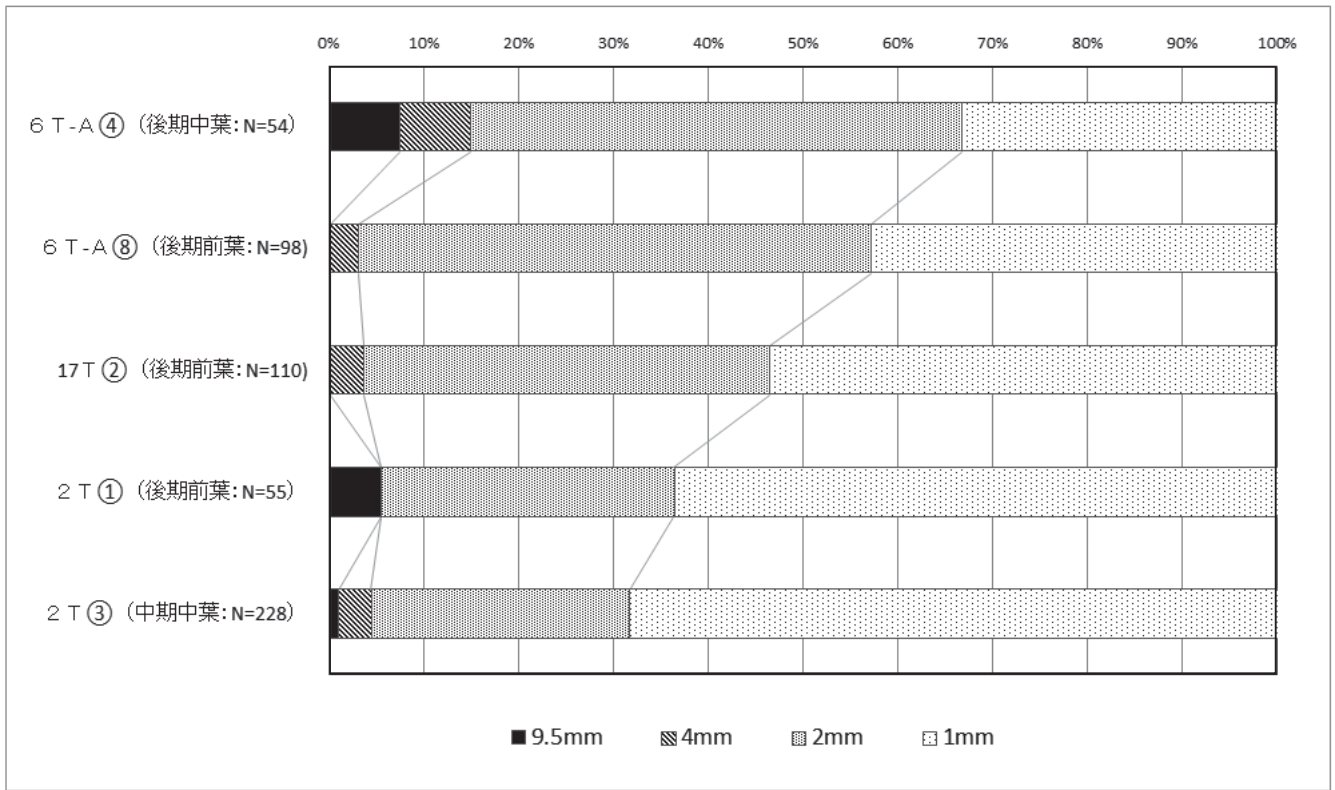
種類	中期中葉	中期～後期	後期前葉	後期中葉	合計
マダイ亜科		2			2
鳥類(同定不可)		1			1
ノウサギ	1				1
タヌキ		3			3
小型哺乳類		1			1
イノシシ	3	15	1	1	20
シカ	1	38	2	4	45
イノシシ/シカ	2	15	1		18
合計	7	75	4	5	91



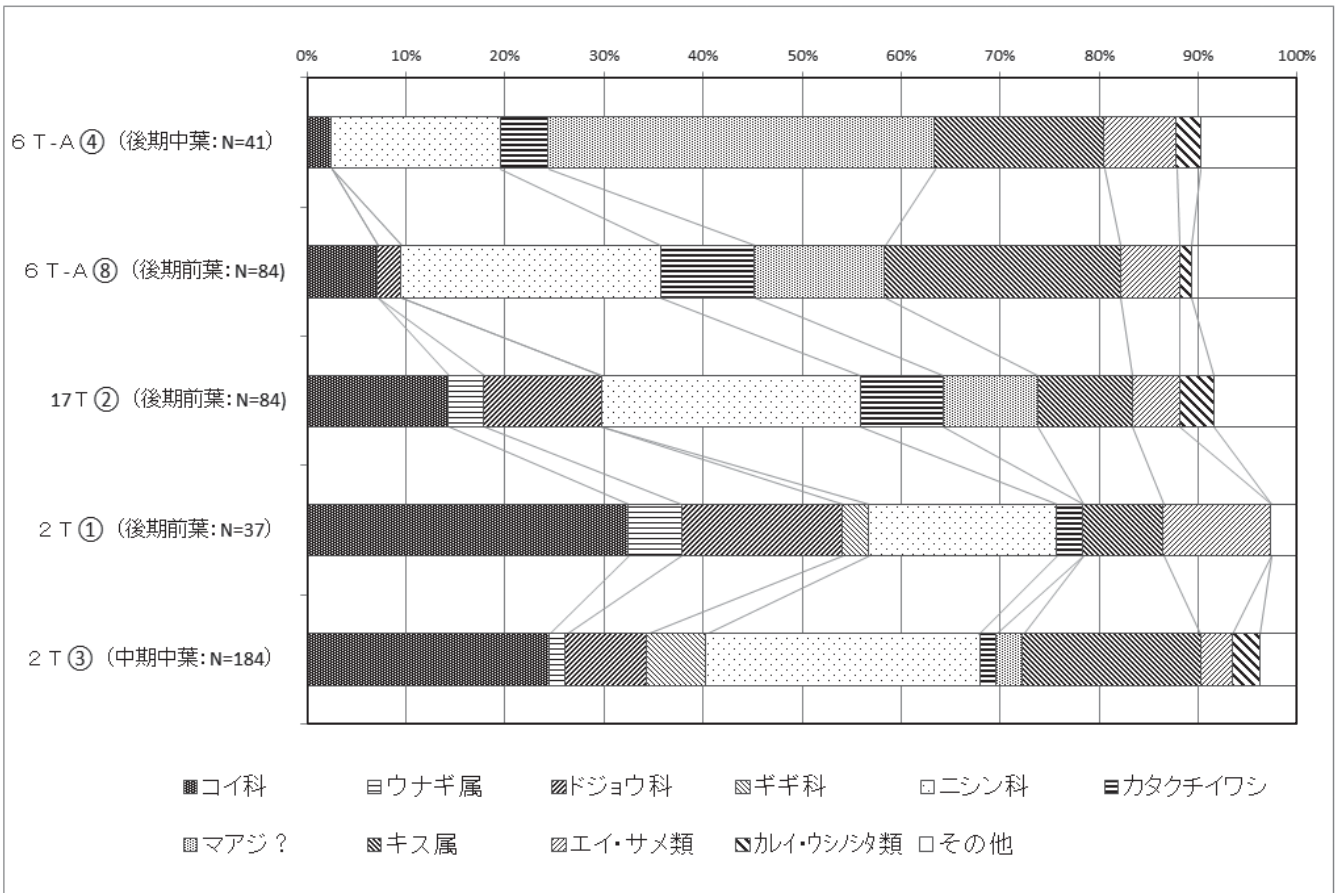








第30図 宮ノ越貝塚の貝層サンプルから水洗選別によって検出された脊椎動物遺体のメッシュ別の比率 (NISP比)



第31図 宮ノ越貝塚の貝層サンプルから水洗選別によって検出された魚類遺体組成の層位的変化 (NISP比)

## 5. まとめ

本調査は宮ノ越貝塚における初めての発掘調査である。本調査において宮ノ越貝塚は中期中葉～後期中葉にかけて形成された貝塚であることが明らかになった。本調査区は昭和60年測量の貝層範囲南側に位置するが、現在の貝層南端は昭和60年の測量時より北に位置することから、耕作等により貝層が破壊されてしまった可能性がある。

出土土器は、中期中葉加曾利EⅡ式が多く出土するが、中期後葉の土器は少なく、後期初頭称名寺式から増加傾向にある。貝層サンプルの採取を目的にサブトレンチを設定した6・17T以外は、貝層上層部で調査を終了したため、各時期における貝層形成の様子は不明である。

出土土器は磨石類が最も多く、軽石製品や土器片錘の出土から、植物利用や漁撈生活の様子が窺える。しかし、狩猟具としての石鏃・尖頭器等の出土はない。微小貝類遺体の分析による、山野貝塚や千葉市加曾利貝塚のような後期における森林管理の変換が顕著に見られないことと何かしらの関係を示す可能性もある。

貝類は、イボキサゴが大部分を占める点に関しては東京湾東岸の貝塚と共通する点であるが、次いで出土はシオフキ、マテガイ、ハマグリ、ツメタガイの順であり、ハマグリの利用が他の貝塚と比較すると少ない。山野貝塚との比較においては、汽水域のヤマトシジミが挙げられるが、検出数は少なく、検出した貝層サンプルの時期は山野貝塚形成前の中期中葉～後期前葉である。今後、頻出して出土すれば、時期差・生業活動における住み分け等の可能性も考えられるが、現時点では不明である。

脊椎動物遺体は、哺乳類ではシカ・イノシシが大半を占め、その中でもシカが多く検出されている。貝層上層で調査を終了したため、いずれも時期は特定できないが、山野貝塚から検出された脊椎動物遺体の組成と類似する。魚類は、古い時期はコイ科等の淡水魚の検出数が多く、年代に関わらず、スズキ属、マダイ亜科、クロダイ属の検出数は少ない。これは山野貝塚から検出された魚類の組成とは大きく異なる。しかし、採取サンプルが少量であるため、時期差・遺跡間の性格の違い等は、今後サンプルをさらに増やして検討する必要がある。

小櫃川左岸域における中期集落については、加曾利EⅡ式期の台木A遺跡、阿玉台式期～加曾利EⅣ式期の環状集落である伊豆山台遺跡等が挙げられる。しかし、いずれの遺跡も中期後半には規模を縮小する傾向が見られ、これは同時期の千葉県内の貝塚においても同様の傾向が見られる。宮ノ越貝塚においても、同時期の土器出土量は減少するが、後期初頭になると再度貝層形成が始まる。今のところ明確に中期後葉加曾利E式後半期においても継続的に集落が展開し、後期初頭から再度貝塚が形成される貝塚とされるのは加曾利貝塚のみであり、詳細が不明なものを加えたとしても、中期前葉～後期安行式期の土器が継続して出土する木更津市祇園貝塚の2遺跡のみである。中期後葉の土器は少ないが、後期初頭から同じ場所において貝塚が形成される宮ノ越貝塚についても、中期後半の貝塚・集落形成について、今後の調査を踏まえながら慎重に判断する必要がある。

### 参考文献

- 能城秀喜 1990 「袖ヶ浦町宮ノ越貝塚について」『千葉文華』25 千葉県文化財保護協会
- 安藤道由 1995 『台木A遺跡』（財）君津郡市文化財センター
- 上守秀明他 2000 「伊豆山台遺跡」『木更津市文化財調査集報』4 木更津市教育委員会
- 梅本洋平 2002 「宮ノ越貝塚の表面採集資料について」『袖ヶ浦市史研究』10 袖ヶ浦市郷土博物館
- 西野雅人 2004 「(1)貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古4(遺跡・遺構・遺物)』（財）千葉県史料研究財団
- 田中大介他 2016 『山野貝塚総括報告書』袖ヶ浦市教育委員会
- 井上 賢他 2017 「祇園貝塚出土土器について」『木更津市文化財調査集報』20 木更津市教育委員会
- 西野雅人他 2017 『史跡加曾利貝塚総括報告書』千葉市教育委員会

# 写真図版





1. 調査区全景 (南→)



2. 5 トレンチ (北西→)



3. 14 トレンチ (南東→)



4. 15 トレンチ (北東→)



5. 23 トレンチ (北西→)



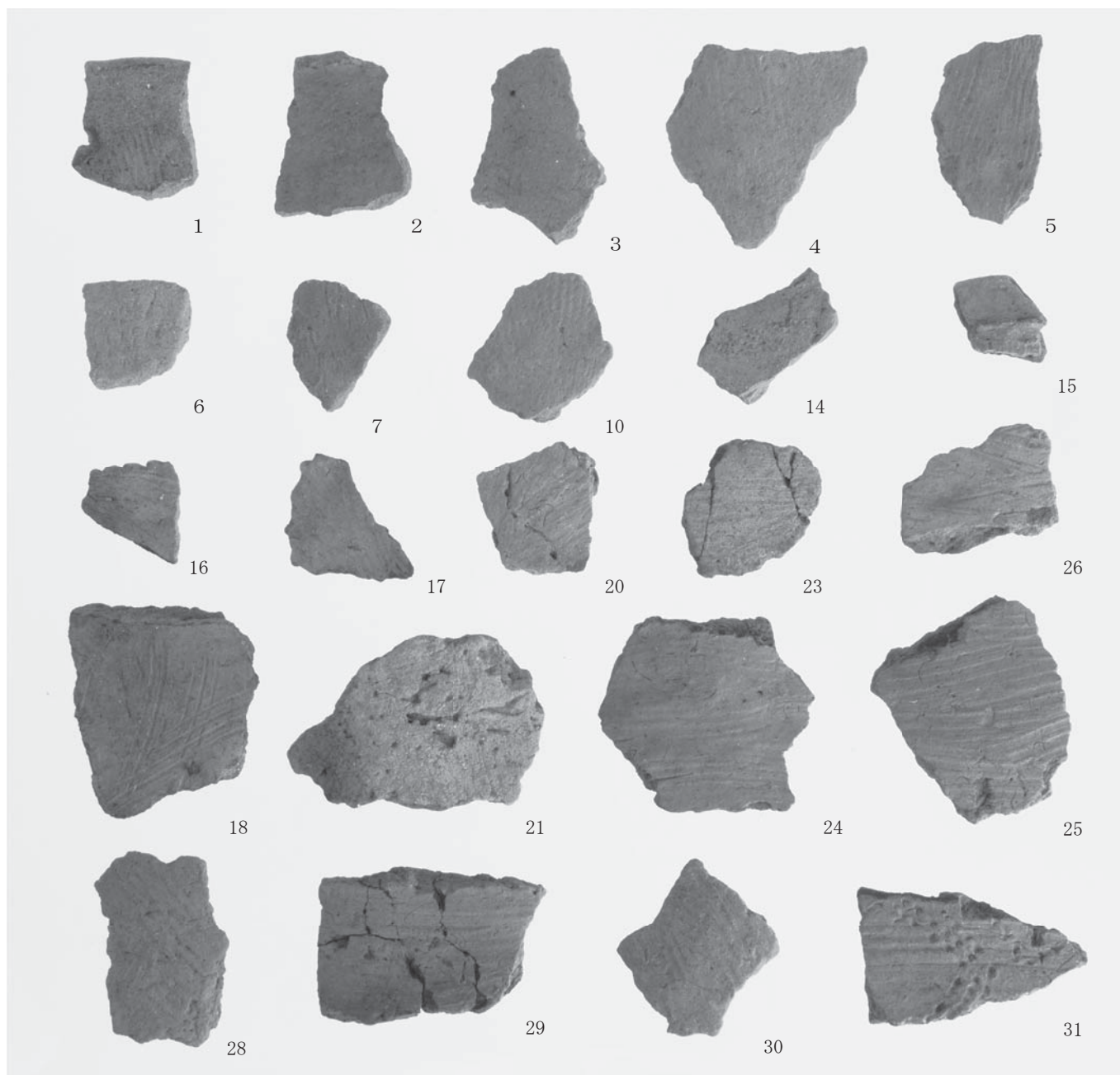
6. 25 トレンチ (北→)



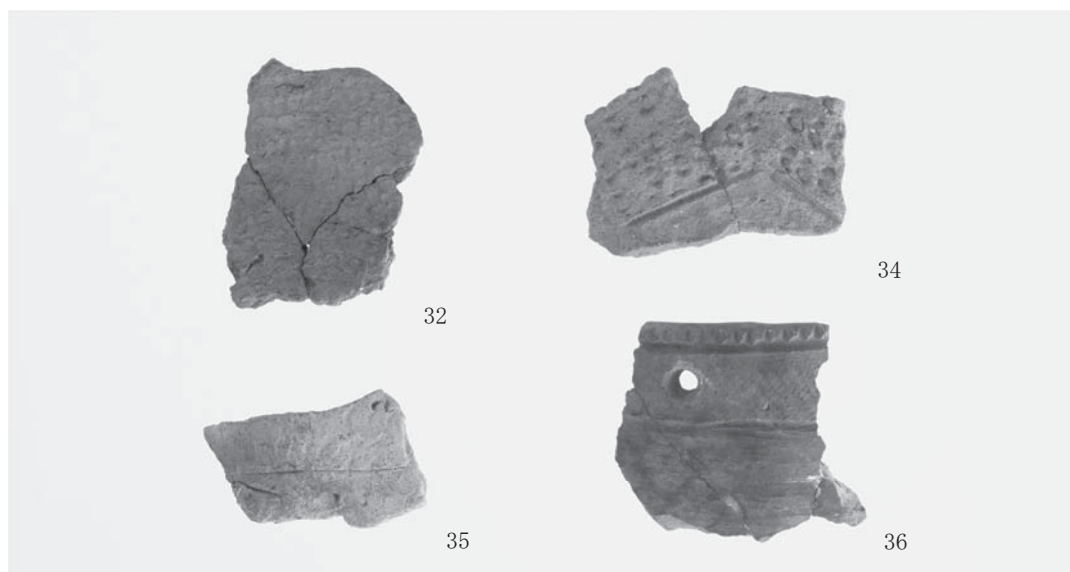
7. 25 トレンチ (南→)



8. 作業風景 (西→)



1. 出土土器①



2. 出土土器②



3. 出土石器





1. 調査前全景 (北西→)



2. 鼻欠1号墳周溝検出状況 (北西→)



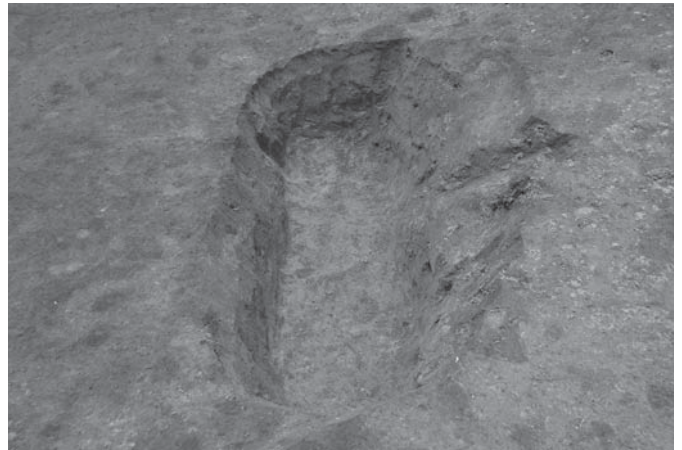
3. 調査区東壁セクション (北側) (西→)



4. 調査区東壁セクション (南側) (南西→)



5. 調査区南壁セクション (北→)



6. S K 003 検出状況 (北→)



7. T P 002 検出状況 (北西→)



8. 作業風景 (北→)



1. 1 トレンチ (北東→)



2. 2 トレンチ (北東→)



3. 3 トレンチ (北東→)



4. 3 トレンチセクション (北西→)



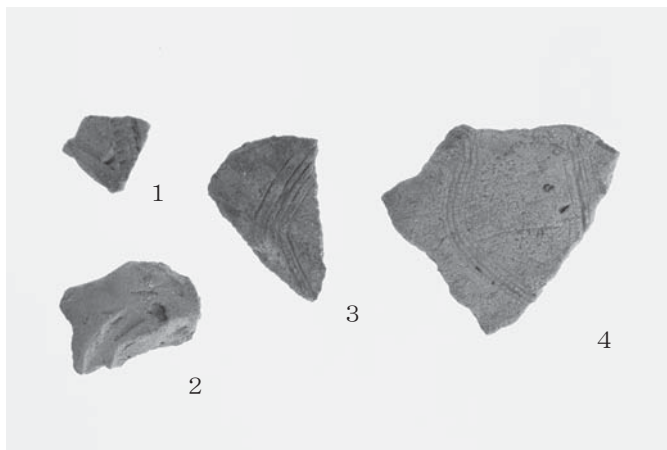
5. 4 トレンチ (北東→)



6. 4 トレンチセクション (南東→)



7. 5 トレンチ (北西→)



8. 出土遺物



1. 調査前全景 (北東→)



2. 1 トレンチ (北西→)



3. 2 トレンチ (南西→)



4. 2 トレンチセクション (北西→)



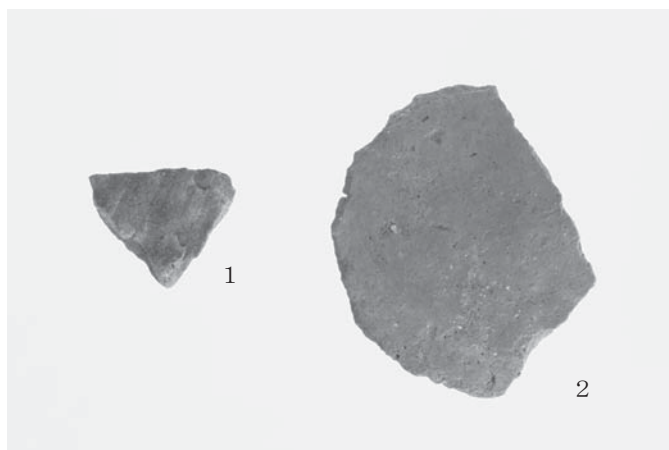
5. 3 トレンチ (南西→)



6. S K 001 検出状況 (南西→)



7. 掘削作業風景 (北東→)



8. 出土遺物



1. 調査区全景 (南東→)



2. 昭和 60 年調査風景 (南東→)



3. 1 トレンチ (南→)



4. 2 トレンチ (南→)



5. S K 001 遺物出土状況 (南→)



6. 3 トレンチ (南→)



7. 4 トレンチ (南→)



8. 6 トレンチ (南→)



1. 6 トレンチシカ上腕骨等出土状況 (南西→)



2. 6 トレンチ貝層検出状況 (南西→)



3. 7 トレンチ (南→)



4. 8 トレンチ (南→)



5. 9 トレンチ (南→)



6. 10 トレンチ (南→)



7. 11 トレンチ遺構検出状況 (南→)



8. 12 トレンチ (南→)



1. 13 トレンチ (南→)



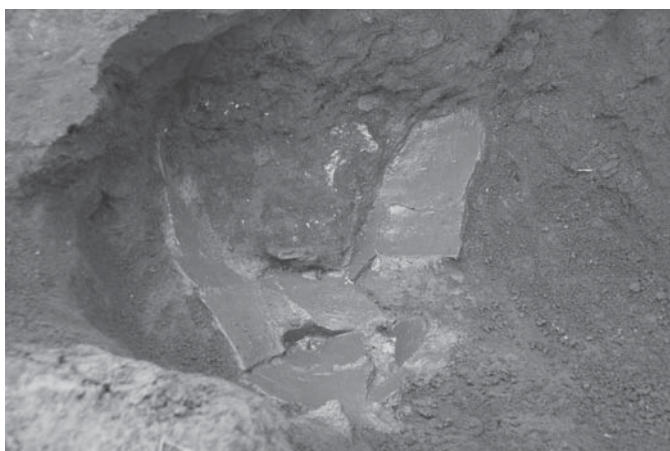
2. 13 トレンチシカ頭骨出土状況 (南東→)



3. 17 トレンチ (南→)



4. 17 トレンチ貝層検出状況 (北東→)



5. SK 003 遺物出土状況 (東→)



6. 20 トレンチ (南→)



7. 21 トレンチ (南→)



8. 作業風景 (南東→)



1. SK 003 出土土器



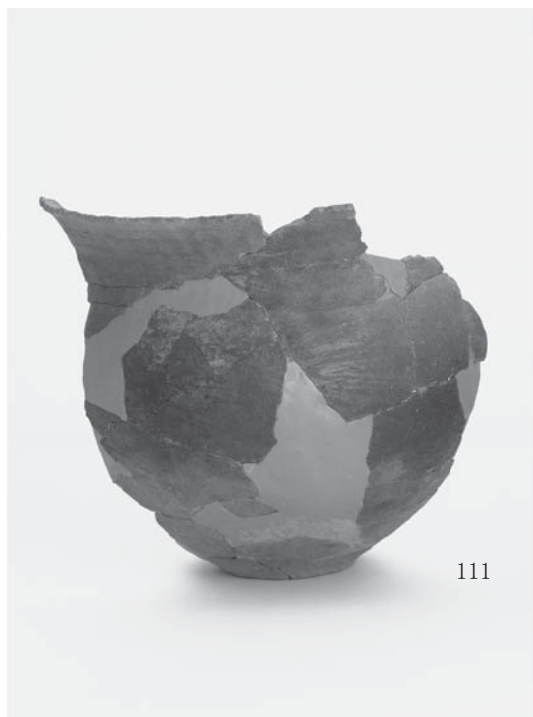
3. 出土土器①



4. 出土土器②



2. SK 001 出土土器



5. 出土土器③

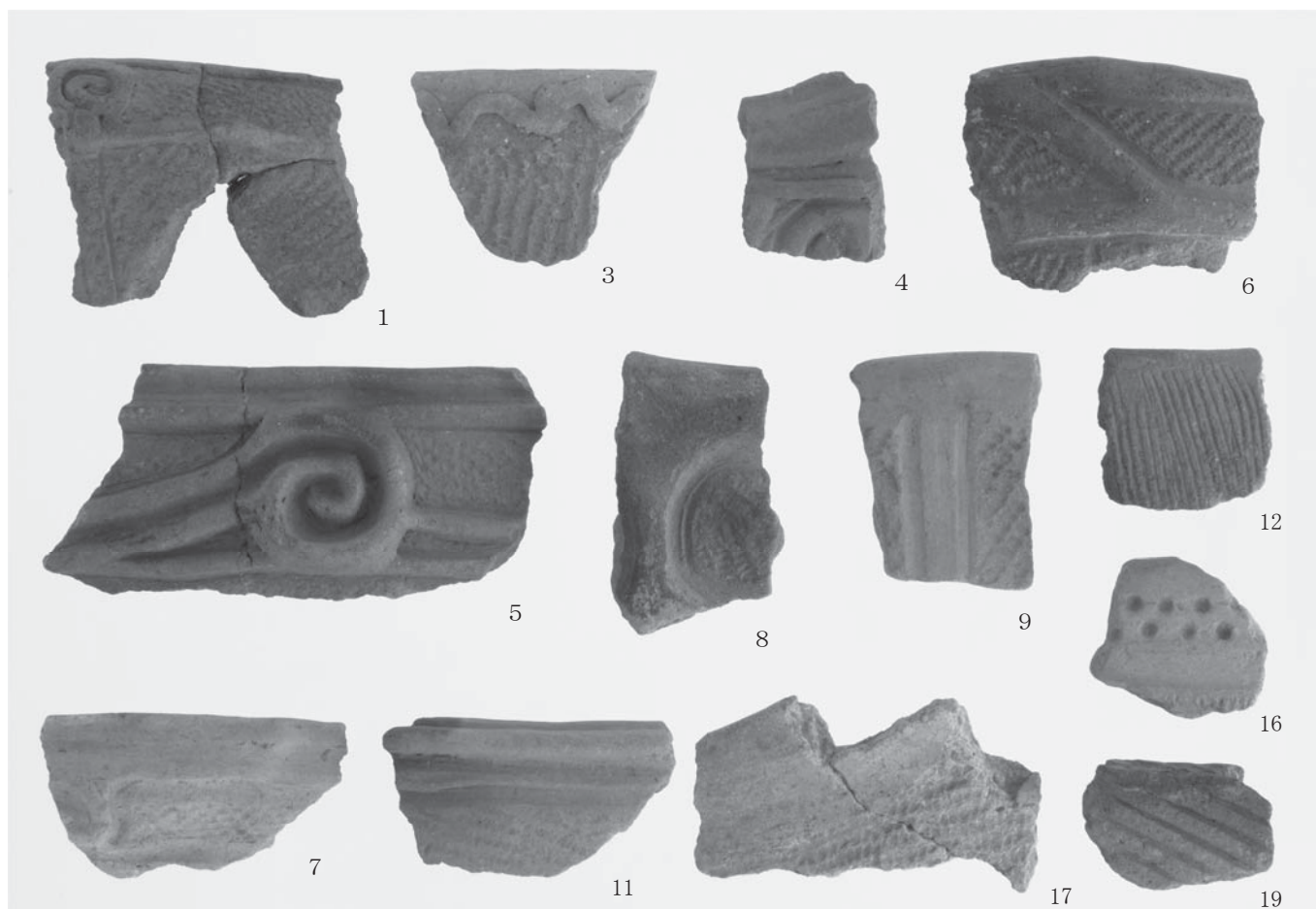
52

80

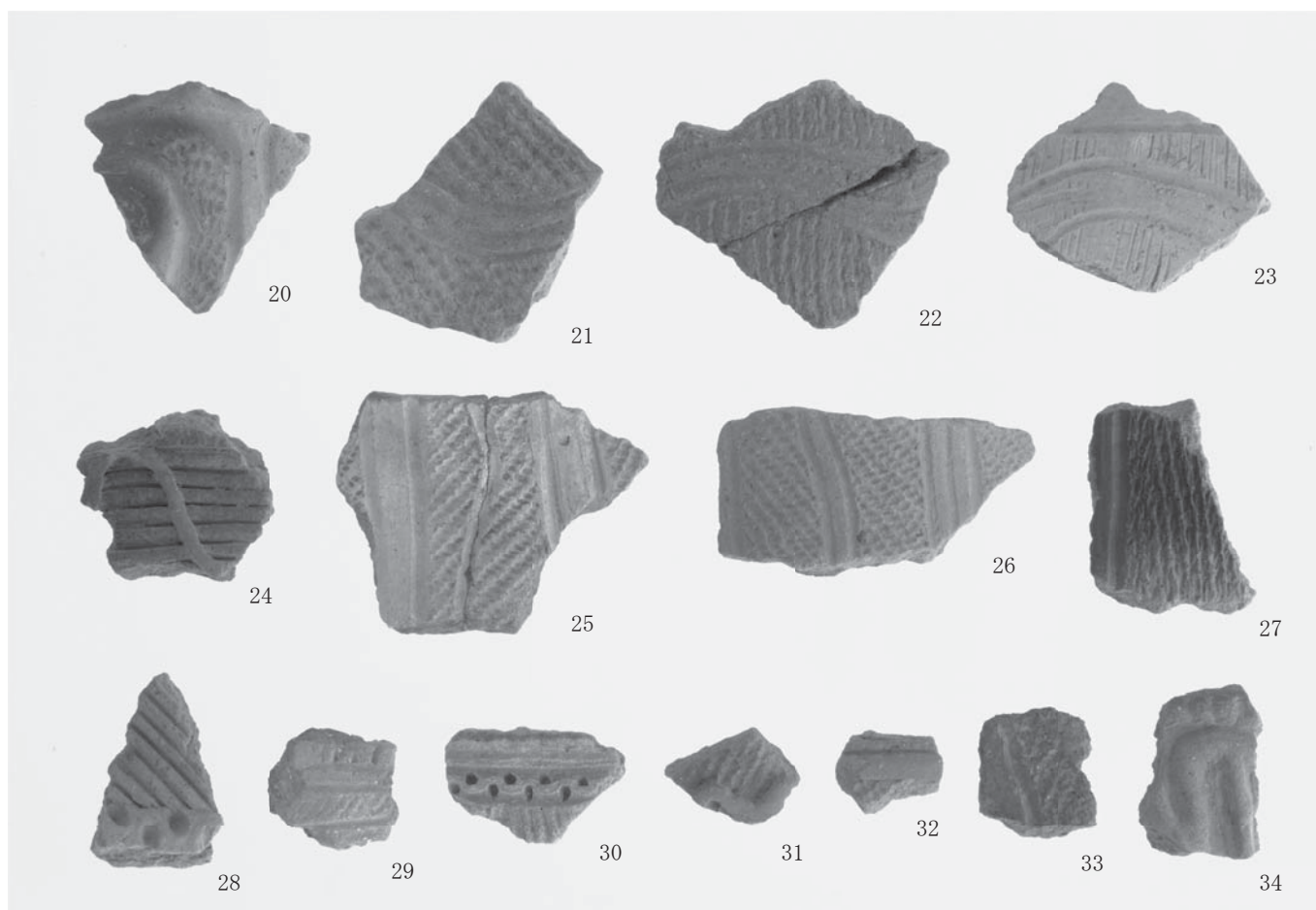
1

1

111

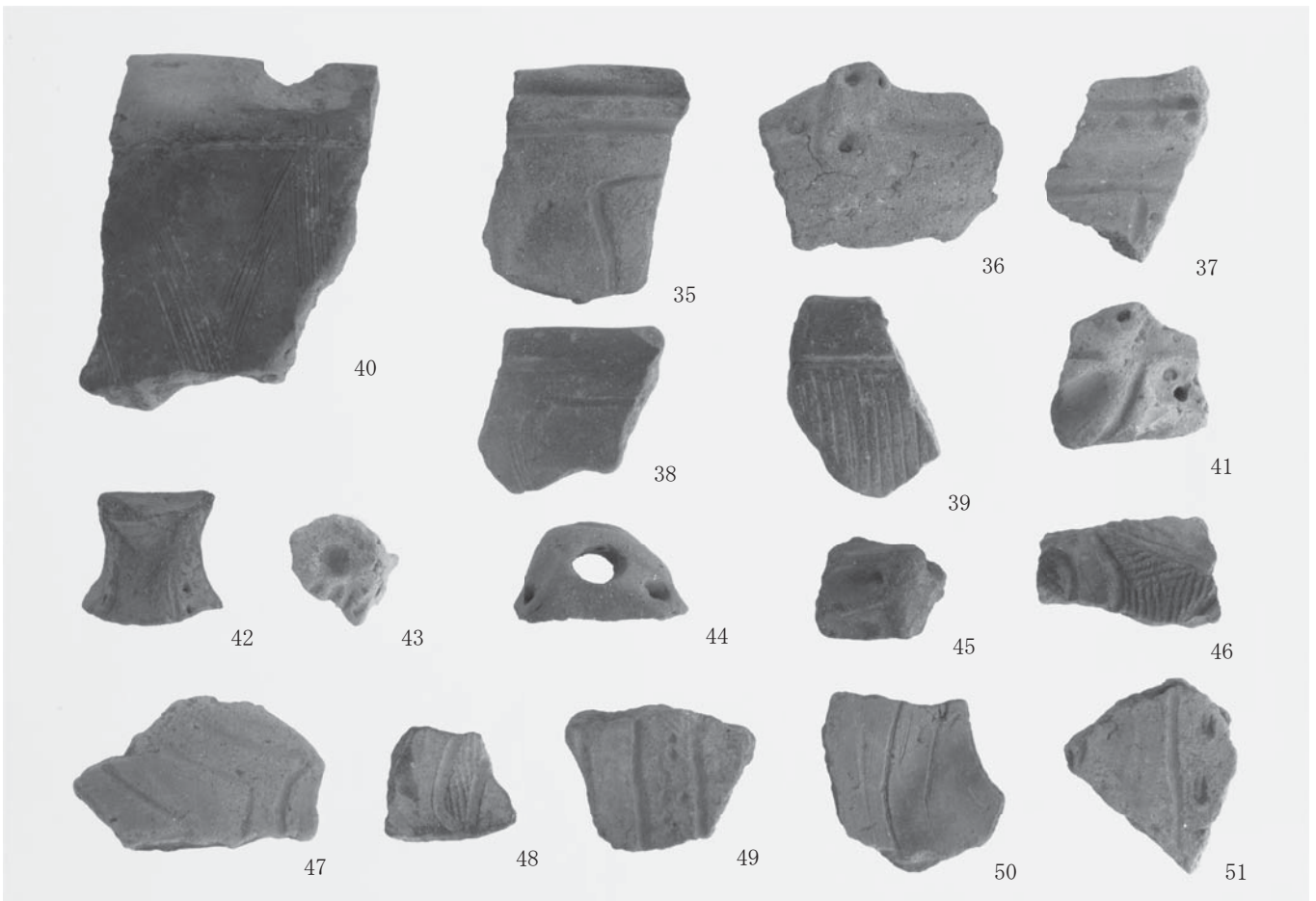


1. 出土土器④

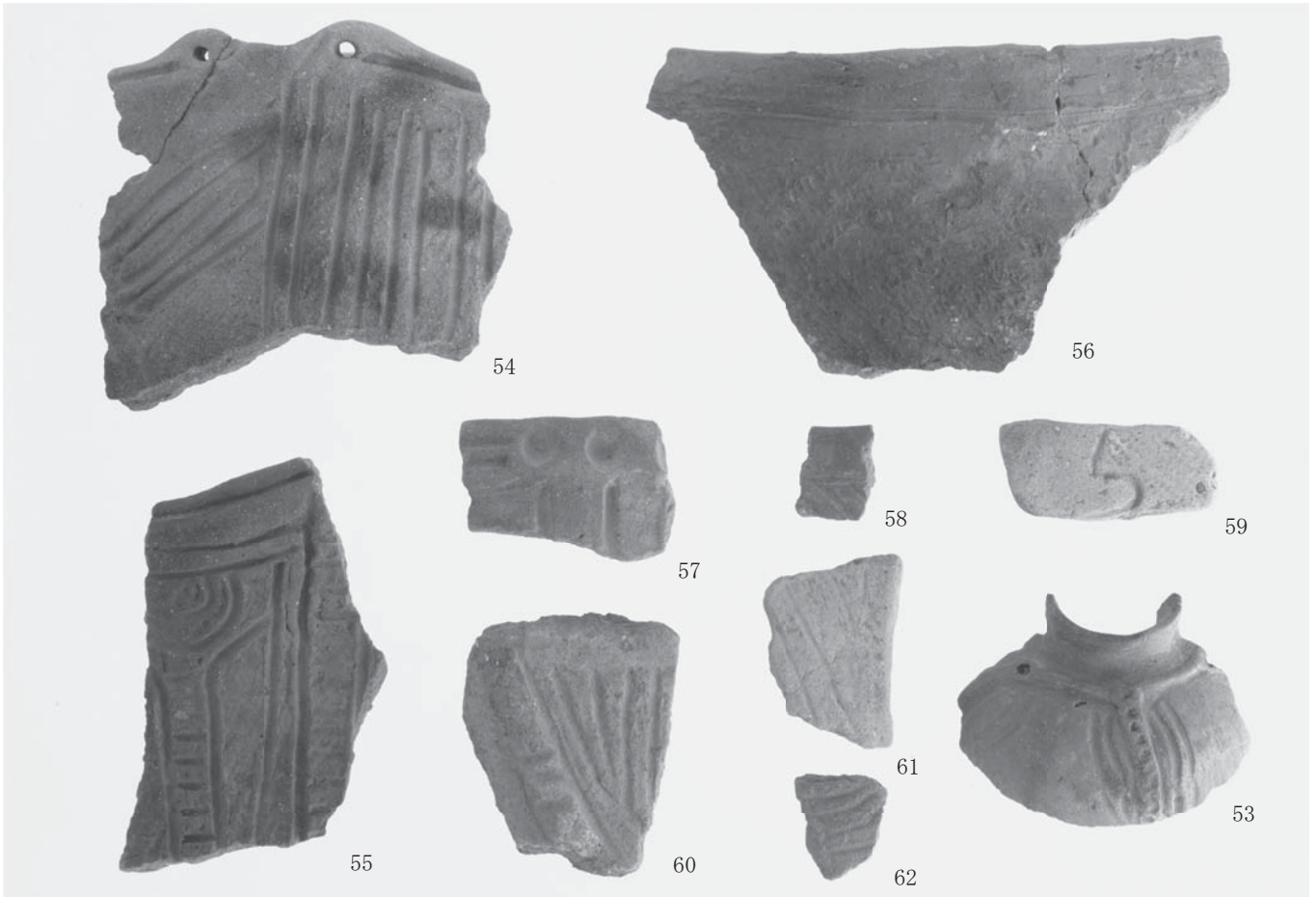


2. 出土土器⑤

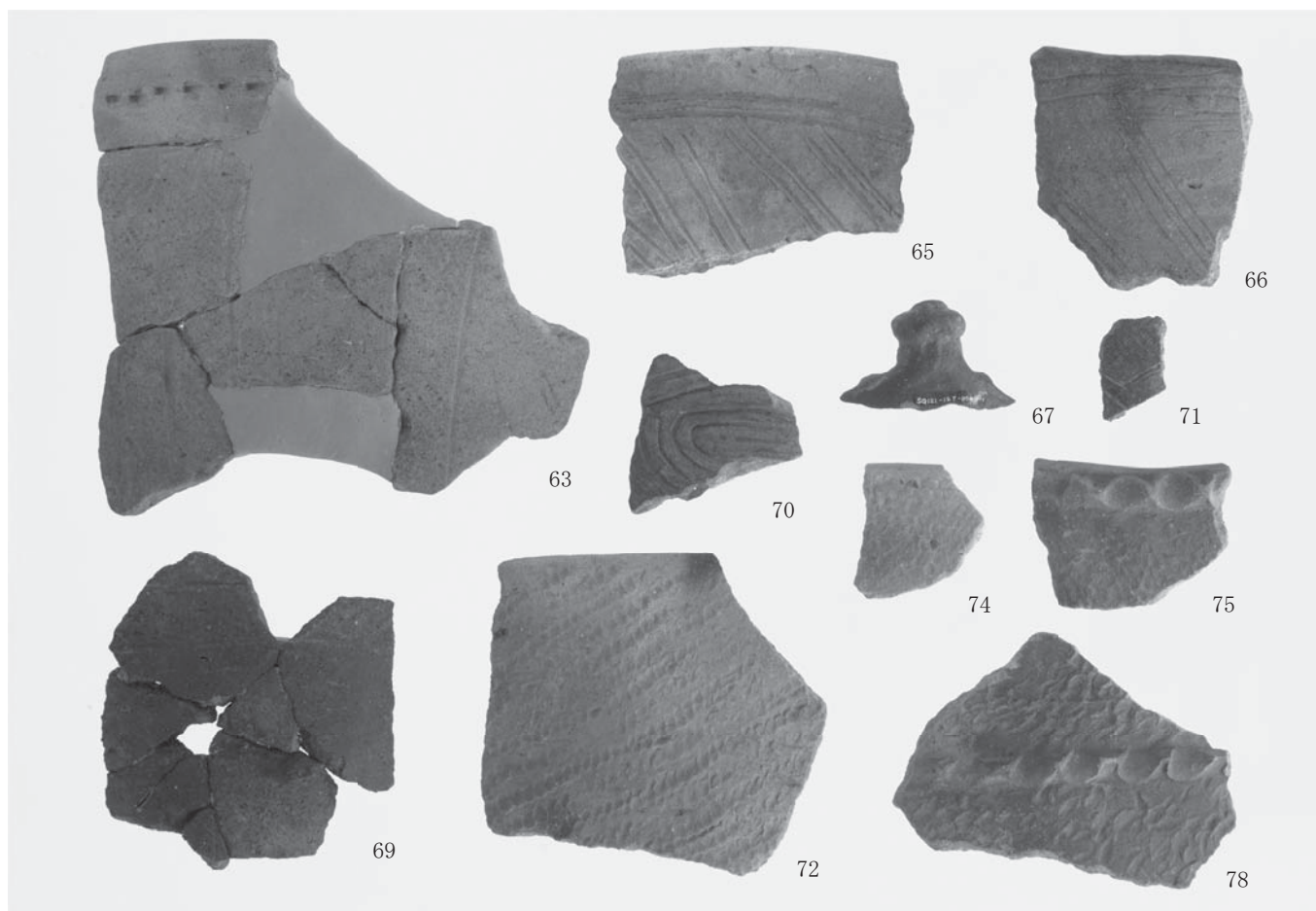




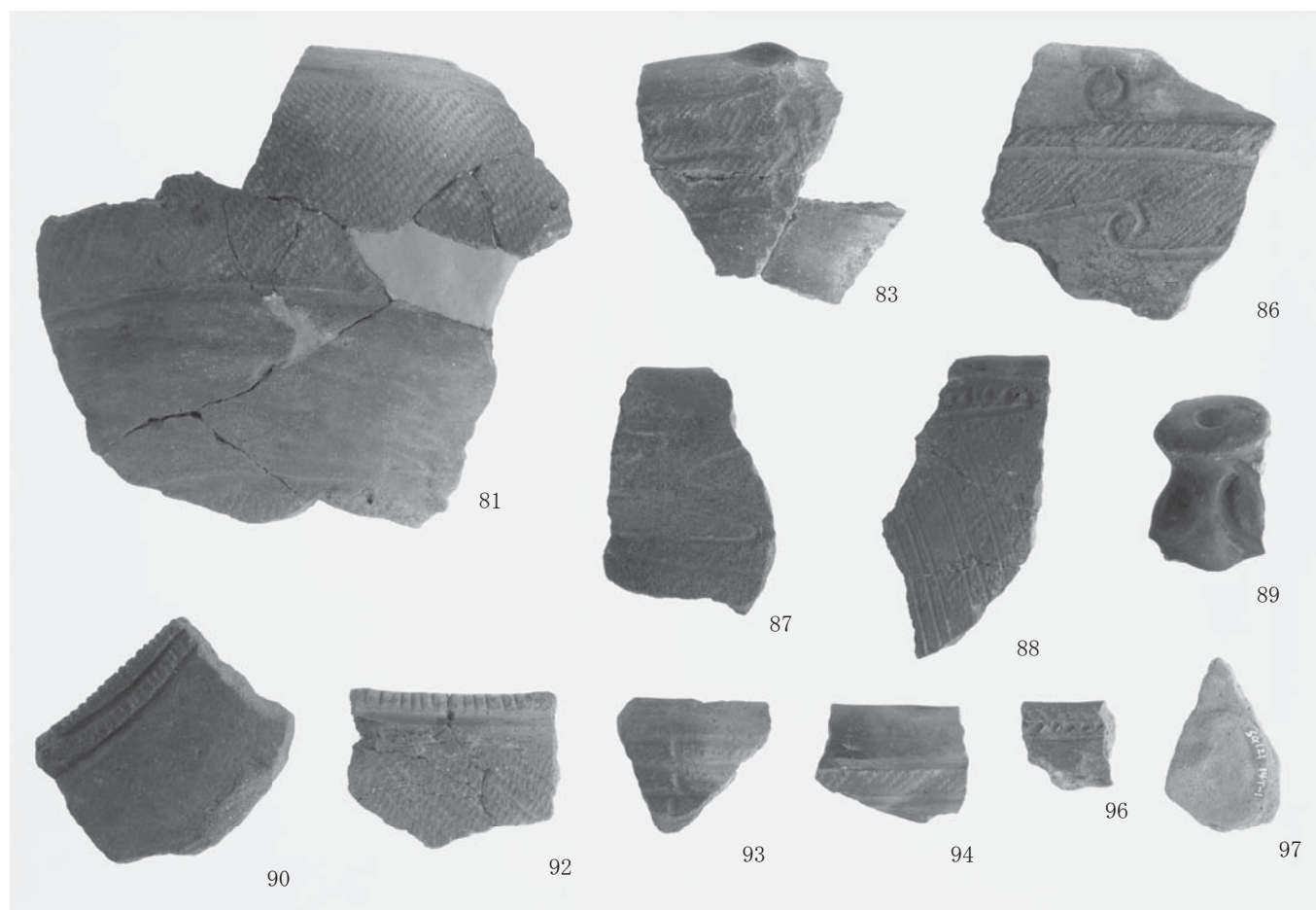
1. 出土土器⑥



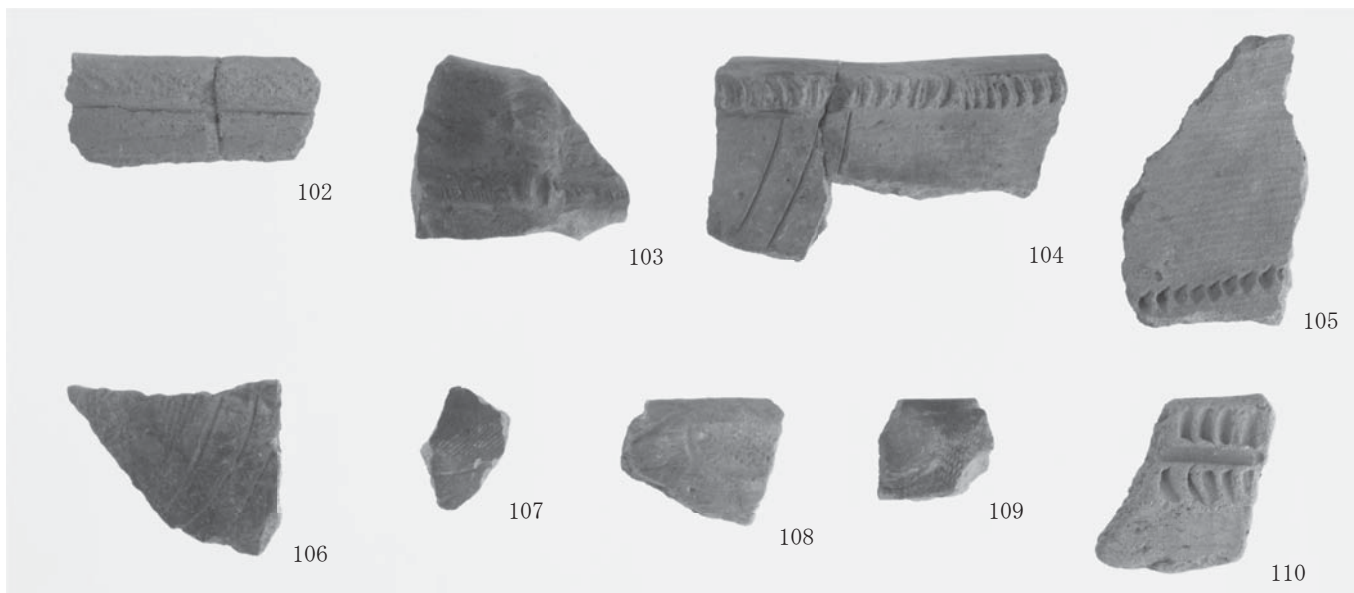
2. 出土土器⑦



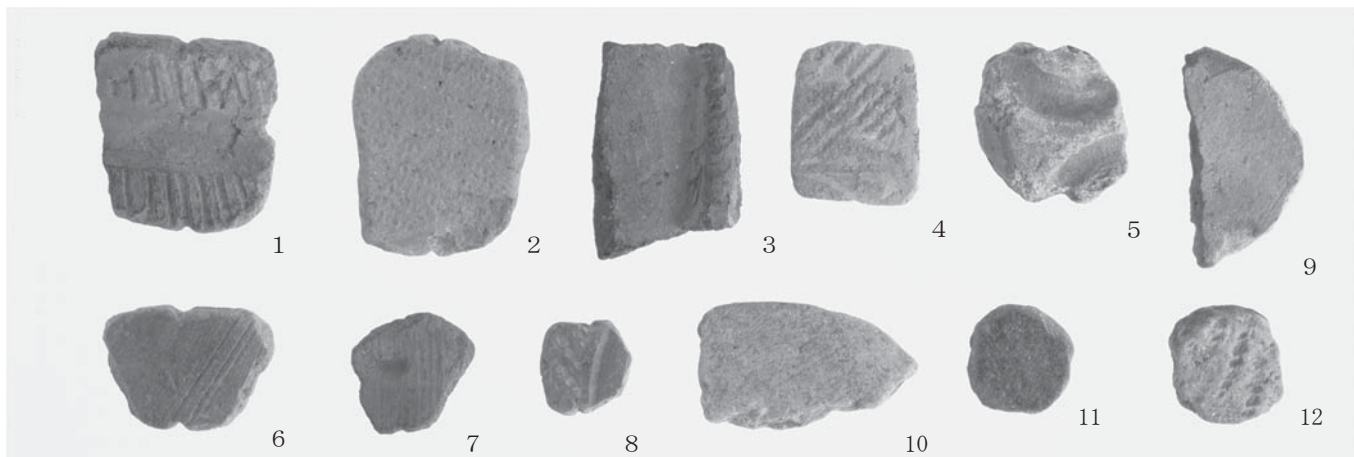
1. 出土土器⑧



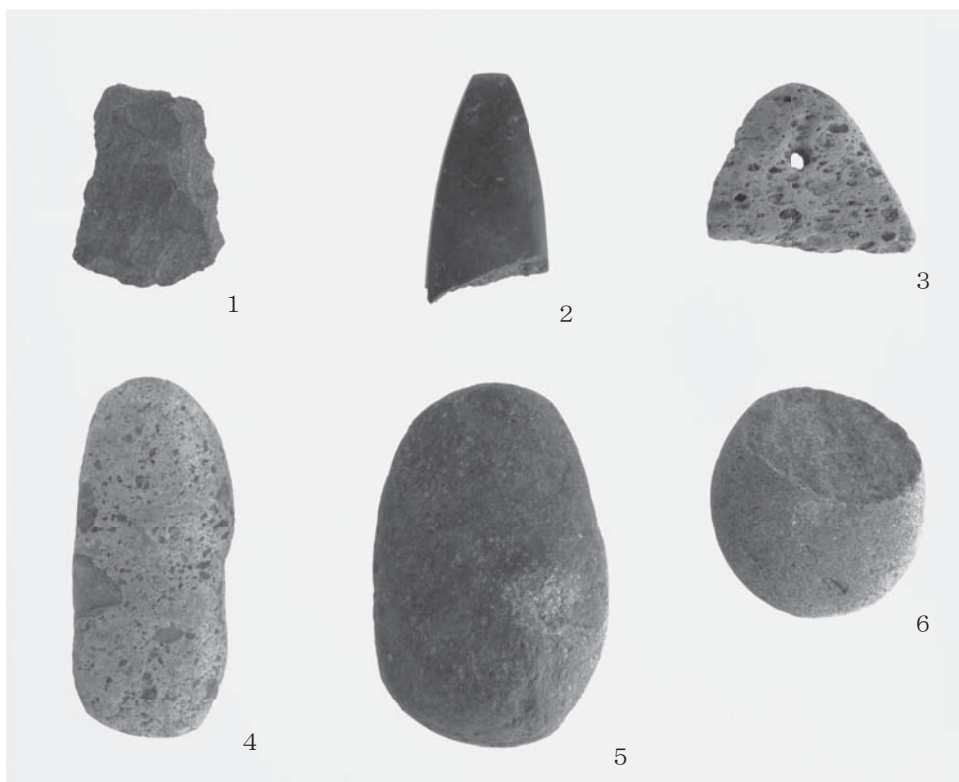
2. 出土土器⑨



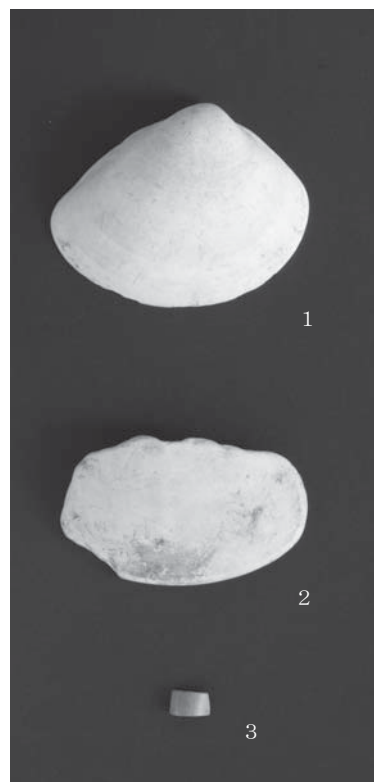
1. 出土土器⑩



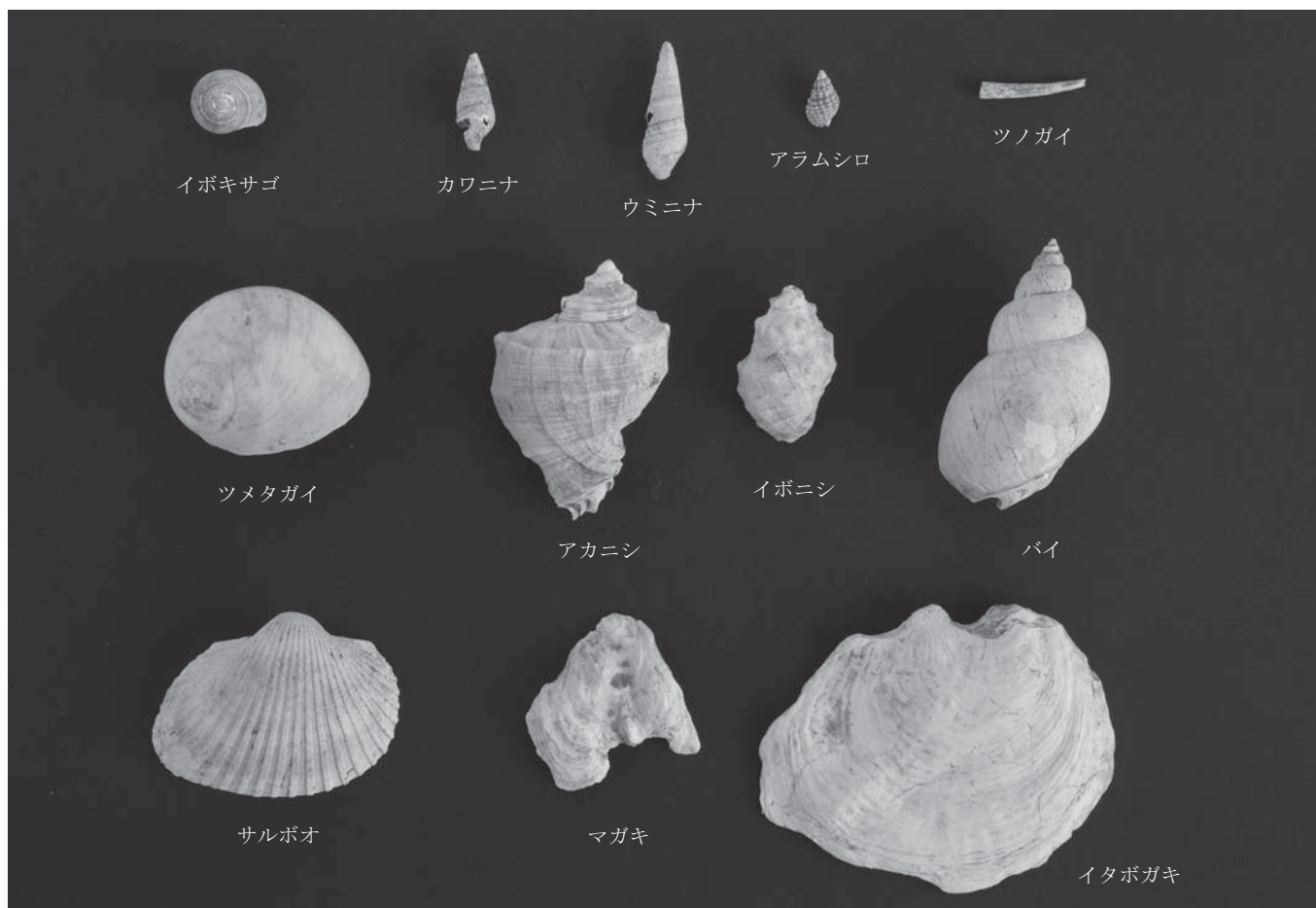
2. 出土土製品



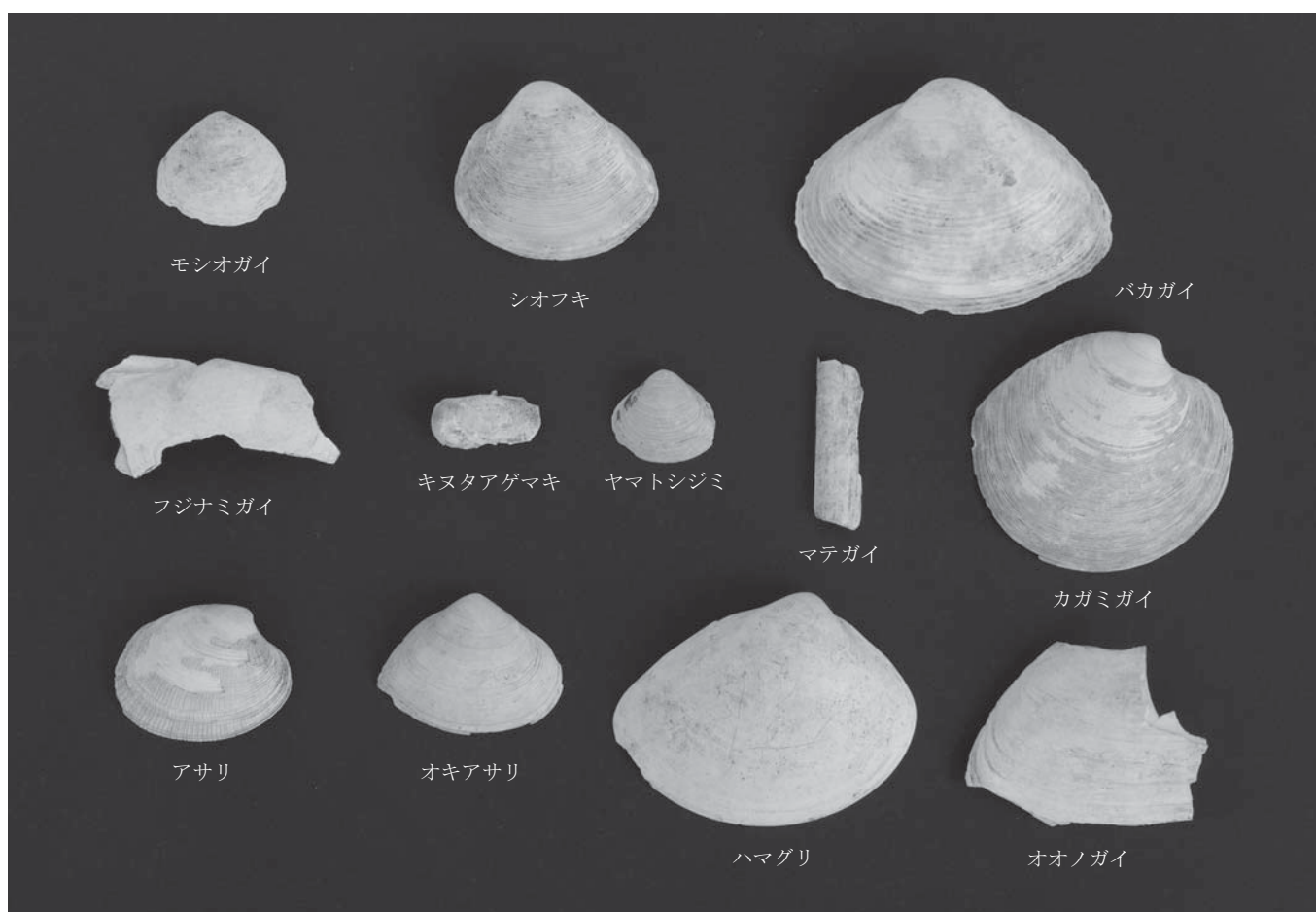
3. 出土石器



4. 出土貝製品・骨角歯牙製品



1. 貝類①



2. 貝類②

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうきゅうねんど そでがうらしないいせきはつかつちょうさほうこくしよ							
書名	平成29年度袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書							
編著者名	大河原務(編) 鎌田望里 黒住耐二 樋泉岳二							
編集機関	袖ヶ浦市教育委員会							
所在地	〒299-0292 千葉県袖ヶ浦市坂戸市場1番地1				TEL 0438-62-2111			
発行年月日	2018年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
どどめ 百々目木C 遺跡 第4次調査	ちばけんそでがうらし 千葉県袖ヶ浦市 くらなみあざどどめ 蔵波字百々目木 2,905番地6	12229	SG037	35° 43' 52"	139° 99' 20"	20170414 ～ 20170421	660.27/ 7,154.41	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
百々目木C 遺跡	包蔵地	縄文時代	縄文時代土坑1基・炉穴 2基	縄文時代土器・ 石器	調査区北西部からは西側に向けて入り 込む埋没谷を確認した。			
要約	調査区南西部からは縄文時代早期の遺物が出土し、炉穴2基が検出された。調査区南西部以外からは土坑1 基が検出されたのみで、遺物はほとんど出土しないことから、台地縁辺部を中心に、遺構・遺物が分布してい ることが判明した。							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はなかけ 鼻欠遺跡・ 鼻欠古墳群 第3・4次調査	ちばけんそでがうらし 千葉県袖ヶ浦市 かんのうあざさが 神納字下り 3,181番地7	12229	SG122	35° 25' 57"	139° 58' 24"	20170612 ～ 20170704	260.7	確認調査 ・ 記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
鼻欠遺跡・ 鼻欠古墳群	集落跡 古墳	縄文時代 古墳時代	縄文時代陥穴1基 古墳時代古墳周溝	古墳時代土師器	1号墳の周溝内から土坑が1基検出さ れた。			
要約	鼻欠1号墳は円墳であることが明らかとなった。1号墳の周溝は調査区南側から北側に向かってスロープ状 に立ち上がる。周溝からは、土師器片が出土した。							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ちゅうろ 中六遺跡 第23次調査	ちばけんそでがうらし 千葉県袖ヶ浦市 くらなみあざちゅうろ 蔵波字中六 1,259番地16、 1,261番地3	12229	SG013	35° 26' 08"	140° 00' 16"	20170721 ～ 20170731	98.6/ 1,498.51	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
中六遺跡	包蔵地 集落跡	縄文時代 近世	近世道路状遺構2条	縄文時代土器	調査区北西側を中心に土坑が検出され た。			
要約	土坑4基と道路状遺構2条が検出された。道路状遺構のうち1条は第1次調査で検出された道路状遺構の延 長部と推測される。宝永の火山灰の堆積を確認したことから、近世以前の遺構とみられる。							

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
うさぎやっだい 兎谷台遺跡	ちばけんそでがうらし 千葉県袖ヶ浦市 くぼたあぎにのやま 久保田字二ノ山 1,534番地2の一 部	12229	SG124	35° 26' 05"	140° 02' 11"	20170807 ～ 20170818	36.69/ 75.3	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
兎谷台遺跡	包蔵地	縄文時代	縄文時代土坑1基	縄文時代土器	新时期テフラの堆積を確認した。			
要約	縄文時代早期の土器を伴う土坑が1基検出された。舌状台地の縁辺部まで遺跡が広がっていることが明らかとなった。							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
みやのこし 宮ノ越貝塚	ちばけんそでがうらし 千葉県袖ヶ浦市 しもつたあぎみそのぎき 下新田字未園崎 1,923番地	12229	SG121	35° 25' 11"	139° 59' 46"	20160202 ～ 20160217	240/ 1,822	保存目的 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
宮ノ越貝塚	貝塚	縄文時代	縄文時代中～後期貝層 1箇所 縄文時代土坑3基 弥生～古墳時代住居 13軒 奈良・平安時代住居1軒	縄文時代土器・ 石器、弥生土器、 古墳時代土師 器・須恵器、 奈良・平安時代 土師器・須恵器、 中世陶磁器、近 世陶磁器	馬蹄形貝層の南限が明らかとなった。 また、中央部に関しては、昭和60年の 貝層分布調査範囲より広がる可能性が ある。貝層分布範囲内の土坑2基より 堀之内1式の土器が出土し、内部から 人骨を検出した。			
要約	宮ノ越貝塚における初めての発掘調査である。調査範囲北部において、縄文時代中～後期の貝層が良好に遺存しており、馬蹄形貝層の南限に相当することが明らかになった。貝層サンプル採取箇所から、上層に後期中葉加曾利B式期の貝層、下層に中期中葉加曾利EⅡ～後期前葉堀之内式期の貝層が堆積していることが判明したが、中期後葉の出土土器量が少ないことから、中期中葉～後期中葉にかけて継続的に形成されたものかは不明である。 調査区南部は近世以降と思われる造成や耕作の影響を受けているが、弥生時代後期～奈良・平安時代にかけての遺構が密に分布していることが明らかとなった。							

2018年3月20日 印刷

2018年3月28日 発行

## 平成29年度 千葉県 袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書

百々目木C遺跡第4次調査 鼻欠遺跡・鼻欠古墳群第3・4次調査 中六遺跡第23次調査 兎谷台遺跡 宮ノ越貝塚

発行 袖ヶ浦市教育委員会

千葉県袖ヶ浦市坂戸市場1番地1

電話 0438-62-2111

印刷 ワタナベメディアプロダクツ株式会社

千葉県木更津市潮見4丁目14番4号

電話 0438-36-5361

